

大宰府条坊跡XV

—陶磁器分類編—



2000

太宰府市教育委員会

大宰府条坊跡XV

—陶磁器分類編—

2000

太宰府市教育委員会

序

大宰府条坊跡は奈良・平安時代に大宰府政庁を中心としてつくられていた都市遺跡で、奈良・平安時代には「遠の朝廷」「天下の一都会」と唱われました。このことを実証するように太宰府市内で行われる発掘調査では、中国や朝鮮半島から持ち込まれた大量の陶磁器が出土し、大宰府という都市の経済的繁栄ぶりを知ることができます。

本書はこれら発掘調査によって蓄積された陶磁器の内容を整理し、広く理解と活用頂けるよう意図し、これまでの成果を集約し作成したものであります。

本書が、発掘調査報告書を理解するための手引きとして利用して頂き、さらに、内外の学術と文化の交流にささやかに一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、資料の提供や御指導頂きました各機関の皆様に心よりお礼申し上げます。

平成12年3月
太宰府市教育委員会
教育長 長野治己

例言

1. 本書は太宰府市の文化財調査の整理・報告において使用される陶磁器の分類の改訂版である。
2. 遺物の実測は既報告分についてはそのまま使用し、未報告や追加資料については森田レイ子、宮崎亮一が行った。
3. 写真撮影は宮原健吾（京都市埋蔵文化財研究所）の協力により宮崎、森田が行い、一部はフォトハウスおか（代表岡紀久夫）に委託した。写真の色調の補正作業等は宮原、森田が行った。
4. 図の浄書は宮崎が行った。既報告分についても再トレスした。
5. 本書の執筆は山本信夫が行った。
6. 全体の編集は山本、森田と協議のうえ、宮崎が行った。

目次

1、本書の目的	1
2、整理体制と組織	1
3、分類の問題と補足	2
4、陶磁器分類	12
【1】磁器の分類	
(1) 白磁	12
(2) 越州窯系青磁	29
(3) 初期龍泉・同安窯系青磁0類	36
(4) 龍泉窯系青磁	37
(5) 同安窯系青磁	47
(6) 初期高麗青磁	49
【2】陶器の分類	53
5、磁器の属性	71

1、本書の目的

太宰府市教育委員会の刊行した古代、中世遺跡の報告書は、出土遺物に関して一定の分類基準をつくり、紙面の制約などにより掲載できない遺物に対しては、記号化を行って、把握が可能なように努めている。本書はこの手引きとなる陶磁器分類編である。

今後、太宰府市教育委員会が刊行する報告書や整理等で使用される陶磁器の分類は、原則として、本書の分類基準を用いることとする。また、過去の報告書や整理に用いられた分類との整合については表2を参照していただきたい。

2、整理体制と組織

平成11年度の整理に関する庶務体制は以下のとおりである。

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥（～6月30日）
		白石純一（7月1日～）
	文化財課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫（整理担当）
	主任主事	藤井泰人
主事		今村江利子（～6月30日）
		野寄美希（7月1日～）
	嘱託	鈴木弘江
調査	技術主査	城戸康利
	主任技師	山村信榮
		中島恒次郎
		井上信正
	技師	高橋 学
		宮崎亮一（整理担当）
	技師（嘱託）	下川可容子
		森田レイ子（整理担当）

なお資料収集に際しては次の方々からご指導、ご協力を得た。記して感謝いたします。

（順不同・敬称略）

横田賢次郎（九州歴史資料館）、池崎謙二（福岡市教育委員会）、吉武学（福岡市博物館）、加藤良彦（福岡市埋蔵文化財センター）、奥村俊久、藤尾薫（筑紫野市教育委員会）、宮原健吾（京都市埋蔵文化財研究所）、石田琳圃（観世音寺）

3、分類の問題と補足

1、対象範囲と年代範囲

陶磁器分類のうち白磁、青磁の一般的器種である碗・皿は横田・森田1978（以下適宜旧版と記す）を基礎として踏襲したものであるが、この後に追加、修正があり、表2にこの点の出自をまとめている。陶器の分類は「大宰府条坊跡Ⅱ・Ⅲ」を基礎にして追加、改変したものである（下記文献（1）参照）。

ここに掲載する陶磁は主として出土陶磁に限定し、美術陶磁の種類まで網羅したものではない。また、出土陶磁についても一般的で、全国的に分布が確認される類に限定している。

年代範囲については8世紀後半から14世紀中頃までの陶磁器を対象とした。

陶磁器は遺跡の年代解明に有効な編年資料である。陶磁器編年には諸学説もあるが、ここでは大宰府編年に基づく年代観を中心とした。年代の基礎部分是在地土器編年の方がより適している、陶磁器編年は土器編年からマクロ的に帰納された部分である。現在の大宰府土器編年と陶磁器の年代対照は表1にあげた。

2 分類基準

現在使用している陶磁器分類の原典は以下のものである。

- (1) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』1978

山本信夫「土器の分類」『大宰府条坊跡Ⅱ』太宰府市の文化財 第7集 1983

山本信夫「土器分類の追加」『大宰府条坊跡Ⅲ』太宰府市の文化財 第8集 1984

白磁Ⅰ～Ⅸ、越州窯系青磁Ⅰ～Ⅱ、同安窯系青磁Ⅰ～Ⅳ、龍泉窯系青磁Ⅰ～Ⅲの分類、8世紀末～14世紀中頃までの碗・皿の分類。記号としてⅠ・Ⅱ……を使用。

- (2) 森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』1982

白磁A～Eの分類、14～16世紀、時代順にA・B・C・D・Eの5群に分類。

- (3) 小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』1982

明染付の分類、15～16世紀、大宰府分類は設定していないので小野分類を使用する。

- (4) 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.2』1982

龍泉窯系青磁の分類、15～16世紀。(1)で分類化されていない14世紀後半以降の龍泉窯系青磁分類は上田分類を使う。記号として〈器形、文様系統〉A・B……。(施文)Ⅰ・Ⅱ……。(施釉法)a・b……。を使用。なお(上田)AⅠ類=(大宰府)Ⅲ類、BⅠ類=Ⅱb類(旧版15b類)、BⅠ'・CⅠ・DⅠ類=Ⅳ類であり、この部分は後者の大宰府分類を使う。

- (5) 山本信夫「日本における初期高麗青磁について—大宰府出土例を中心として—」『貿易陶磁研究No.5』1985

表.1 大宰府土器型式と国産陶器・貿易陶磁器編年

紀年編	A.D.	大宰府土器型式	磁器区分	国産陶器型式 (型式の上段)		国産磁器	準国産磁器
				瓦胎	磁胎		
⑥	800	V	(A古)	健甕O-10 井上・羽衣・羽	良門?・藤内	白磁I類 鹿州陶系青磁II類 長沙陶系青磁・黄胎 磁器・磁胎	唐三彩・二彩 絞胎
	825	VI		黒磁K-14	良門・赤北・(佛 器)・(赤黄K-15)		
	850	VII	(A新)	福岡S-4	博多		青磁磁器・磁胎 初期イスラム陶器
	900	VIII		黒磁K-90	黒磁K-90		
①	925	IX		虎頭山I (新井O-53)	近江		
	950						
	1000	X		折戸O-53		鹿州陶系青磁III類 白磁IX類	
	1050	XI		東山H-72 (丸石2)			
②	1100	XII	A B	九石2 百代寺 東山H-105 藤岡S-1		白磁VII,III,IV,VI-3,VI,XII, XIII類 黒II,IV,V,VI,VII類	初期龍泉窯系・阿安陶系青磁の類 龍州陶系青磁 初期高麗青磁II,III類 曹白磁
	1150	XIV	D			龍泉陶系青磁I-1~4,6, III類 阿安陶系青磁I~IV,III類	白磁VII,II,III,IV類増加 白磁VII,II,III類
	1200	XV					
	1230	XVI	E			龍泉陶系青磁II-a類	白磁VII-2類
③	1250	XVII					
③	1300	XVIII	F			龍泉陶系青磁II-b類 白磁IX類	龍泉陶系青磁II-c類 白磁X類 黒胎陶器
④	1330	XIX					
⑤	1350	XX	G			龍泉陶系青磁IV類	白磁B,C類 安南鉄胎
⑦	1450						
⑧	1500						

紀年銘資料

- ①AD.927 延長5年・大宰府74次SD205A 漆
②AD.1091 寛治5年・平安京左京4条1坊S58 井戸
③AD.1224 貞応3年・大宰府33次SD605 漆
④AD.1304 嘉元2年・大宰府109.111次SD3200漆
⑤AD.1330 元暦2年・大宰府45次SX1200池
⑥AD.784 延暦3年・長岡京102次SD10201漆
⑦AD.1459・1465,長祿3・寛正5年・福岡府井相田CII・SG16池
⑧AD.1501 文亀元年・大宰府70次SD1805漆
⑨AD.1265 文永2年・博多62次713土壊

文献

- ①九州歴史資料館『大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報』1982
②田辺昭三・吉川義彦『平安京跡発掘調査報告左京四条一坊』1975 平安京調査会
③九州歴史資料館『大宰府史跡昭和49年度発掘調査概報』1975
④九州歴史資料館『大宰府史跡昭和63年度発掘調査概報』1989
⑤九州歴史資料館『大宰府史跡昭和52年度発掘調査概報』1978
⑥長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財調査報告書第1集』1988
⑦福岡市教育委員会『井相田C遺跡II』『福岡市埋蔵文化財調査報告書179』1988
⑧九州歴史資料館『大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報』1982
⑨福岡市教育委員会『博多48』『福岡市埋蔵文化財調査報告書397』1995

初期高麗青磁Ⅰ～Ⅲの分類、記号としてⅠ・Ⅱ……を使用。南桑坊報告ではA類青磁（越州窯系青磁）に含まれて報告されたが、現在、高麗青磁であることが明らかとなっている。

(6) 山本信夫「北宋期貿易陶磁器の編年・大宰府出土例を中心として」『貿易陶磁研究No.8』1988
白磁XIの分類。北宋前期、(1)に白磁XI類を追加。類の設定以前に鴻臚館跡（福岡城）調査でまとまった資料が得られていたが、その出土年代の確証は後日に得られた。

(7) 山本信夫「新安と同時期の大宰府出土陶磁器」貿易陶磁研究会第9回発表要旨 1988
龍泉窯系青磁Ⅳの分類、(1)の分類に追加されたもの。

(8) 山本信夫「土器の分類」『大宰府条坊跡Ⅱ』大宰府市の文化財 第7集 1983
中国陶器の分類A（器形の判明する場合）、B（器形では不明。破片の軸・胎土で分類）

まず分類の基軸となる横田・森田（1978）作製の磁器分類基準（註1）について、若干触れておくが、この後に提示された森田報告も重要な点がある。

この研究は、大宰府出土資料を中心にして、8世紀後半から14世紀中頃までの体系的な貿易陶磁分類・編年・出土傾向を提示した。大宰府出土輸入中国陶磁器の型式分類と編年のこの時点における集大成といえるもので、白磁・青磁碗・皿など出土量の豊富な器種を分類し、共存関係にある在土器型式編年から輸入陶磁器の出土傾向を分析した。分類基準として、個、類、群の系列関係が重要視されており、未分類の新出資料に対しても系列拡張が可能なように配慮されている。この分類法は文様など美術的視点よりも器形、手法、胎土、施釉法、焼成方法などに判断の優位性を求めたものである（註2）。これらの点は器形に集約される。まず大分類・器形特に高台形（Ⅰ～Ⅸ類に記号化）、中分類・器形の若干の違い（1、2……に記号化）、小分類・文様の有無及び文様差（a、b……に記号化）という分類基準軸が示された。ただし上記の分類のごく一部には、記号法レベル段階のミスがあり、以後の追加分類の際に若干の混乱を生じた。

3 器種分類化における問題点

型式分類化は資料の整理・データ化に有用な方法であるが、いったん記号化すると硬化した方法となり、新出資料がそれまでの系統的記号法になじまない場合が生じてくる。1978年の分類はその時点の陶磁器を網羅しており系統的に整理されたものであったが、それ故に追加分類をいかに取り込むかという苦慮すべき一面も出てきた。下記にその一例を示す。

○越州窯系青磁Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類

旧版1978（註3）では越州窯系青磁一般器種、碗・皿・杯についてはⅠ・Ⅱ類に分類している。森田氏は翌年に早くも越州窯系青磁Ⅲ類の追加分類を行っている（註4）。

Ⅰ類は精製品で良質の胎土を用い、全面施釉が多く、高台疊付の釉を削りこの部分と内面見込みに目跡が付く。Ⅱ類は粗製品で胎土に黒色の斑点が入る。部分施釉で施釉前に白化粧を行う。Ⅱ類は形態、手法、質からみるとⅠ類とは異質の青磁であり、系統を異にするもので、その窯は福建省北部にも分布する。次にⅢ類はⅠ類から直接系譜を引く精製品で、釉の削り取りがなく（合子など

一部器種は除外) 目跡は高台見込の際にあり、内面にはない。

ここで直接的に系譜を有するのはI、III類であり、異質のII類がI類の次に番号上配置されているのは、分類整合の面で極めて都合が悪い。これは分類した森田氏も感じていたが、あえて修正することはしていない。ここに分類の記号認識と科学的根拠を同一視しようとする際の現実的なパラドックスが存在する。従って1978年段階では一応の系統的分類を完成させたが、これ以降の分類は系統的分類と非系統的追加分類の2つを含むという点を理解しておく必要がある。

○分類の拡張化と将来的な記号法

そこで分類上の問題点に対して、森田分類を今後どのように取り扱うのか意見を出してみたい。

1、分類の完全化には限界がある。すべてのものに有効な分類を待つならば、当面、記号法に基づく量化は困難となる。現状の成果から、個→類→群の関係が理論的に整備されている分類法を採用することは当然として、帰属の明らかでない陶磁器に対しては、とりあえず便宜的に記号を付けておくことも量化上必要である。

2、すでに汎用された分類方法は、より上位の科学性に結びつかない限りむやみに変更しない(ただし基準の曖昧な分類方法は訂正すべき)。もとの分類と変更した分類のつきあわせに無駄な労力と時間をとる。

3、系列、系統関係は別に考える。仮に例示をあげると

現在の分類 白磁碗II類、碗XIII類

将来の分類 広東系A(潮州○○号窯)型 白磁碗II類、碗XIII類

広東系B(西村○○号窯)型 白磁碗XIII類

この例では器形分類の上に統合的な系列をつけることでさらに分類の上位属性を集約させる。こうした方法をとれば器種の記号上に矛盾は生じても許容できる範囲に止まる。

分類の正誤について検証する場合、与えられた定義の範囲は何かという点を周知しておく必要がある。定義内容が単純であれば、個別にそこを訂正すればよいというレベルに止まる。例えば単に器形を仕分けしたというレベルであれば、ただの記号として認知すればよい。ところが定義に複合した問題が含まれている場合は注意を要する。生産手段、技術手法、装飾などの共通性や影響関係、時代性といった時間、空間の系統化を背後に意図するならば、分類方法に一定の法則が導き出されていなければならない。旧版では多少この点も考慮されている。例えば白磁碗I~IX類は年代順にI→II,III,IV,V,VI→VII,VIII→IXと並び、属性では(I)(II)(III~VIII)(IX)という群に順に整理されていて、二重の法則の上に手際よくまとめられていることが解る。

4 分類個別論・器種分類の追加と修正(表2)

旧版への影響が低い変更点や、中分類以下の追加、修正の内容については本文各項目と表2を参照してもらうこととし、ここでは旧版の分類における明らかな誤りの修正点や、今回も含めこれまでに大きく変更した点について簡単に報告しておく。

○越州窯系青磁碗I-2類の細分

碗I-2類(輪状高台)は体部形態、高台形状、目跡、法量の観察により5つの型に細分される可能性があり、それらの型の特徴は高台形状に集約されると考えている。ただしこの点は確定できない部分もあるので、あくまで筆者の仮分類として、条坊内の整理に実験的な適用を行っていた。しかし認知不十分のまま既刊の報告書に掲載されたこともあり、今後混乱が生じると懸念されるので、今回の細分類に加えることとした。

この5つの型の高台形分類としてア・イ・ウ・エ・オという記号を用いる。ア、細めの端正な角高台。イ、畳付け幅の広い角高台。ウ、端部外面を幅広く斜めに面取りし、端部内面側は浅く削る高台。エ、端部は鋭利で比較的粗く削る逆台形の高台。端部外面側がやや浮き、下面は斜行する。白磁XI類の高台形と共通点もある。オ、高い角高台。III類とは異なり一定肉厚。これらの高台形と器形の関係は本文で図示したように相関する点が多く、高台形=I-2類の器形細分とすることができる。ただしア・イ・オの体部は類似点もあり、またウはこれらと区別できる体部、目跡であるが、高台形のみではイと区別しにくいものがある。この場合は目跡で分けることはできる。現在のところ高台形分類は器形細分に有効であるという点は引き出せるが、もう少し統計的な分析も必要である。

○越州窯系青磁碗II-1a類の削除

越州窯系青磁碗II-1a類と図示されたものは、実は長沙窯系青磁碗であり、現在は真正のII-1a類の図を使うか、ないしは欠番とする(註5)。

○越州窯系青磁碗II-3類の類変更

これはI類に属する。筆者は相当量のこの類を点検したがII類に属するものはなかった。化粧土がなく、胎土に黒斑点がない点から大分類のII類に属するものではないことが明らかである。ただこのタイプの胎土には緻密な例が少なく、ガサつき、焼成も不十分な例が多いので、精製品のI類に見えないものが多い。体部外面下位から底部は施釉しない特徴からII類に属すると判断したらしい。I類には少数であるが外面下位から底部は施釉しないものも含まれる(碗I-1b、I-2の一部など)。すでに番号はI-5類(旧II-3)のような表示に変更して用いている。この碗I-5類(旧II-3)と質・部分的器形の類似する類はI-2ウ、エ類などである。森田氏は輪状高台の細分が必要と考えていたようだが、以後追加公表することはなかった。なお、すでに土橋理子氏はII類に属するものではないことを指摘している(註6)。

○越州窯系青磁III類の分類

旧版においてIII-3類とされたものは大分類レベルの誤認であり、皿III類が正しい。また森田1979(註7)において碗III類はa・無文、b・有文という2種の小分類のみなされているが、坏、皿の資料を増補して中分類の追加を行った。

○龍泉窯系青磁0類の追加

I類に先行する類として近年認知された。0番号という記号は適切ではないが、I~IV類が系統的分類であるため、やむを得ず0類とした。なおこの0類は浙江省以外に福建省の窯においても例があり、正確に言うならば龍泉窯系・岡安窯系0類としておくべきである。

○龍泉窯系青磁IV類の追加

IV類は韓国新安沈没船の発見により、内容が克明になった類である。この分析により、旧版の椀I-7類、II類はIV類への修正が必要となった。

○龍泉窯系青磁I-5類→II類への変更

上記により、空白となったII類には、今回旧版のI-5類をあてることとした。変更する利点について述べると、(1) I-5類はこれまでの分析で、年代的にはI-1~4・6類よりも後出することが明らかとなっている。龍泉窯系青磁は年代順に0→I-1~4・6→I-5→III→IVと並ぶので、変更により0→I→II→III→IVという型式・年代が系統的に整理される。(2) 外面蓮弁文椀の系列について注意しておく。椀I-6類はI-1~4類と同一の群に属し、I-5類よりも年代は古く、I-6類→I-5類への系列変化が正しい。旧版ではI-5類の次に配置されている点で、I-5類の亜種と見られていた。今回の変更でこの点の矛盾も解消できる。次に欠点としては、上記のように記号変更に伴う混乱が生じることであるが、従来記号との併用でII類(旧I-5)という表示方法とし、I-5類という番号を永久欠番にすることでこの点の回避策とできる。I-5類の番号使用を継続しても問題は生じない。また体部欠損の高台を分類する場合に、旧版では「I」(I-1~6を含む)という表示になるが、今回は「IまたはII」という表示になる。これらの欠点に対して、変更することの意味はより大きいと判断した。すでに全国的レベルでI-5類という記号が定着している現状にあり、筆者も変更を行うことに悩んだが、その決断には吉岡康暢氏の適切な指摘も重きをなしている。

○白磁椀V-1~3類とV-4類の差異

V-4類の口縁は水平に屈折し内側に鋭い稜線がつくのが基本だが、口縁上部の軸が厚く盛り上がった例(玉縁と誤認し易い)、口縁内側稜線が鈍くなる例がある。体部下位はV-1~3類が丸く深い形態に対して、V-4類は直線的に横に開き中位で上方に鈍く屈折気味になる。旧版V-3c類の図はこの点からみてV-4類の可能性が強いと察知していたが、今回実見した結果V-4類であると確定した。

○白磁皿VI類の難点

白磁皿VI-1a・b類は中・小分類で記号化に失敗している。つまり器形の違いでは中分類(1・2...)の数字番号を用いなければならなかった。VI-1a・b類はVI-1・2類としなければならない。実はVI類に有文のものが追加される。この場合VI-1類に対してVI-2の番号を付すことにした。つまりVI-1a・b類の器形で有文のものはVI-2a・b類とした(註8)。旧版の小さな混乱を踏襲すると、細分類追加の際に矛盾の程度が広がる例を示した。ただこの程度は記号上の小さなミスがあるという認識で解決できる問題である。

○白磁分類の同一異称について、白磁IX類=白磁A群

旧版1978と森田1982(註9)では同一型式に対して別分類名称が付けられているが、前文献の分類名であるIX類を使用する。また、後文献のB~Eに到る分類は新出記号であり、前文献にはないので14世紀以降の白磁はこの類別を使用する。

○白磁の空白期と白磁XI類の追加

旧版1978で設定された白磁空白期(11世紀前後~中頃)は、これを握める資料白磁XI類がその

後確認された。ただし量的には少なく、空白期に近いという表現になる。この結果、I（晩唐、五代）→XI（北宋前半）→II・IV・V類（北宋後半）への時代的、内容的変遷がスムーズに理解されるに到った。

5 陶器の分類補足

今回は北部九州以外にも出土例が確認される普及型というべきものに限り、掲載することにした。

〔大宰府条坊跡II〕および〔III〕の分類基準について、再度補足しておく。陶器は小形品から大形品におよぶ多種の器形を含み、破片から特定の器形に照合することは困難な場合が多い。同一器種においても釉調が非常に異なる場合がみられる。そこで陶器の分類については〔A〕特定の器種に分類が可能な場合、〔B〕破片の特徴から数群の異なる器種に該当し、特定の器種に限定できない場合……の2つの分類方法を併用する。〔B〕は胎土の質・色調や混入粒子の情報と、施釉・発色の傾向の相関を整理するための作業である。〔A〕との併用により、特定の器種に通じる胎土の特徴、釉色が把握されると考える。

分類〔A〕の大、中、小分類は磁器分類に準じたが、もともと雑器に有文の例は限られており、中、小分類については各器種内の内容で記号順位が異なる場合もある。

分類〔B〕陶器の胎土について、肉眼で観察される胎土中の混入物について次のような略記号を使う。a：白色粒子。b：黒色斑点（粒子というよりは高熱のため物質が溶解した感じで、焼成条件により胎土の発色が異なり、それに応じて斑点も茶色、暗紫色などの色に変化する）。またこれら混入物の相対的な量に対しては、0：混入物なし。粒子のやや多い場合は（' ），かなり多い場合は（" ）の記号を英文字の右上に打つ。a、b両方含むものもある。同一群の陶器に属する場合でも、器種が異なると釉を変える場合があり、また同一器種においても釉発色にかなりのばらつきがあるので、胎土の特色に注目する。ただし同一群において器形の大小や用途別に陶土の質を変える場合もある。先にあげたC群の中形と小形品はその一例である。今後、生産窯の資料においては、このような視点も踏まえて使用目的、材料選定、製作技術という点から器種構成を検討する必要がある。

次に分類〔A〕の上位にくるべき複数器種を統合した群分けについて追加しておきたい。これは産地推定に結びつく分類となる。胎土の特徴によりA・B・Cに大別できる。

A群・胎土は均一だが粉味を帯び、ごく少数の白色微粒子を混入するもの。これは1・2に細分される。1は黄灰色の胎土で、釉は黄褐色・茶褐色を基調とする。盤III、四耳壺、壺、水注（未分類）などがある。2は橙色・濃茶色の胎土で、釉は濃茶色（チョコレート色）を呈する。壺（未分類）、耳壺XIII、XIV、水注III、V、VI、鉢II、IVなどがある。

B群・灰色を基調とした粘性の強い細かい胎土で、黒色斑点がまばらに入る。1・2・3に細分され、器形や出土年代の差がある。鉢III、VI、壺I、II、IV、耳壺V、VI、VII、水注I（?）、II、IV、VII（?）、VIII、灯皿、燭台などがある。

C群・胎土は中形品と小形品で若干差がある。両者ともベースは黄灰色で比較的粘性の強い細かい胎土であるが、中形品ではやや粒子の粗い白色砂を多く混ぜ、黒色斑点も多い。小形品は砂や斑点が少なく緻密である。両者とも器体の大きさの割には軽く、薄手に作られる傾向があり、特に中形品では多数の混入材が器体の成形や焼き上がりの強化に結びついたと思われる。中形品には盤I、II、耳壺II、III、IV、XI（無軸）、蓋など、小形品には小口瓶、壺、行平形など多様な器種がある。これらは年代的にみて1・2に細分される。

上記のうちC群の一部は福建省磁灶窯などで類品があり、福建省産として捉えることができる。A群・B群は現在のところ窯が確定できるわけではないが、A群・広東省系、B群・浙江省系と推定している。

上記の胎土に一致しない器種として鉢I、耳壺XII、木注X、甕I～V類などがある。これらのうち耳壺XII類の胎土は比較的良好だが、他は白色粒子や黒色斑点を多く混入した粗いもので、使用目的や大型器種という点で、陶土を変えたと考えられる。このうち鉢I類と類似した胎土の例は福建省の窯に認められるという意見がある（註10）。

なお仮にA・B・C群の産地として広東・浙江・福建省を比定したが、各群の生産地範囲についてはまだ正確に解明されているわけではなく、各省の境界と生産範囲が必ずしも一致するとは限らない。従って福建省「系」という表現方法が現状では適切であろう。また仮にB・Cの2群が一地域で重複して生産された可能性が全くないかという点についても、今のところ否定できるわけではない。従って産地名よりもA・B・C群という記号を用いることがより適切と考える。

6 陶磁器の編年（表1、3、4）

青磁、白磁などの一般的器種である碗、皿は表1にA～Gの編年区分を設け、大宰府土器型式・編年と対照させて年代傾向を示した。本文中にも各類の編年区分を記述しているが、その出現時期は編年区分の最初頭である。次に陶器は青磁、白磁の年代区分と完全一致するかは明らかでなく、別に区分を設定し、貯蔵具と盤・鉢に分けて表3・4に出土傾向を示した。陶器の出現年代については例示した年代よりも古く遡り得る資料もあるが、それらの検証が完全でない部分もあるので、無難なところに留めた。一例として陶器鉢II類は14世紀前後としているが、13世紀に遡る可能性を持つ。陶磁器の年代で注意しておくべき点は、出現、増加、残存という年代幅は土器の場合よりもかなり長く、残存部分に関しては、伝世としての使用継続も視野に入れる必要がある。

註（3章）

- 1、横田實次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論叢』4 九州歴史資料館 1978
- 2、前川威洋ほか『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』(上・下巻) 福岡県教育委員会 1978
- 3、前掲書（註1）
- 4、森田勉「毛形文様のある二・三の青磁について」『古文化談叢』第6巻 九州古文化研究会 1979
- 5、山本信夫「大宰府の発掘と中国陶磁」『北九州の中国陶磁』北九州市立博物館 1988
- 6、福原考古学研究所附属博物館編『貿易陶磁—奈良・平安の中国陶磁』1993
- 7、前掲書（註4）
- 8、山本信夫「土器の分類」『大宰府発掘跡II』大宰府市の文化財 第7集 1983
- 9、森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982
- 10、森本朝子氏からご教示を得た。

4、陶磁器分類

[1] 磁器の分類

(1) 白磁

碗Ⅰ類 (Fig.1, Pla.1)

形窯・定窯系のもので、胎土は純白、乳白、乳黄灰色を呈し、緻密で精良である。軸は平均的な厚みで表面はなめらか、軸色は乳白色もしくはやや空色を帯びている。高台径より大きい焼台を使用している。

1、小さな玉縁口縁で、直線的な体部に幅広い蛇ノ目高台を持つ。施軸に二通りの方法があり、①全面施軸後、高台畳付の軸を削るが、これは手持ちで数方向に行う例が多い。②体部外面下位から底部外面には施軸しない。①の例が多い。

2、口縁部は直口で体部は僅かに内湾し、蛇ノ目高台（玉盞高台）を持つ。図示例は幅の狭い蛇ノ目縁で角形に近い。施軸はⅠ類と同様で①②がある。

a、無文。

b、口縁端部に輪花。稀に内面を縦の隆線で5分割する例がある。

3、小碗の項目参照。

4、やや扁平の玉縁状の口縁と低い高台を有するものである。高台は幅狭い蛇ノ目縁で、畳付幅を減じ輪状に近づく。釉調は他と異なり、やや空色味の発色で胎土もやや粗い。胎土や釉調はXⅠ類に近づく。この中でⅠ類の特色を離脱し、次期のXⅠ類と近似する特色を有するものを4'類とする。

5、直口縁で輪状高台のものである。一般に内厚の角高台である。完形の良い例は乏しく図示例は小碗を代用した。

1・2・5類はA期（V～IX期、8世紀末～10世紀中頃）の標識磁器で、10世紀後半以降は減少する。中でも1・2類はA期古段階（V～VI期、8世紀末～9世紀前半）に出土する。4類はやや遅れて出土開始し、上限はVIII期である。

碗Ⅱ類 (Fig.1, Pla.1・2)

高台部外面は直に、内面は斜めに削る。斜めの面は平坦でなく僅かに膨らみ、ここに削り工具のすじ目を残すことも多い。体部は内湾し、丸味を帯びている。体部外面口縁部以下は鉋削りを行い、口縁部周辺は横ナアしている。胎土には微細な黒色粒または白色粒を含んでいる。軸色は黄白色、茶黄色で、上質の場合は乳白色、淡緑白色を呈する。化粧土を有し、軸は全体に薄めにかけられ、貫入が見られる。体部外面下半には施軸されない。なお上質のⅡ-1類の口縁部破片はⅠ類、XⅠ類に誤認されることも聞くが、Ⅱ-1類の上半部は立ち上がり強く、外面の横ナア範囲は狭いという点でⅠ類、XⅠ類との区別が可能である。

C期（XⅡ～XⅢ期、11世紀後半～12世紀前半）の標識磁器である。

以下0・1・2・5類は玉縁。3・4類は玉縁ではなく、直口、内湾である。

0、軸は緑味で透明。胎土は白く他のⅡ類より良好。XⅠ類と判別困難な例があり、上質の一例に限って0類とした。

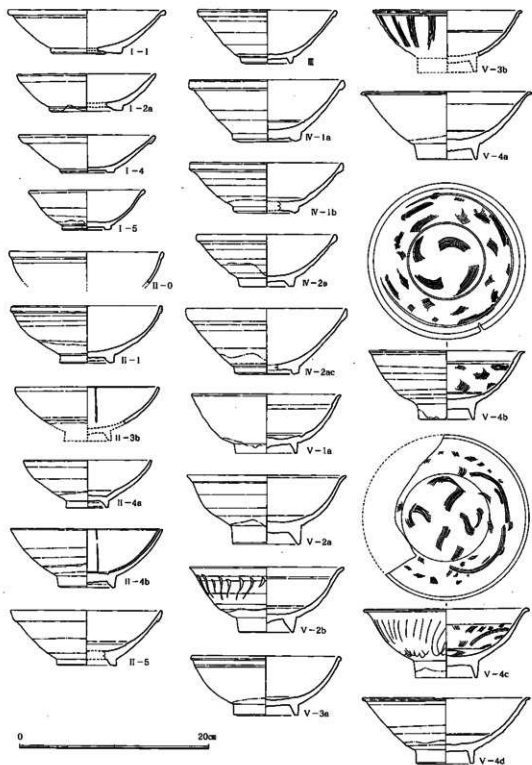


Fig.1 白磁碗I~V類 (1/4)

- 1、小さな玉縁を持ち、見込みに段がないもの。現段階での出土例は全て無文である。
- 2、旧版では1類と同様な玉縁で、見込みに段がつき、見込み側が体部よりも一段凹む（以下これを段1と記述する）。図版例は底部の破片であるため、下記の4類の可能性も残る。現在全形の判明するものはない。
 - a、無文。
 - b、体部内面を白堆線で分割する。
- 3、口縁はやや内湾した直口縁を有する。見込みに段はない。
 - a、無文。
 - b、内面を白堆線で分割する。
 - c、口縁端部に輪花を有する。
- 4、口縁はやや内湾した直口縁を有する。内面見込みに段1を持つ。
 - a、無文。
 - b、内面を白堆線で分割する。
- 5、長い扁平な玉縁で、内面見込みに段1を持つ。

椀 III 類 (Fig.1, Pla.2)

全体の器形はIV類に似て、体部は直線的。高台はIV類よりも内部の削りが深く、口縁部は小さい玉縁を持つ。胎土は灰白色を呈する。釉は薄く、体部外面下半には施釉されておらず、釉色はやや灰色もしくは黄色味を帯びている。

この類は現在IV類の亜種としてみており、IV類の中で比較的、端正な造形となる。下記の椀IV-2類の範疇に入ると考えている。旧来の記号を使う場合はIV-2 (IBIII) と表示してもよい。

椀IV類 (Fig.1, Pla.2・3)

口縁部はI、II、XI類などの玉縁よりも肉厚な玉縁である。玉縁の個体差も大きく、やや小形の例から極めて厚い玉縁まで、また、高台についても端正なものから粗雑なものまで差が大きい。体部の器内は厚い。高台は幅広く、また削り出しが浅いため、底部の器内も厚い。玉縁直下から底部にかけ回転削り痕を残し、外面の横ナア範囲は玉縁周囲の狭い範囲に限られる場合が多い。胎土は粗く、大方灰色気味の白色を呈し、胎土についても比較的良好なものと小さく空洞をつくる粗雑な例まで落差が大きい。釉は黄色ないし灰色を帯びた白色を呈し、若干厚目に施釉され、釉表面には気泡や凹凸がある。体部外面下半以下、底部には施釉されない。施釉は外面上位、中位で止まるものと下部まで達する例がある。例外的に内面見込みに目跡を持つ例がある。

IV類の底部内面は①沈線、②大きく凹むもの（段1）、①+②となるもの、③段や沈線がなく平滑なものがあり、以下小分類を①③はa類、②はb類とする。

C期 (XII~XIII期、11世紀後半~12世紀前半)の標識磁器で、12世紀後半まで一定量を占める。

- 1、高台は内部の削りが浅く、2類に比べて肉厚の底部となる。
 - a、底部内面が上記①③の例である。
 - b、上記②及び①+②の例である。

c、扁平な玉縁を有するもの。

2、IV-1類より高台内部の削りを深くしたものである。

a、上記と同様。

b、上記と同様。

c、上記と同様。

上記のうちb、c類の特徴を合わせ持つ場合は、例としてIV-2bcと表記することにした。

椀V類 (Fig.1, Pla.3・4)

高台は細く高く直立する。胎土は灰白色で灰色味の強いものが多い。体部と高台部の境付近まで施軸するが、高台部まで一部かけられている例もある。外面は口縁端部近くまで削りされる。

V-1～3類はC期 (XII～XIII期、11世紀後半～12世紀前半) の標識磁器であるが、V-4類はD期 (12世紀中頃) から出土開始し、後半まで量を占める。

1、体部は下位で丸味を持ち、口縁部に向かって外上方に延び、直口縁をなす。口縁端部は丸くおさめている。

a、無文。

b、外面に寛幅きの弓形縦線を一周させ、花卉とする (以下、縦篋花卉文と略する)。

c、内面に短い擗目文を持つ。完形の例はなくVIII-0類の可能性もある。

d、口縁部に輪花、内面に短い擗目文を持つ。完形の例はなくVIII-0類の可能性もある。

2、口縁部は外反するが1類との口縁部形態の差は小さく、1、2類は同一と見てもよい。

a、無文。

b、外面に縦篋ないし縦擗目文を一周させ、花卉とする (以下、縦擗花卉文と略する)。

c、口縁端部に輪花を有する。

3、口縁端部は小さく丸め、一見玉縁風に仕上げている。体部の器肉は全体に薄い例がある。こうした例は造形が鋭利で、良質製品が多い。

a、無文。

b、外面に縦篋ないし縦擗花卉文。従来このうち擗目のみが表示されていた。施文具が異なる点では2類の場合も含め細分を要する。

c、旧版では口縁端部に輪花を有する例として図示されたが、これは実見の結果、V-4類に属するものであり、今回は新たにV-4d類に編入した。現在、真正のV-3c類は抽出できず、そのまま番号は保留した。

4、口縁部は屈折し、上端部は水平にする。端部内面には鋭い稜がつき、外方に尖る (嘴状)。同様な口縁としてはVIII-1、3類などがあり、口縁部破片では区別が困難である。

a、無文。

b、内面に短い擗目で花文を描く。篋+擗目の例あり。

c、内外面に文様。内面は擗目文、外面に縦篋花卉文。

d、口縁端部に輪花を有する (旧版V-3c類)。

[白磁]

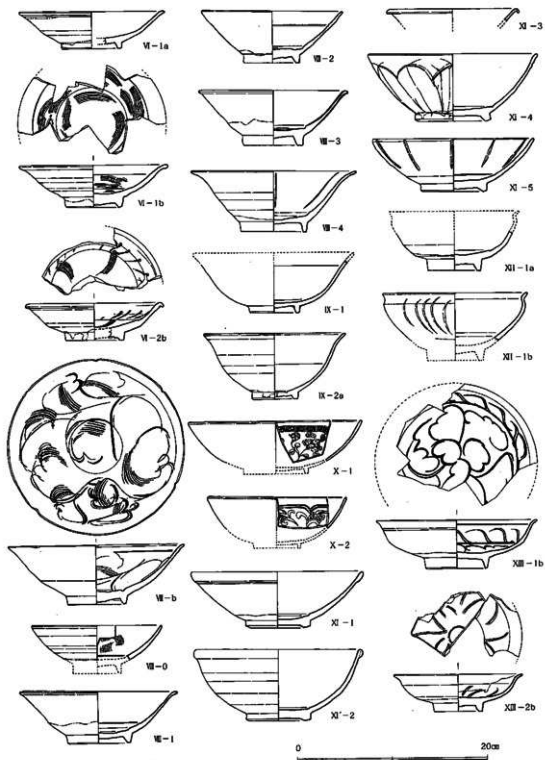


Fig.2 白磁碗VI~XIII類 (1/4)

椀VI類 (Fig.2, Pla.5)

他の椀と比べて口径が一段小さい12~14cm程度の中形椀で、器高は低く浅形を呈する。体部はやや内湾気味に傾斜する。胎土、釉調ともIV・V類と同じである。以下、VI~VIII類の高台は類似し、V類高台を短く切った形である。

C期 (XII~XIII期、11世紀後半~12世紀前半)の標準磁器である。

1、口縁部は直および弱く外反する。体部内面上位に沈線を一巡させる例もあるが、特に細分はしない。

a、無文。

b、内面に短い菊目文。体部外面に縦寛花弁文を追加する例もある。

2、口縁部をV-4類のように屈折する。従来VI-1類に図示されたものであるが、ここでVI-2類と改める。

a、無文。

b、内面に菊目文および寛描き文を追加する。

その他、体部内面下位に段または太い沈線を有するものがあり、1、2類に比べて体部中位が若干屈曲する(仮VI-3)。この手の有文の例は1、2類よりも文様が複雑で、体部内面上半に連続した縦寛文帯が追加される例がある。

椀VII類 (Fig.2, Pla.5)

この類は青白磁椀と形態、文様が類似する。ただし、青白磁に比べて器肉(特に上半部)が厚く、高台は鈍重である。体部は高台の付け根から直接延びてロート状を呈し、体部上半は外方へ開く。口縁端部は長めに外反する。内面見込みの径は小さく、その外周は太い沈線状の段がつく。高台はV類より低い。胎土、釉調はIV・V類等と同じである。

D期 (XIV~XV期、12世紀中頃~後半)の標準磁器である。

a、無文。例はあまり見ない。

b、口縁部は輪花の有無があり、体部内面には菊刀や寛による草花文様が施されている。

c、体部内面を白堆線で分割する例がある。cは下記のVIII-4類の形態とほぼ同形であり、体部のみでは区別がつかない。内面の軸掻き取りの有無でVII・VIII類と区別できるが、掻き取りのある例が比較的多い点から二者合めてVIII-4類とした方が適切と考える。この場合、c類に軸掻き取りがない点は、VIII-4類の重ね焼きの際に最上段に置かれたためと理解される。

椀VIII類 (Fig.2, Pla.5・6)

内面見込みの軸を環状に掻き取ったものである。高台はVI・VII類と類似する。体部は斜上方に直線的に開き、V類の丸味を有する体部と区別が可能である。旧版では下記の1類と3類は見込み掻き取り部分の段形状で区別されており、1類・体部内面に沿って段が付かない。3類・体部と底部の境で段が付くという基準で分類されている。このため全体は有段の0・2・3類、無段の1類という分類上のくくりとなるが、0→2→3→1の分類系列の方がよいと思われる。胎土、釉調はIV・V類等と同じである。D期 (XIV~XV期、12世紀中頃~後半)の標準磁器である。

0、VIII類の中では古相の可能性があり、1~3類よりも後で明らかになった類であるため0類（仮番号）とした。この類は内面掻き取りの有無があり、1~3類に比べて体部は内湾となる例が多い。無文と内面に短い歯目文を有する例がある。

1、口縁部は屈折し、1・3類の口縁部はV-4類と同一形である。見込みの軸を掻き取る部分は体部に沿って行われるため、2・3類のように段が付かない。

2、直口縁。見込みに段が付く。

3、口縁部は1類と同じ。見込みに段が付く。

4、口縁部は外反する。内面は縦白堆線で5~6に分割する。前記したように形態ではVII-c類との差はない。

椀IX類 (Fig.2, Pla.6)

口縁部周辺は施軸後に軸を掻き取り、口禿げとする。施軸方法により2つに大別する。内面見込みに圈線を持つ例があり、その径が高台径より広い場合と（図IX-1例）、高台径よりも小さく段状になる例があり（図IX-2a例）、後者では底部中心が凸状に膨らむ場合もある。高台は一見、VI~VII類のように短い、これらよりも小形で下端面が広く断面方形に近い。胎土は灰白色を呈し、釉は空色を帯びた灰白色や灰緑色を呈し、厚く不透明のものが多く。上手から下手まで精粗のばらつきが多い。F期（13世紀中頃~14世紀初頭前後）の標識磁器であり、13世紀後半~14世紀前半に増加する。

1、高台まで全面施軸されている。

2、体部外面下位から底部外面に施軸しない。

a、無文。

b、見込みに花などの印文があるもの。数は少ない。

椀X類 (Fig.2)

薄胎（1.5~3mm）で精巧・上質な作りである。小形品も含め器種は多く、椀・小椀・皿・小皿・合子・小壺・小水注等がある。青白磁的な器形・器種であるが、釉は白色の例が大半であり、白磁として分類する。大半は内面型文で、精緻な凸文（浮文）を持つが、無文もある。全面施軸後に口縁部の小範囲に軸削りを行う。ただし、小皿・小水注などの一部は口縁部の軸削りをせず、体部外面下位から底部外面に施軸しない例がある。椀は他の類に比べて高台が極めて小さいが鋭利である。体部はゆるく丸味を持ち、体部形から2つに大別される。鎌倉市今小路遺跡などでは豊富な器種がある。分布は広いが出土数は少ない。F期（13世紀中頃~14世紀初頭前後）の準標識磁器であるが、13世紀後半~末頃に到って出土するようになる。

1、2類よりも器高比が低く、浅形となる。体部上半は2類より傾斜する。

a、無文。

b、内面全体に型文を施すもの。

2、口径に対して器高比が高いもの。1類より深形をなす。

a、上記と同様。

b、上記と同様。

碗XI類 (Fig.2, Pla.6・7)

高台は低い輪状で内側は斜行し、底部外面は丁寧に水平に削り、II、IV類より薄く端正である。XI類の高台皿付は外面端部が若干浮く例が典型的な形状であり、しかもII、IV類と比べて鋭利である。見込みには段や沈線があり、この径が広い。胎土は僅かに青白色を帯びる白色で淡灰色味を帯びるものもある。I類より硬質でやや粗いがII、IV類よりは精良である。軸は平均的な厚みで、貫入があり、表面は滑らかである。釉色は僅かに水色味を帯びる白色で淡緑白色味や黄白色味(焼成のあまい場合)を帯びるものがある。体部外面下位から高台外面には施釉されず、露胎部は橙色味に発色する。体部外面中位以下は篋削り、中位より上は横ナデでII、IV類より横ナデ範囲は広い(II、IV類は口縁直下より篋削りされる)。焼台は高台径より小さい円形のものを使用しており、底部外面に円形焼台痕がある。なおI類のように施釉後高台部の軸を再度削り落とすことはなく、また化粧土も通常ない。B期(X~XI期、10世紀後半~11世紀中頃)の標識磁器である。

1、口縁部は折り重ねて玉縁とする。器形は碗I類に類似するが、体部上位は丸味を帯び、見込みに浅い段Iを有する点は異質である。

2、図示例の胎土は淡灰色でやや粗く気泡がある。軸は灰色で軟らかい光沢を有し細かく貫入が入る。釉調が灰色味を帯び、やや欠点となる例は分類の右上に「J」を付して区別する。口縁部断面は扁平な三角形で外面に鈍く稜を有し、体部はI類よりも丸味を有する。高台形、体部形、釉色などはII、IV類に近い例があり、注意を要するが、上記したように丁寧に手法と鋭利さ、軸、胎土の均一さ等で判別可能である。

3、口縁部は外側に大きく曲げる。軸は水色味の白色。透明で柔らかい光沢がある。

4、口縁部は直に開き、外面に幅広い陽刻鑄蓮弁文を有する。図示した例はやや焼成があまく、柔らかい光沢を有し、貫入がある。

5、体部は丸味を有し、口縁部は直もしくは薄く僅かに外反する。体部外面に5分割前後の篋押圧縦線、口縁に輪花を持つ。口縁部は白磁碗V-1・2類に類似する。

XI'、XI類の典型例に対し、釉調、造形、手法などに若干の欠点を持つ例を()とした。

碗XII類 (Fig.2, Pla.7)

1、体部は内湾気味に立ち上がり、上位で反転し、端部は外反する。内面の見込み外周に段(体部側が薄くなる)が付く(以下、段2と記述する)。高台は碗II類と同じか、やや長く高めとなる。胎土、釉調、化粧土を有する点は共にII類と同様であるが、上質のものが多い。広東系。

C期(XII~XIII期、11世紀後半~12世紀前半)の標識磁器である。

a、無文。

b、外面に縦匏花弁文を施す。

碗XIII類 (Fig.2, Pla.8)

1、皿としてもよいが、浅形碗として分類した。口縁部は外反する。底部内面径は広く体部下位は横に延び、体部中位で湾曲する。高台は碗II類を長くした形状でII類よりも高い。胎土、釉、化粧

土を持つ点はII類と同様であり、やや上質の例が多い。

C期（XII～XIII期、11世紀後半～12世紀前半）の標識磁器である。

a、無文。

b、内面寛描き文を施す。

2、I類よりも一段小形品である。高台はやや低い例が多い。粗質の例も多い。

a、I類と同様。

b、I類と同様。

椀（小椀）XIV類

口縁部は外側に大きく屈曲し、体部は丸く腰が張り、その上位は直に立ち気味となる。高台は細めで高い。全体的に薄手で、小形の椀の例が多い。胎土は白色で硬質、釉は白色で表面は滑らか、光沢を有する。上質例が多い。

a、無文。

b、口縁部に輪花、体部内面に白堆線を有する。

椀B類

口縁部は外反形と、直口の2種があり、体部上半は薄手に仕上げる。体部下半は丸く腰が張る。高台は肉厚で疊付は幅広い。内側部分は斜めに削り出され、外側下端は横方向に面取りされる。体部上半の薄さに比べて、下半は肉厚で力強く、元型式特有の造形を見せる。高台内側斜行部分に黄褐色に変化した砂粒が揚げ付く。胎土は白色を呈し、硬質、緻密である。釉は淡く青味を帯びた白濁色で、高台外側の面取り上端までかかり、底部外面は無釉。また、粘性の強い釉のため大きく釉が垂下することは少ない。内面に繊細で緻密な型文（凸文）を有する例も多いが、釉厚のため不鮮明となる。枢府系。G期（14世紀初頭～後半）の標識磁器である。

椀C類

体部は内湾し器内は厚く、腰が深い形態をとる。高台は幅広い肉厚の角形。形は力強く、上記のB類（枢府系）に形態は類似点もあるが、全体に肉厚で、鈍重さがある。胎土は粘質味を帯び緻密であるが、白灰色、灰色、淡茶色など灰色系の色調をなす。釉は灰色味を帯び、高台外面近くまで施釉され、底部外面は無釉。内底面に草花文の印文を持つ場合が多い。また、B類は砂底になるのに対して、砂は付着しない。

1、浅形。口縁部が直口形。

I類、内面上位に圈線があり、また圈線以下に柵目文を持つ例がある。

II類、無文。

2、深形。口縁部は直ないし外反形。底部内面中央のみに凹印文（草花）を持つ例がある。

上記のものをピロースク型とも呼ぶが、その由来は、沖縄県石垣島で出土した白磁（椀）の一群に対して、調査者である金武氏が型式名をつけた。ただし金武氏は上記I類のみをピロースク型に限定して分類するが、森田氏は1、2類を併せて白磁C類・ピロースク型に包括し、2者の分類基準には若干の差異がある。なお1、2類の胎土、釉、高台形に差はない。近年、沖縄だけでなく九

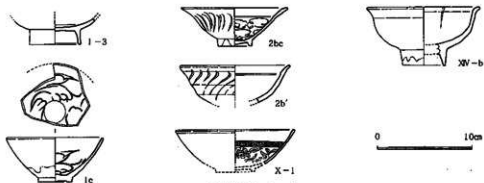


Fig.3 白磁小碗 (1/4)

州以東でも発見されるようになったが、極めて少数で、まとまった量を出す遺跡は現在沖縄に限られる。年代については沖縄県今歸仁城跡、勝連城跡などで15世紀前後と推定され、金武氏は1類を13世紀末～14世紀中頃、2類を14世紀後半とみるが、大宰府において2類の直口形に近いタイプは14世紀初頭～中頃に編年される例がある。

小碗

小碗は出土数が少なく、碗と器形が一致する類 (VIII、XIVなど) もあり、碗分類と同記号を採用可能と予想される。しかし小碗特有の形もあり、適用にあたって難儀な部分もある。この点で小碗分類は今後の課題としておく。一応便宜的に大分類記号のみは碗と一致させておくことにしたい。

小碗I類 (Fig.3, Pla.8)

3、旧版では碗I-3類としている。一般サイズの碗とは区別され口径が一段小さく、蓋の可能性がある。細く高い高台で、全面施釉後、畳付けの釉は掻き取る。高台形も碗I-1・2・4類とは異なり特殊品の類に入れた方が適切と思われ、碗からは除外した。出土例については極めて少なく、今のところ古い年代に帰属する例はない。北宋期に時代が下がる可能性もある。

5、碗I-5類の項目参照。

小碗V類ないしVI類 (Fig.3, Pla.8)

文様、口縁形から碗V類と同系列と見られるが、VI類系列の可能性もある。高台は小碗特有の形であり、にわかに決め難い。仮に碗V類の口縁形分類1～4を適用するが、大分類記号は保留しておく。また、細分類 (文様) は下記に示す。

- a、内外無文例も想定されるので仮に記号化する。
- b、外面に縦篋花卉文を施す。
- b'、外面に縦櫛花卉文を施す。
- c、内面に篋描き文を施す。
- c'、内面に櫛目文を施す。

小碗X類 (Fig.3, Pla.8)

[白磁]

1、前述の碗X-1類を参照。

小碗XIV類 (Fig.3, Pla.8)

前述の碗XIV類を参照。

坏B類

口縁は直で、体部途中で大きく屈折し、その上位は直線的か、やや外湾させながら立ち上がる。体部外面上位に沈線を数条巡らした結果、隆帯状となる例が多い。高台形、施軸、文様は碗と同様である。枢府系。G期（14世紀初頭～後半）の標識磁器である。

皿I類 (Fig.4, Pla.9)

1、体部中位で屈曲し、角高台を持つ。A期（8世紀末～10世紀）の標識磁器である。

a、無文。

b、口縁端部に輪花を有する。さらに内面に隆線を持つ例がある。

皿II類 (Fig.4, Pla.9)

胎土、釉、高台形は碗IV類と同様である。C期（XII～XIII期、11世紀後半～12世紀前半）の標識磁器である。

1、碗IV類と同じく、高台は低く厚い。

a、口縁部は直口ないしやや外反するもの。体部内面中位に段がある。

b、口縁部が断面三角形の玉縁状をなす。

2、口縁部は玉縁であるが、平底でありIb類の平底形として分けた。ただし浅形であり灯皿とすべきかもしれない。

皿III類 (Fig.4, Pla.9)

高台は底部外面をやや深く削るためII類より細く高い傾向がある。口縁部は直口縁もしくはやや外反口縁である。内面見込み部分の軸を輪状に掻き取っている。高台、胎土、釉は碗VIII類と同じ。また、口縁部のみではII-1a類と区別が付きにくい。

D期（XIV期、12世紀中頃）の準標識磁器で、碗VIII類とセットと思われ、時期的な出土状態も一致する。

1、見込み部分の軸を掻き取るもの。

2、器形はI類と同様であるが釉の掻き取りをしないもので、焼成時に最上段に重ねたものと理解する。I類に比べ量は少ない。

皿IV類 (Fig.4, Pla.9)

C期（XII～XIII期、11世紀後半～12世紀前半）の標識磁器であるが、下記の2類は後出する可能性がある。

1、口縁部は外反し肥厚する例が多い。底部外面は平底もしくは僅かに抉るものもある。底部は厚い。

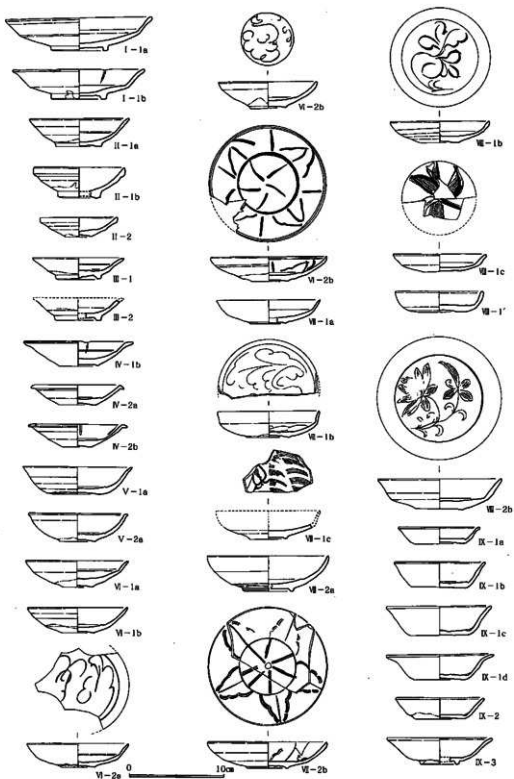


Fig.4 白磁皿I~IX類 (1/4)

(白磁)

- a、無文。
- b、口縁端部に輪花。体部内面に白堆線を持つ。

2、口縁部は横方向に屈折し、椀V-4類と類似した口縁である。

- a、無文。
- b、口縁端部に輪花。体部内面に白堆線を持つ。

皿V類 (Fig.4, Pla.10)

IV類に比べ全体に器肉が薄く、体部から口縁部にかけては特に薄くなる。体部下位に丸味を有し、内面見込みに段2を有する。胎土は灰色を帯びた白色を呈する。釉色はやや青味を帯びた灰白色を呈し、体部下半から底部にかけて施釉されない例と全面施釉後、底部外面の釉を削り取る例がある。この種は法量の一段大形の例がある。広東系の中では比較的良好な類である。

C期 (XII～XIII期、11世紀後半～12世紀前半)の標識磁器である。

1、口縁部は直口縁もしくは僅かに外反する口縁である。

- a、無文。
- b、内面に白堆線を有する。

2、I類に比べて上半は内湾気味に立ち上がり、口縁部は横に屈折する。

- a、無文。
- b、口縁端部に輪花を有する例や体部外面に縦線文を有する例がある。

皿VI類 (Fig.4, Pla.10)

体部形態で2種に細分される。口縁部は直口。底部は僅かに突き出しており、体部と底部の境は明らかである。やや上げ底状になる例も多い。胎土は粗く、微細な黒斑や白斑が混じり、黄灰色味をなす。化粧土を有し、釉は薄く施釉され、体部下半には施釉されない。黄色味の釉が多い。

C期 (XII～XIII期、11世紀後半～12世紀前半)の標識磁器で、12世紀中頃以降に減少する。椀II類とセットになる。

1、無文。

- a、体部上位で内湾し、その屈曲部の内面に沈線状の段を有する。
- b、内面中位から下位に段を持つもので、体部は直線的に外上方へ延びる。

2、有文。

- a、1a類の有文のものを2a類とする。
- b、1b類の有文のものを2b類とする。

皿VII類 (Fig.4, Pla.10・11)

体部は若干内湾気味で口縁部に向かって薄く引き上げている。底部外面は僅かに削り込み小さな高台状となる。化粧土がある。皿VI類に近いが良質のものが多い。体部の若干の差及び法量の違いで1、2類に細分する。C期 (XII～XIII期、11世紀後半～12世紀前半)の標識磁器である。

1、体部中位で屈曲するもの。

- a、無文。

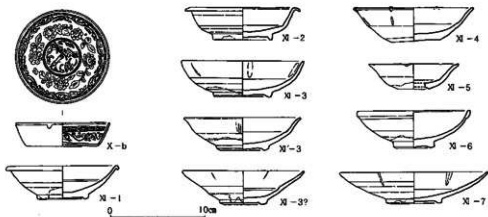


Fig.5 白磁皿X～XI類 (1/4)

- b、内面に花文状の匏描きを施す。
 - c、内面に花文状の櫛描文(または櫛十匏描き)を施す。
- 2、1類より大形で、体部は屈曲せず、外上方へ延びる。内面に段2を有する。
- a、無文。
 - b、内面に櫛刀で蕉葉文を施す。

皿Ⅲ類 (Fig.4, Pla.11・12)

口縁は直口で、体部は鈍角に内側へ屈曲する。底部は平底。胎土は灰色ないし空色を帯びた灰白色を呈する。軸は比較的厚目にかかり、底部の軸は施軸した後に削り取る。

D期 (XIV～XV期、12世紀中頃～12世紀後半)の標準識磁器である。

- 1、体部中位の屈曲部の内面に沈線状の段を有する。小形品。
- a、無文。
 - b、内面見込みに匏描きで草花文を施す。
 - c、内面見込みに匏と櫛描きで草花文を施す。
- 1'、上記と体部が異なり、中位は屈曲せず底部から直ちに内湾気味に立ち上がる。施軸法は二通りあり、施軸後底部の軸を削り取る場合と体部外面下位以下に施軸しない場合である。1類よりも粗雑化し有文の例は見ない。また13世紀に到って出土する傾向があり、1類の後出的な類と考える。
- 2、体部中位でく字状に屈曲し、1類と異なり底部内面見込みは平坦面をなす。これは印文を押すための仕様と思われる。
- a、無文。
 - b、内面見込みに草花文の凹印を施す。
 - c、内面見込みに匏描き文を施す。類例は少ない。

皿Ⅳ類 (Fig.4, Pla.12)

口縁端部が口禿げになったものである。胎土は灰白色、硬質で、軸は粘性が強くやや厚目にかかり、空色を帯びた灰白色を呈する。

F期の標識磁器である。13世紀後半～14世紀前半に増加する。碗IX類とセットになる。

- 1、底部は平底。全面施軸するもの。ただし、底部外面は板状の工具で軸をのぼしている例が多い。
 - a、口縁部は短く直線的である。小形で浅い。口径8.6cm前後、器高1.6cm前後。
 - b、直口ないし僅かに外反するもの。a類よりも大形で器高が高い。口径9.9cm前後、器高2.3cm前後。
 - c、b類より一段大形のもの。口径11.2cm前後、器高3.0cm前後。
 - d、口縁部を朝顔形に外反させる。b、c、dの法量は近似する。
- 2、器形はIX-1類と同様だが、外面体部下位から底部にわたって施軸されていないもの。外反口縁は少ない。
- 3、輪状高台が付くもの。体部下位は丸味をなし、1・2類とはやや異なる。

皿X類 (Fig.5, Pla.12)

碗X類と同様な特徴を有し、薄胎で精巧・上質な作りである。体部は直に立ち上がり、底部は平底で、無文および内面に精緻な型文を有する。

F期後半（13世紀後半～末）に到って出土するようになる。碗X類とセットをなす。

- a、無文。
- b、内面全体に型文を施すもの。

皿XI類 (Fig.5, Pla.12・13)

釉調、胎土は碗XI類と同様で胎土は僅かに青白色を帯びる白色で硬質。釉は水色味の白色で透明。柔らかい光沢があり、一部に貫入が入る。以下の4・5類以外の高台形は碗の特徴と一致する。

B期（X～XI期、10世紀後半～11世紀中頃）の標識磁器である。

- 1、口縁部は外反し見込みに段2を有する。
- 2、体部の丸味が強く、口縁部は外反する。
- 3、体部中位で僅かに屈曲し、その内面には沈線ないし段2が入る。また、やや体部が異なり内面に段1を有する例も図示したが、この例はXI-7類の小形とした方が良くもかもしれない。
- 3'、他のXI類と異なり化粧土がある。体部外面には寛押圧縦線がある。
- 4、直口縁で、XI-3類に類似しているが、底部は平底である。体部外面には寛押圧縦線がある。胎土に黒色粒を含む。化粧土はない。
- 5、底部は浅く段をつけて削られ萐萐底風となる。口縁部に輪花がある。胎土は灰白色で褐色粒子を若干含む。釉は淡灰緑色、透明で光沢、貫入がある。体部外面下位から底部外面は施軸されない。
- 6、口縁部は玉縁である。底部内面には段はない。
- 7、体部は直線的に外開きとなり、口縁は直ないし若干外反する。体部中位下半が屈折するものと屈折しない例があり、さらに細分される可能性がある。屈折を有する例は、皿I-1類の系譜関係にある。口縁端部には輪花（5花）があり、体部外面に寛押圧縦線を有するものといふものがある。なお、XI'類は典型XI類に対して、器形の鋭利さ、釉調、胎土などの点で若干の欠点を有するも

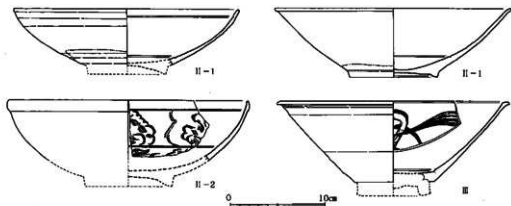


Fig.6 白磁鉢 (1/4)

のである。

皿B類

口縁端部は丸く引き出す。体部は緩く内湾させながら立ち上がり、高台形は碗、坏と同様である。有文例がある。枢府系。G期（14世紀初頭～後半）の標識磁器である。

次の鉢、壺、水注類は碗、皿ほど種類は出ておらず、細分するまでに到らない。I類（定窯・邢窯系）、II類（広東系、化粧あり）、III類（華南産、化粧なし）、XI類（北方または華南）の大分類を使用する。IV～VIII類は空白とし、III類以外は碗の大分類と対応させた。

鉢I類

口縁部は直口ないし若干外反し、体部は直線的。高台は肉厚の角形である。胎土、釉調は碗I類と同様。口縁部に輪花を有する例がある。A期（8世紀末～10世紀中頃）の標識磁器である。

鉢II類 (Fig.6)

碗II類と同系統のものである。無文、有文があり、有文では内面に窠と構目文を有する。碗II類に比較して上質な例が多い。1、2類と器形の特徴が異なる鉄絵鉢の例も少数ある。なお下記の鉢III類とは異なるものである。

1、口縁部は直口ないし外反。

2、玉縁。

鉢III類 (Fig.6)

碗VIII類と類似した特徴を持ち、これまで(仮)鉢VIII類として仮記号を付してきた。今回鉢III類とする。鉄絵の例が多い。華南産。

壺・(四)耳壺・水注

I類

I類の出土例は国内では極めて少ない。中でも左京二条二坊高陽院・SG1A出土の壺（註1）は形

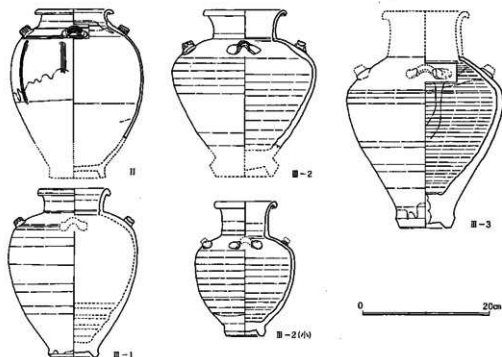


Fig.7 白磁四耳壺 (1/6)

態の判明する貴重な例で、鋭利な角高台がつく。胎土、釉調は椀II類と同様である。〈A期〉。

II類 (Fig.7)

胎土、釉調は椀II類と同様である。図示したのは四耳壺であるが、他に水注、瓶、中・小形壺などがある。この四耳壺の高台部特徴は高台の内側面がやや膨らみ、椀II類と似た傾向と見ることができる。胴部内面に施釉しない例が多い。〈C期〉。

III類 (Fig.7)

中分類で1~3類に分けられ、1→2→3の年代変化があり、底部・肩部・胴部形態で類別が可能である。丸く折り曲げる口縁部は四耳壺に多く、鋭く屈折する口縁部は水注に認められるが、後者の口縁の四耳壺も出土例は少数ある。出土品では中分類の特定ができない場合が多く、各年の年代区分境界が椀・皿と軌を一にするか判断し難い。体部下位から底部外面には施釉しない。胴部内面に施釉されることが多く、この点でII類と区別が可能となる。椀IV・V・VI・VII・VIII類のいずれかと同一窯系になる。〈C~F期〉。

1、なだらかな卵形胴部に太い角高台がつく。高台端部外面には面取りの削りを行うことが多いが、基本的に断面は角形状を保つ。11世紀後半~12世紀〈C期〉に出現し、D期に継続する。

2、肩の屈曲はIII-1類よりもきつくなり、高台端部外面の面取り幅が広くなる。したがって断面は角形よりも逆台形状になる。13世紀〈E期〉に出現する。

3、III-2類よりもさらに高台端部外面の面取り幅が広くなり、底部は厚く重い。長胴化し肩から下

は直線的になる。このため一層層の屈曲は強く見える。器肉が厚く重い。13世紀後半～14世紀前半（F期後半・G期初頭）に位置する。

その他壺類では碗XI、IX、X類と同系の出土品があり、碗大分類の記号を使用する。

(2) 越州窯系青磁

越州窯系青磁はI、II、III類に大別する。このうちI、III類は直接系譜関係を持つ精製品であるが、II類の各特徴は前者とかなり異質の粗製品である。

I、II類はA期（V～IX期、8世紀末～10世紀中頃）、III類はB期（X～XI期、10世紀後半～11世紀中頃）の標識磁器である。

碗I類（Fig.8、Pla.14・15）

釉薬の発色が良く、色調は器面全体が茶黄色や黄緑色を呈する。胎土は淡灰灰色を呈し、密で精良である。ただし下記の中でI-2ウ、I-5類などの胎土は砂味が強く、多少粗い。

1、口縁部は直口で他に比べて肉厚口縁をなし、体部は直に開く。底部は蛇ノ目高台のものである。

- a、底部内面に重ね焼きの目跡はなく、全面施釉後、高台畳付の釉を削る。
- b、底部内外面に目跡があり、重ね焼きをしたものをb類とする。a類の蛇ノ目高台よりも畳付の幅が狭い例が多い。施釉は2つの方がみられる。(1) a類と同様全面施釉で高台畳付の釉を削る。(2) 高台畳付内が露胎もしくは体部下半以下に施釉しない。

2、輪状高台のものである。全面施釉後高台畳付の釉を削る例が大半であるが、一部の類は体部外面下位以下に施釉しないものがある。高台形状は以下のようなバリエーションがあり、目跡の付き方にも各々特徴がある。

ア、やや細く、断面方形を呈する。底部内面の目跡は細く環状に並ぶ例が多い。

イ、幅広い輪状高台で、I類の狭い蛇ノ目と区別が困難な場合がある。

ウ、高台部外側を斜めにカットしている。この種は後述するI-5類（平底形）の底部外面周囲を浅く削って高台とするもので、底部中央は削らないことが多い。高台外面斜行部と底部内面に円形・三角形の目跡を多く持つ。体部外面下位以下に施釉しない例がある（I-2ウ'）。また、他のI-2類よりも口径の大きい例が多い。

エ、他の2類に比べて高台の削りがやや粗い。高台端部は外側に向かって斜めにカットするものが典型例である。内面見込みに段を有することも多い。細長い目跡が環状につく。体部外面下位以下無釉の例がある（I-2エ'）。

オ、高い角高台で例は少ない。

文様の有無で細分する。

a、無文。

b、口縁端部に輪花と体部外面に篋押圧縦線文を有するもの。

上記の他に内面に篋形の花文など文様を有する例がある。

3、蛇ノ目高台で口縁部が内湾している。I-1類の亜種として分けられ、口縁以外の特徴はI-1a類と

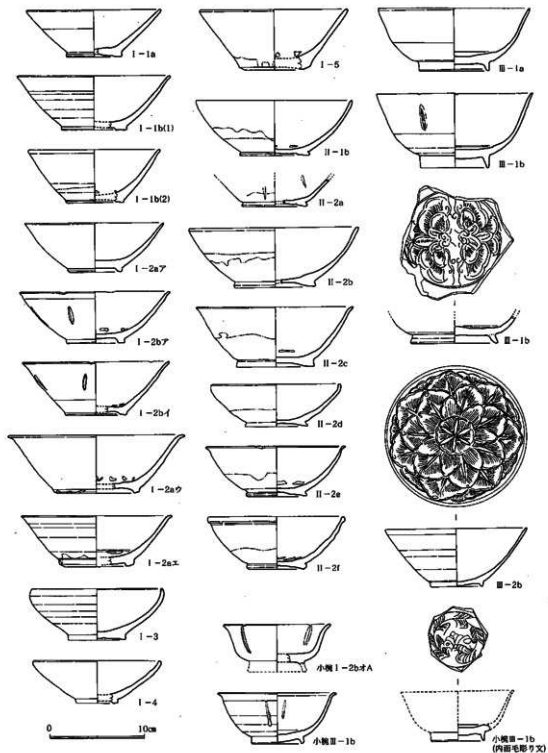


Fig.8 越州窯系青磁碗I~III類・小碗 (1/4)

同様である。b類の例はあまり見ない。

- 4、口縁部が僅かに内湾している。釉調が他のI類と異なり、色調は濃緑色を呈する。例は少ない。
- 5、平底(若干上げ底味)の形態のもので体部最下部および底部を回転削りし、重ね焼きの目跡は体部外面最下部の斜行部と内面にある。目跡形状はI-2ウ類と同様であるが、目の数は少ない。体部外面下位以下は施軸しない例が大半である。旧版II-3類からI-5類に変更した。

椀II類 (Fig.8, Pla.15・16)

I類に比べて粗質で、釉の発色の悪い場合が多く、器面の内外の発色が異なっている場合が見られ、また、十分に焼成されてない為か釉にムラが多い。胎土は粗く、胎土中には黒色の斑点を含み、精選されたI類と区分けが可能である。底部内外面に重ね焼きの目跡がある。粗質な胎土の欠点を補うため、化粧掛けを行う。体部外面中位から下位以下には施軸しない。なお稀に化粧を行わない例がある。

1、旧分類のII-1類(のちII-1a類に改変)は、その後の検討により長沙窯産と判明したので、ここから除外した。これに変わる器形全体の判明する例は現在ないが、今後良好な例があれば埋めていくこととする。

- a、蛇ノ目高台で底部外面を水平に削る。
 - b、a類よりも壘付幅の狭いもの。
- 2、底部は幾分上げ底風の円盤状高台を2類とする。(b、c、e類は口縁部が類似)
 - a、円盤状高台の外周近くに段状の線を入れ、一見蛇ノ目風としたものである。底部外面中心部は削らない。
 - b、口縁部は直もしくはやや外反する。外底を寛ナデし、切り離し跡を消している。口径18cm前後、底径9cm前後。口縁端部に輪花を有するものもある。
 - c、b類より一段小形のもの。口径15cm前後、底径7cm前後。
 - d、口縁部を内湾させるもの。小形品の例が多い。
 - e、高台外面に糸切り痕跡を残している。なお、b、c、e類の口縁形は同一である。
 - f、口縁部は玉縁をなす。

II-2類の円盤高台外面は切り離し後、指ないし篋で再調整しているため、切り離し痕が不明瞭となっている例が多い。上記のe類は旧版では「糸切り」として分類定義を与えているが、他のa-f類についても糸切りの例はある。また、篋切りの例も考えられる。

3、I-5類に変更。欠番とする。

上記以外のII類として、輪花を持つ直口縁に高く細い輪状高台を有し、全面施軸した例が極めて少数ある(鴻臚館跡出土)。これはI-2b類の模倣形態と考えるもので、II類の中では高台形・施軸法がきわめて特殊といえる。

椀III類 (Fig.8・11, Pla.16)

胎土、釉調ともにI類と同様であるが、胎土、釉はやや濃い茶色味を帯びる例も多くなる。全面施軸され、I類のように高台壘付の軸を削ることは少ない。高台内に目跡が付く点から、高台径よ

り小さな焼台を使用する点もⅠ類と異なる。細長い白色の目跡が外面の高台内際に4～5個程あるが、内面にはない。

1、口縁部は直線的で、端部は丸くおさめる。高台は細くて高く、直立が大半である。体部は腰が丸く張り深形をなす。底部内面外周に沈線（または段）を持つ。底部外面に「太平戊寅」の窠刻銘を持つ例がある。なお、b類毛彫りには、口縁部が外反し高台は外開きの例がある。

a、無文。

b、口縁端部に輪花、体部外面に堦押瓦縦線を有する。他に毛彫文、窠彫り文およびその両方を加える例がある。文様は唐草、鳳凰、鳥、蝶、花など多様である。

2、口縁部は直口で、体部は外傾しながら直線的に立ち上がる。高台は細くて低い。Ⅰ類に比べて腰の張りがなく、体部は高台際から直ちに開く。高台は短く直立し端部は横ナデで丸くするが、この際に高台内面を面取りする。形状からみて削り高台の可能性はある。底部内面に沈線（ないし段）はない。大形、小形がある。底部外面に「太平戊寅」「巳」「水」など窠刻銘を持つ例がある。「太平戊寅」は概して無文タイプに多い。

a、無文。

b、有文。細かい毛彫文の例が多い。①外面のみ施文、②内面のみ施文、③内外面施文の例がある。①②の例として片彫による蓮弁文を上下に数段施し、各弁の空白を細線で密に埋めるものがある。②は底部内面に幾何学的な花文、龍文、双鳥文を施すものがある。③は外面に片彫蓮弁文を数段施し、内面に鳳凰文を施すものがある。

3、碗Ⅲ-1類とは異なる体部形態であり、浅形の碗とするか、ⅢI-1・2類の系譜を引くと考えてⅢに分類するか決定をしていない。ここでは仮に碗の中に位置づけたが、今後Ⅲに修正した場合にも分類記号はそのまま使用する予定である。大形・小形がある。後記するⅢⅢ-1類と比べて体部の上半部が直線化し、丸味が少ない。高台は外開きで細長く、先端を外反させる（撥状）。底部外面に窠刻銘を持つ例では「太平戊寅」「太平戊」「下」（または「戊」）「供」などがある。この類でも「太平戊寅」は概して無文タイプに多い。

a、体部は直線的に開く。

b、内面は有文。底部内面に双鳥文、双鳳凰文、双蝶文、鳥花文、花文などを施文する。また内面全体に蓮弁文を数段施文したのもや、内面に唐草文、口縁・体部に輪花を持つ良質品の例がある。見込み外周に段を持つ。

なお、Ⅲ類はA.削り出し高台、B.貼付高台の2者があるが、高台周囲に横ナデ再調整を行うので、A、Bの区別困難な場合が多い。

小碗Ⅰ類 (Fig.8)

碗よりも一段小形品である。分類は碗の記号に準ずるが、種類は限られる。

2bオA、高い輪高台で、その他の点は上記の大碗Ⅰ-2bアA類と同様な特徴である。この種は托の上のの蓋の可能性もある。

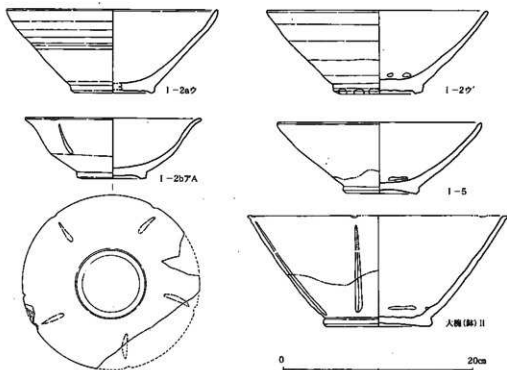


Fig.9 越州窯系青磁大碗 (1/4)

2a・bA/B, 低い輪状高台で、上記と比べて体部は緩く内湾し腰は張らない。この体部特徴を仮にBという記号で表示する。

a、無文。

b、有文。口縁部、体部は輪花と窠押圧縦線文があり、Aに比べて縦線文は浅く弱い。

小碗 III 類 (Fig.8, Pla.16)

1、碗III-1類と同様な特徴である。口縁部は外反する。

a、無文。

b、有文。体部に窠押圧縦線文を持つ例、底部内面に毛彫り文を持つ例がある。

2、碗III-2類と同様な特徴である。

a、無文。

b、有文。

大碗・鉢

碗よりも一段大形で口径約20cm前後のものを大碗の目安とした。これよりもさらに大形のもの鉢とした。分類は碗の記号に準ずるが、種類は限られる。

大碗・鉢 I 類 (Fig.9)

2aウ、碗I-2ウ類（輪高台、高台壘付外側斜めのカット、無文が主）の大形品である。碗と同様に

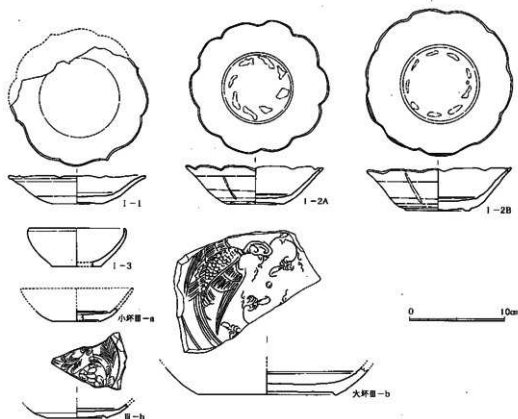


Fig.10 越州窯系青磁坏・小坏・大坏 (1/4)

体部外面下位以下に施軸しない例(ウ')がある。

2bアA、輪高台で断面は角形。体部は腰が深いかまたは鈍い腰折れで、この体部特徴を仮にAという記号で表示する。口縁部は外反する。口縁部、体部は五輪花と押圧縦線文で構成される文様である。縦線文は碗に比べて深く、幅広い例が多い。

5、碗I-5類(平底、体部下端斜めのカット、体部外面下位以下は施軸しない)の大形品であるが、高台外部は外側に突出して円盤状となる点はやや異なる。突出部は寛削りされ鋭い稜がつき、II類の円盤状高台とは区別できる。また目跡はやや大きな長楕円形で、I-2ウ類よりも目跡数は少ない。碗I-5類についても同様な傾向がある。

大碗・鉢II類 (Fig.9)

上記の例よりさらに大きく鉢とすべきサイズである。口縁部、体部は輪花と押圧縦線文がある。碗II-2類と同様な粗製品で、円盤状高台や胎土、釉も等しい。なおこの鉢には上半部に褐彩を行う例がある。

坏I類 (Fig.10, Pla.17)

底部は平底で若干上げ底風となる(ただし2類には高台を有するものがある)。全面施釉後、底

部外周の軸を削り、ここに目跡がある。

1、口縁部は4ないし5弁の花形に造られる。体部中位は僅かに屈曲し、底径は小さい。この鋭利な造形は1類の特徴である。底部内面に目跡のない例が多い。

2A、口縁端部は先が2つずつに分かれた5弁の花形に造られ、体部外面に寛押圧縦線を入れる。底径はやや大きく、底部内面に目跡がある。1類よりもやわらかい造形である。

2B、角高台を有する例をB類として分ける。

3、口縁端部内面には沈線が巡る。坏I-2・3類と異なり、やや深形で口径は小さい。体部は僅かに丸味を帯びながら直口気味に立ち上がる。

坏II類

この器形は褐形を有する例が多い。口縁部は僅かに外反する。体部は直線的で、底部は平底(若干上げ底)をなす。

坏III類 (Fig.10, Pla.17)

底部外面内側は浅く削り、蕃菊底をなす。口縁部は直口で、体部は僅かに内湾しながら立ち上がる。内面見込みと体部との境には沈線状の段を持つ。底部外面の高台内際に目跡を有する。大・中・小形の法量に分けられる。

a、無文。

b、有文。底部内面に双鳳凰文、双鳥文、花文、また内面全体に蓮弁文を数段施文する例がある。輪花文のタイプには底部外面に「太平戊寅」の裏刻銘を持つ例がある。

皿I類 (Fig.11, Pla.17)

輪状の角高台で、胎土、釉、施釉などの特徴は碗I類と同様である。

1、体部中位で屈曲し、坏I-1類と同様な特徴である。底部外面の削りは下記の2類よりも浅く、また粗く削るため底部器内の厚い例がある。この類は内面に目跡のない例が多い。

a、無文。

b、口縁端部に輪花を有するもの。

2、体部は丸味を帯びる。底部外面の削りは1類より丁寧な例が多い。

3、皿III-3類に変更。後記参照。

皿II類 (Fig.11, Pla.18)

上げ底風の円盤高台をなす。体部上位は内湾気味となり、口縁端部は外反させる。胎土、釉、施釉とも碗II-2類と同様である。図中には若干器形の異なるものも示した。

皿III類 (Fig.11, Pla.18)

1、旧版のI-3類をIII-1類に変更する。外開きの細い輪状(または撥状)高台で、III-3類に比べて体部は丸味を持つ。全面施釉。

a、口縁は直口で、体部に丸味を帯びるもの。

b、有文。

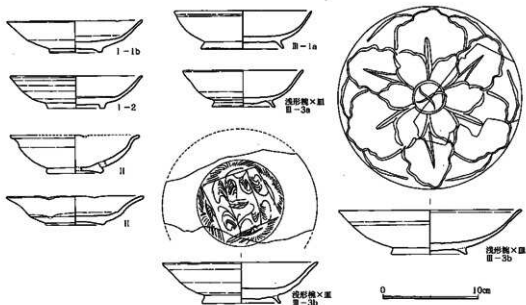


Fig.11 越州窯系青磁皿・浅形碗または皿 (1/4)

- 現在欠番であり、この番号を割り当てるべき製品の見通しも今のところない。その理由は下記の3類に示す。今後、別の皿形が確認できれば2の番号を埋めるとしたい。
- 碗III-3類の項目を参照。今後、碗III-3類を皿に修正する場合には、III-3類の番号はそのまま使用することを考えている。

その他、壺、水注、合子、鉢などの器種については、碗で使用した大分類基準 (I, II, III) の記号をそのまま適用する。

(3) 初期の龍泉窯系・同安窯系青磁 (Fig.12、Pl.18)

12世紀中頃前後に出土を開始する龍泉窯系青磁碗I類、あるいは同安窯系青磁よりも古いタイプの青磁を0類として区別した。0類は浙江省、福建省の両地域で生産されており、現状では龍泉窯系、同安窯系の区別はつけ難い。その異同については、窯跡出土品の詳細な検討を待たざるを得ない。0類の特徴は口縁部下に鈍い屈曲点を有し、体部はラッパ状に開く。体部形態は同安窯系I類に近く、龍泉窯系I類の体部形態 (下位に丸味、重心を持つ) とは異なる。有文のものは外面に片刀や片彫風の擲刀で縦線を施し、内面には片彫花文、瓣先による点掻文を密に入れる。文様は一般的に龍泉窯系I類よりも鋭利で手の込んだ割花文といえる。胎土は灰白色、淡灰色など、釉は深草色、黄緑色など多少のバラつきがあるが、一般的に色調は淡く、越州窯系青磁と龍泉窯系I類の中間的特徴をなす。

0類の出土例は現在のところ大宰府、博多、平泉、熊本県祇園など少数に限られ、出土年代の明らかなものは大宰府馬場1次淡茶色砂層 (11世紀後半下限)、条坊19次暗褐土 (12世紀前半)、条

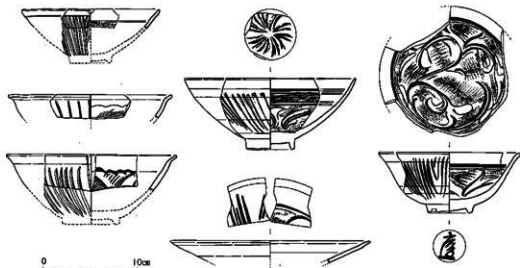


Fig.12 初期龍泉・同安窯系青磁0類 (1/4)

坊24次SE113 (12世紀前半)、博多築港1次39号井戸 (12世紀前半) などがある (表11参照)。

(4) 龍泉窯系青磁

碗1類 (Fig.13・14, Pla.19・20)

口縁端部は九く肉厚で、直口となる例が多く、若干外反するものもある。体部下位は腰が張り重心が低い。高台は断面四角で高台内部は削りが若干浅く、このため底部は肉厚となる。口縁部直下から底部外面まで広範に丁寧な斲削りを行う。高台部疊付けおよびその内部は露胎である。胎土は緻密で灰色を呈し、釉の発色は青味を帯びた緑色を主体とするが、茶色味、黄色味などをなす例もあり、バラつきが大きい。釉は半透明で平均的にかかる。1類は無文もあるが、劃花文で代表される類である。劃花文は0類よりも空間部分が多く柔らかな表現となるが、形式化・単純化された文様は量産化の一面をも示している。内面見込みに片刀・櫛刀などの花文の他、文字 (陽、陰) の印文を加える点も1類の特徴である。

D期 (XIV～XV期、12世紀中頃～後半) の標識磁器である。

- 1、体部内外面は無文であるが、口縁、底部内面中央など一部に文様を持つ例はある。
 - a、無文。
 - b、口縁端部に輪花を有する。
 - c、底部内面に文字印文がある。
- 2、内面に片影蓮花文を有する。
 - a、花文3単位。
 - a'、花文2単位。
 - b、横から見た葉文を加えるもの。花文2単位に葉文1ないし2単位の例がある。なお、片影花文

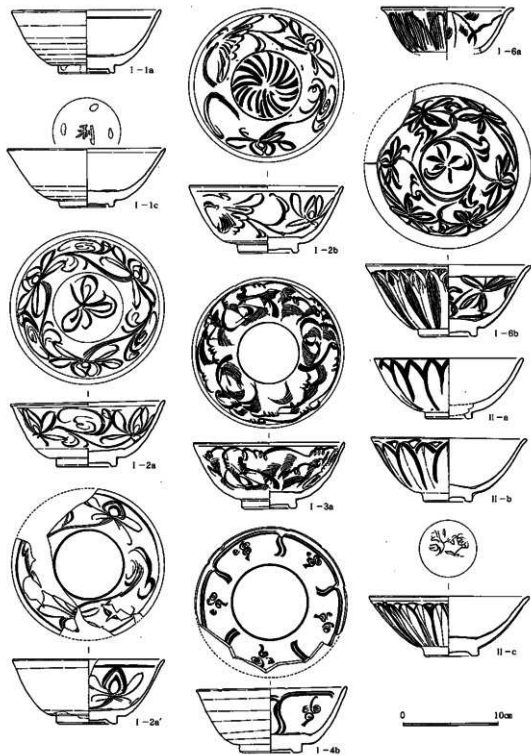


Fig.13 龍泉窯系青磁碗·Ⅱ類 (1/4)

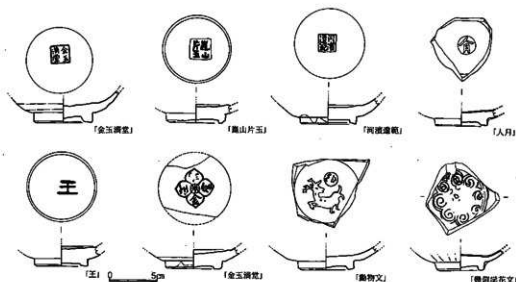


Fig.14 龍泉窯系青磁碗 内面見込み文様 (1/4)

に短い櫛目文を加える亜種もある。

3、内面に片彫文と櫛目を入れ、2類より複雑な文様をつくる。

- a、片彫りで草花状ないし雲文状の文様を施し、空白部に櫛目を埋める。文様種類が判然としない場合がある。
- b、片彫りで魚などの具象文を持つ。この場合魚の周囲は水性植物（蓮など）の文様かもしれない。

4、二又片刀または櫛刀によって体部内面を5分割し、その中に飛雲文（ないし花文）を入れる。内面見込みは3個の茸状の文様（略化した花文または雲文）を片彫りした例、花卉文の片彫り、文字印刻などがある。また、分割線のみで内部に文様を施さない略式形式がある（a'）。

- a、口縁端部に輪花がない。
- b、口縁端部に輪花を有する。
- c、口縁端部に輪花があり、体部内面には縦の白堆線を施す。
- d、4a・bと異なり、内面の分割線及び文様を全て櫛で行う。分割線は3単位の例がある。

5、Ⅱ類へ変更。後記参照。

6、体部外面に縦の櫛目を入れ、片彫りで蓮弁文を一周させる。以下のⅡ類とは異なり、内面に片彫草花文や櫛目文を有する。a類は内外の文様にいくつかの類型があり、さらに細分される。6a類は基本的に1・2・3類と同群の中に含まれ、出土年代からみても明らかに次のⅡ類（ⅡB-5）より先行する。6b類については先行するという確証は現在得られていないが、形式的にここに置いた。

- a、口縁部は直口ないし外反させる。
- b、各蓮弁の中央に稜（竇）を有する例をb類とした。
- c、I-6b類のうち外面櫛文を省略したものである。

7、旧版のI-7類は柄IV-8類に変更した。後記参照。現在欠番である。

柄 II 類 (Fig.13・14、Pla.20)

体部、高台形はI-1～6類と同様で、体部外面に蓮弁の文様を有するもの。II類はI-6類の内面割花文を略化したものとみることができる。旧版でI-5類とした類であるが、今回II類と改める。なお、記述方式は今後混乱が予想されるため当面は「II (旧I-5)」とする。また、旧版のII類はIV類に改め、すでに削除している。

E期 (XVI～XVII期、13世紀前後～前半) の標識磁器である。なおc類の一部はやや遅れて出土する傾向があり、F期 (13世紀中頃～14世紀初頭前後) に出現する。

- a、片彫蓮弁文を描き、弁の中心線には筋はない。
- b、筋蓮弁文。弁の中心線は稜をなす。
- c、b類のうち内面見込みみに細い草花文様や幾何学文様の印刻があるもの。草花文印の例は遅れて出土する傾向がある。
- d、文字印刻をするもの。

I・II類の底部印文例をFig.14に示した。文字 (陽、陰)、動物、幾何学 (蓮子?) などがあり、幾何学文はII-a類にはあまり見ない。

柄 III 類 (Fig.15、Pla.20・21)

龍泉窯系の中では胎土、釉調ともに最も優品である。高台および軸色に特徴がある。高台径は小さく、断面は細く尖り気味であるが手法は鋭利である。軸は軽くかすんだ緑色または青緑色を呈し、全面施釉後高台端部周辺の軸を掻き取る。その露胎部分と施釉された境の部分は赤色に発色する。軸はI・II類に比べて厚く均一である。胎土の器肉は薄く緻密で、灰白色を呈する。旧版では体部外面の蓮弁文の有無により1、2類と分かれているが、A.体部内外面無文、B.内面割花文、C.外面蓮弁文、B+C (BとCの併用) という記号を加える。さらに、口縁形に直口と外反があり、「直口、外反」と表示することにしたい。

F期 (XVII～XIX期、13世紀中頃～14世紀初頭前後) の標識磁器である。

1、体部外面無文。

A (直口、外反)、体部内面無文。

- a、口縁端部に輪花がないもの。
- b、口縁端部に輪花を有するもの。

B (直口、外反)、内面に片刀、櫛などで草花文を入れる (割花文)。

2、体部外面に筋蓮弁文を有する。

C (直口、外反)、蓮弁文は幅の細い例が一般的であるが、広い例もあり、それぞれ細弁・広弁と表示する。

B+C (直口、外反)、上記のB、C類両方の文様構成を有するもの。

III'、III類の中で高台量付の平坦面が広いもので角高台に近くなる。この手は全体的に造形の鈍

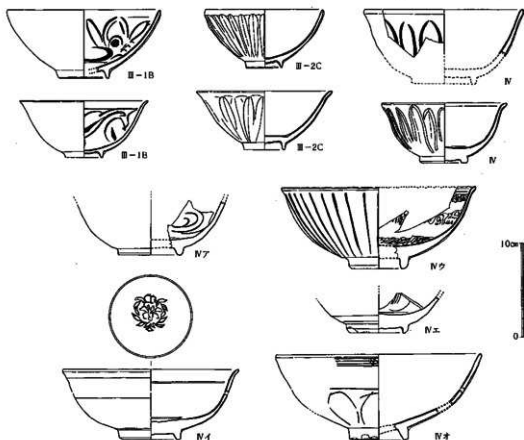


Fig.15 龍泉窯系青磁碗Ⅲ・Ⅳ類 (1/4)

い例もあり、時期的にやや後出するか、或いは同時期の傍系の窯製品かという点が考えられる。

碗Ⅳ類 (Fig.15、Pla.21)

Ⅳ類の基本的な分類構成は現在未完成である。その特徴は多様性を帯びており、Ⅰ、Ⅱ類の系列下およびⅢ類との系列下と見るべき例が混在するためである。従って仮に高台形状による分類案に留めておくが、この方法によりいくつかの器形の集約が可能とみている。

胎土はやや良質から粗質まで落差が大きく、白色細斑を多く含み、Ⅰ～Ⅲ類よりも粗いものが多数ある。釉は黄色味を帯び、不透明、半濁化する例がある。底部外面に施釉しない例が多数で、全面施釉後に高台台付けの釉を削るものや高台内の釉を環状に削るものも少量ある。また、施文も多様で、型押、印刻、貼花、篋彫、櫛目等があり、2～3種組み合わせる例も多い。なお、外面蓮弁文などは略化傾向が著しい。G期 (XIX期～、14世紀初頭～後半) の標識磁器である。

- ア、低い角高台。Ⅱ類高台と類似するが、高台内側の割りはⅡ類より深く、しかも割り方が粗く外面中心は凸状で水平面とならない場合が多い。坏、皿、盤に多い高台である。
- イ、やや高い角高台で、高台外端を広く斜めに面取りする例もある。高台内面は深く割るものと浅く割るものがあり、割り方は粗く、中央が凸状となる。体部の腰は低く、内面見込み

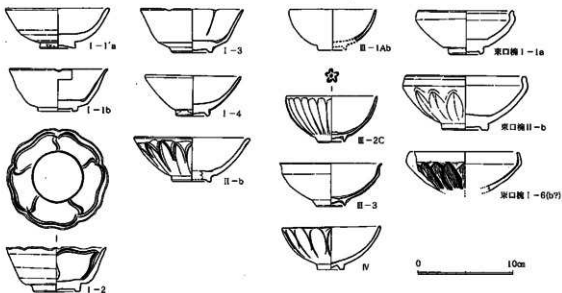


Fig.16 龍泉窯系青磁 東口椀（曲口椀）・小椀（1/4）

は広い。

ウ、角高台で体部内湾位置は（イ）よりも高台に近い、腰の張りがやや弱い。

エ、高台外端を広く斜めに面取りする。体部は（ア・ウ）に近い。旧版でI-7類としたものである。

オ、高い高台。外面は直、内面を斜めに深く削る。

カ、基筈底。椀にはなく、坏、皿に該当するものがある。

小椀Ⅰ類 (Fig.16, Pla.22)

椀Ⅰ類と同種の胎土・釉調をなす。D期（XIV～XV期、12世紀中頃～12世紀後半）の標識磁器である。

1、内外面とも無文。（椀Ⅰ類と対応）

a、口縁端部に輪花がない。

b、口縁端部に輪花を有する。

I'a、1類のベタ底型で、高台内部の例りを行わない。

2、口縁部に輪花を有し、片刀、櫛刀具で体部内面を5区分している。（椀Ⅰ-4b類に対応）

3、内面に白堆線による区分けを行ない、口縁部に輪花を持つ。（椀Ⅰ-4c類に対応）

4、他と器形的に若干異なり、無文で体部は高台部からやや内湾しながら立ち上がる。この例はI-1類の亜種として把握できる。

小椀Ⅱ類 (Fig.16, Pla.22)

椀Ⅱ類と同様の特徴を有し、外面体部に蓮弁文を有する。旧版ではI-5類としたものである。E期（XVI～XVII期、13世紀初頭～前半）の標識磁器である。

- a、蓮弁文には鏝がない。
- b、鏝蓮弁文。

小椀 III 類 (Fig.16, Pla.22)

椀III類と同種の胎土、釉調、施釉法である。分類については椀III類を適用するが、小椀の場合、口縁外反のものはあまり見ない。また、B類文様も少ない。下記の3類は特殊な例である。

F期 (XVII～XIX期、13世紀中頃～14世紀初頭前後) の標識磁器である。

- 1、体部外面無文。
 - A、体部内面無文。
 - a、口縁端部に輪花がない。
 - b、口縁端部に輪花を有する。
- 2、体部外面に鏝蓮弁文を有する。
 - C、蓮弁文は幅の細い例が一般的であるが、広い例もあり、それぞれ細弁・広弁と表示する。なお、内面見込みに貼花文を有する例は旧版ではIII-2b類としているが、III-1類にも例がある。
- 3、口縁部を屈曲させ、端部は外反する。いわゆる天目椀に近似した器形のものである。また、III'類については椀同様の特徴とする。

小椀IV類 (Fig.16, Pla.23)

椀IV類の分類基準を適用する。G期 (XIX期～、14世紀初頭～後半) の標識磁器である。

束口椀 (曲口椀)

体部は高台際から延びていき、椀、小椀の深形の形態とは異なる。体部上位で内側に屈折し、口縁がややすぼまる形をなす。椀に比べて出土例は少なく、細分可能なほど種類もないが、椀に対してI～IV類に大分類は可能な例がある。旧版では椀I-6a類に分類されていたが、椀から除外し、独立した項目を設けた。なお、将来、類例が増加する場合を考慮し、椀の分類記号をそのまま利用することにしたい。

束口椀 I 類 (Fig.16)

1a、無文の例で、底部形態は椀I-1類と同様である。

6 (b?)、体部外面に蓮弁文と擗目文を入れるものである。この例は実現しておらず、蓮弁に鏝の有無は不明である。

束口椀 II 類 (Fig.16, Pla.21)

- b、体部外面に鏝蓮弁文を有する。

III、IV類については図示できるものがなく省略した。

浅形椀または皿 (高台付)

次のI・II類は「条坊跡II」で「坏」としたが、椀の特徴と近く、口径・施文も一致する点で浅形椀ないし皿 (高台付) として坏からは分離すべき器種である。旧版の器種名から言えば、越州窯

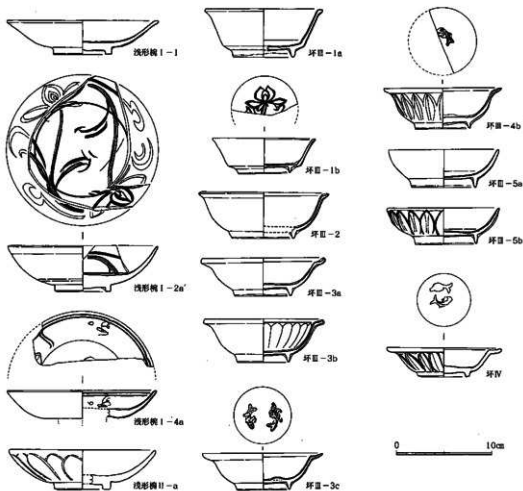


Fig.17 龍泉窯系青磁 浅形碗・坏 (1/4)

系青磁・皿（高台付）I類→越州窯系青磁・碗（浅形碗）III-3類または皿（高台付）III-3類→龍泉窯系青磁・浅形碗または皿（高台付）I類という系統で統一する必要が生じる。この点は後日整理したいが、今回は仮に浅形碗として分けておく。

浅形碗 I類 (Fig.17, Pla.23)

胎土、釉、施釉は碗I類と同様である。出土例は多くはないが、碗と対応する文様構成の出土例があり、大方その分類を適用できる。

D期 (XIV~XV期、12世紀中頃~後半) の標識磁器である。

- 1、碗I-1類と対応。内外面無文。
- 2、内面に片影りの蓮花文を施す。
 - a、花文3単位。
 - a' 花文2単位。
- 3、碗I-3と同様。内面に片影文と擗目を入れ、2類より複雑な文様をつくる。

- 4、体部内面を分割し、その中に飛雲文ないし略化した花文を片彫りする。
 - a、椀I-4a類と対応。図示例では内面の分割は3単位と思われる。
 - c、椀I-4c類と対応。
- 6、体部外面に縦の溝目を入れ、片彫りで蓮弁文を一周させる。
 - a、内面に花文2単位と横から見た葉文1単位を加える例がある。

浅形椀II類 (Fig.17, Pla.23)

椀II類の分類基準を適用する。過去にI-5類としたものである。

E期 (XVI～XVII期、13世紀初頭～前半)の標識磁器である。

- a、体部外面に溝のない蓮弁文を有する。
- b、体部外面に溝蓮弁文を有する。確実な例を知らないが、a類の例により予想されるものである。

坏III類 (Fig.17, Pla.23・24)

胎土、釉調、高台形状は椀III類と同様である。口縁部及び体部形状により中分類される。

F期 (XVII～XIX期、13世紀中頃～14世紀初頭前後)の標識磁器である。

- 1、体部下位をく字状に屈曲させ、ほぼ直線的に外上方に立ち上がる。口縁部は短く屈折し、上面は平坦な面または凹面をなす。
 - a、無文。
 - b、内面見込みに蓮花文の印刻をするもの。
 - c、内面見込みに双魚の貼付文(凸文)を有する。

なお、この種には口縁部が薄く直になり、輪花文を有する変種がある。
- 2、体部の立ち上がりが1類のように屈曲せず、丸味を持ち内湾気味に立ち上がる。口縁部は鋭く外反し、上端は平坦面をなす。
- 3、体部は2類と同様に丸味がある。口縁端部は横に長く屈折させ、上端は凹面をなすことが多く、さらに端部はつまみ上げる。
 - a、無文。
 - b、体部内面は縦に凹面の削りを入れ、花卉形とする。
 - c、内面見込みに双魚の貼付文を有する。
- 4、器形は2類と同様で、体部外面に蓮弁文を有する。
 - a、内面無文。
 - b、内面見込みに双魚の貼付文を有する。
 - c、内面見込みに双魚の印文を有する。

なお、口縁形において、2、3、4類の区別は小差であり、この3者は一括した方が良いと考える。旧版の分類に準ずるならば、2類(上端平坦)と3、4類(上端凹面)に2分できる。

- 5、皿形に近いもので、体部は丸味を持ち、口縁部を薄く引き出す。この類は1～4類と口縁形が異

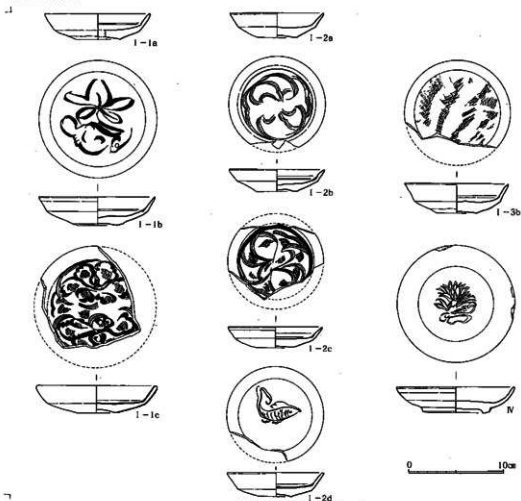


Fig.18 龍泉窯系青磁皿 (1/4)

なり、上記したように浅形椀または皿（高台付）に入れる方が適切かもしれない。

a、無文。

b、体部外面に錦蓮弁文を施すもの。

なお、III'類についても椀同様の基準とする。

坏IV類 (Fig.17, Pla.24)

図示した例は坏III-4類の系譜として把握できるもので、高台形はA形である。

皿I類 (Fig.18, Pla.25)

胎土、釉調は椀I類と同様である。体部中位で屈曲し、口縁部は直に引き出す。先端部は薄くなるが丸味を持ち、後述の同安窯系青磁皿と区別できる。法量により1類と2類に分ける。D期（XIV～XV期、12世紀中頃～後半）の標識磁器である。

1、底部外面は焼成前に釉を掻き取っている。

- a、無文。
 - b、内面見込みに篋で片彫花文を施すもの。
 - c、片彫花文と櫛目を施すもの。
- 2、1類と比べて小型のものである。底部は焼成前に釉を掻き取っている。
- a、無文。
 - b、内面見込みに花文を有するが、施文具が1類と異なり櫛状のもので描く。
 - c、2b類に比べ放射状に櫛目が入り、複雑な文様構成を持つもの。
 - d、片彫魚文を施すもの。
- 3、1・2類に比べ若干器形が異なり全体的に器肉が厚い。
- a、全面施軸した後に底部の釉を掻き取っている。
 - b、体部下半および底部には施軸しない。
- なお、3類は福建省産の可能性も考えられる。

皿IV類 (Fig.18、Pla.25)

高台を有するもので、高台形について碗IV類の分類基準を適用する。

その他の器形として、壺、鉢、壺（瓶）、香炉などがあるが、細分可能なほど種類は出土していない。これらについては碗の大分類I～IVを適用しておく。

(5) 同安窯系青磁

胎土は粘性が強く、硬質であり、灰色、淡黄灰色を基調とする。焼成良好な製品の釉は透明なガラス質で光沢があるが、黄色味、茶色味の緑色で、色調のバラつきも多い。釉膜は比較的薄く、化粧土はない。体部下位には施軸しない。

D期 (XIV～XV期、12世紀中頃～12世紀後半) の標識磁器である。

碗I類 (Fig.19、Pla.26)

1、逆台形状の厚い高台を有し、体部は高台部からやや内湾気味に外上方へ立ち上がり、体部上位で若干内側に屈曲する。内面見込みと体部との境に大きく段を有し、内面上位には沈線を入れる。内面に篋状の施文具による略化した花文と櫛の先端で押したジグザグ状の点描文を有する。

- a、外面無文。
- b、外面に細かい縦の櫛目文を有する。
- c、b類に比べて外面に粗い櫛目文を施す。

碗II類 (Fig.19、Pla.26)

I類と比べて底部の器肉が厚く、口縁部を僅かに外反させる。内外面とも無文である。

碗III類 (Fig.19、Pla.26・27)

II類と同様の形態で、体部外面に幅広の粗い縦の櫛目文を施す。

- 1、内面文様により細分する。

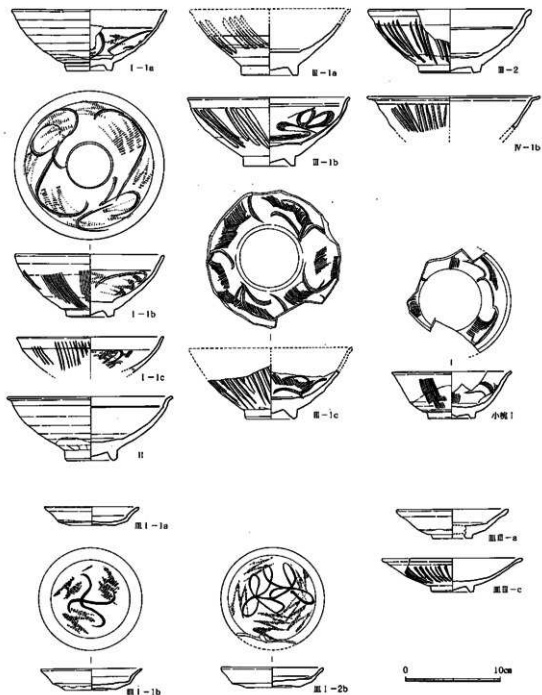


Fig.19 同安窯系青磁碗·小碗·皿 (1/4)

- a、内面無文。
 - b、櫛状の施文具により花文を描く。
 - c、櫛状の施文具および篋状の施文具により花文を施す。
- 2、III-1類と形態は相似するが内面見込み部分の軸を環状に掻き取るもの。内面上位には沈線を入れる。

椀IV類 (Fig.19)

- 1、口縁部をく字状に外反させるもので、II、III類に比べて器肉が薄い。
- a、無文。
 - b、体部外面にIII類と同様の粗い櫛目文を入れる。

小椀I類 (Fig.19、Pla.27)

体部の形は龍泉窯系青磁椀I類に近いが、高台形は同安窯系椀の特徴を有し、底部外面中央は凸状に削られる。

皿I類 (Fig.19、Pla.27)

口縁部端は薄く尖り気味で、体部中位で屈曲する点は龍泉窯系青磁皿I類と同様であるが、屈曲の上部は外側へ反転し、その内面は段状となる。

- 1、体部外面下半以下には施釉しない。
 - a、内外面無文。
 - b、内面に篋による文様とジグザグ状の髹点描文を有する。
- 2、全面施釉された後、底部外面の軸を掻き取る。
 - a、無文。
 - b、内面に篋による文様とジグザグ状の髹点描文を有する。

皿III類 (Fig.19、Pla.27)

高台付皿をIII類とする。1、2類と比べて体部は長く、屈曲は少ない。

- a、無文。
- b、有文。内面に櫛目を施す。
- c、体部外面に縦線（櫛目文か？）を施す。

(6) 初期高麗青磁

椀I類 (Fig.20、Pla.28)

胎土、釉の良質な精製品で、素文の純青磁と呼ばれるものに類する。

C期 (XII～XIII期、11世紀後半～12世紀前半)の標識磁器である。

- 1、蛇ノ目高台のタイプである。胎土は淡灰色、灰色を呈し、緻密なもの、やや砂味のもの、やや粗いものがある。下記のIII類に比べ精選される。白色粒を多く含むものもあるが、粒子は0.5mm以下

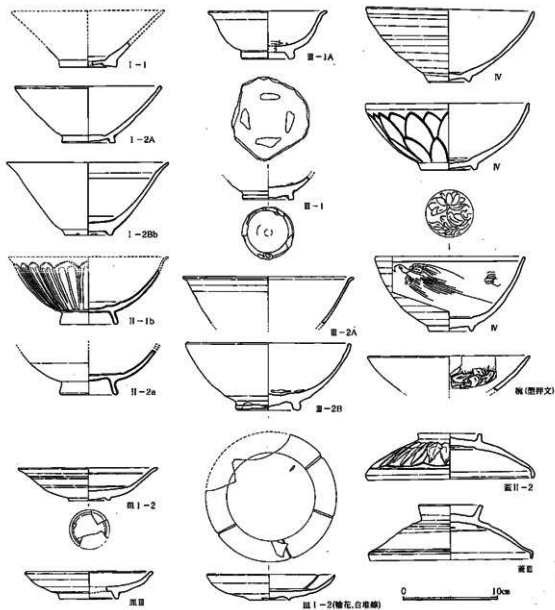


Fig.20 初期高麗青磁 (1/4)

下で、均に入っている。釉は半透明で光沢、貫入があり、黄緑色や青味を帯びた暗緑色に発色している。一部施釉されていないものもあるが、全面にやや厚めの釉が施されている。口縁は直口で、体部は外上方へ直線的に開くか僅かに内湾する。蛇ノ目高台内側の削り込みは浅い。内面見込みは小さく一段凹む。体部外面から底部は回転斲削りを行うが釉のため不明な点も多い。匣鉢内で個別焼成されたものと思われ、高台疊付けのみ白色耐火土の目跡がある。体部内外面とも無文である。

2、輪状高台のタイプである。胎土、釉、施釉、見込みの段、目跡などは1類と同様である。

A、形はI-1類に類似し、外上方に開きながら僅かに内湾する。底部の器肉は薄く、輪状の角高台をなす。無文。

B、A類に比べ深鉢形の器形で、体部は外上方へ僅かに内湾して開き、口縁部は長めで緩やかに外反する。体部下位から底部の器肉は厚く作られる。

a、無文。

b、口縁部内面に横沈線を入れるもの。

椀II類 (Fig.20, Pla.28)

体部は内湾して丸味を帯び、外面に蓮弁文を有するタイプのものが多い。高台は高く外反気味の長方形で、蓋II類とセットになる。目跡の付き方により精製品と粗製品の2種類があると思われる。C期(XII~XIII期、11世紀後半~12世紀前半)の標識磁器である。

1、精製品タイプのものである。胎土は灰色を呈しやや粗い。0.5mm以下の細かい白色粒が均一に入る。I類に近い。釉は厚めで青味の暗緑色、淡緑色で光沢、貫入がある。半透明で発色が良くI類に近い。I類と同様に全面施釉されるが、疊付けの一部は施釉されない。内面見込みはI類と同様に一段凹む。体部外面に蓮弁文を有する。蓮弁は上位に花卉の先端部外形を細く筧描きし、各弁に2本、弁と弁の間に1本の太い凹線を縦に陰刻したもので、陰刻の幅が広い半陽刻の外観を呈する。体部外面下位に細い横沈線を入れる。上下の蓮弁の界線は文様を割り付ける際の目安とも考えられる。目跡は疊付けのみに付く。

a、無文。

b、体部外面有文。

2、粗製品タイプで、内面見込みと高台疊付けに目跡がつき、重ね焼きを行ったものである。

a、1aと同様に無文。

b、1bと同様に体部外面有文。

椀III類 (Fig.20, Pla.28・29)

I、II類に比べ胎土、釉、手法が粗雑なもので、内外面に目跡を有し、重ね焼きによって造られた量産品である。胎土は灰色を基調とするが、淡灰、暗灰、灰白、淡茶灰、茶灰、灰黄、淡灰黄、橙灰、淡橙灰色など呈する。混入物はやや少なく生地が細かいものと0.5~2mmの白色粒子を無造作に含む粗いものがあり、後者の方が多い。化粧土をかけないため、胎土内の白色粒子は釉下、白斑状を呈する。釉調は灰緑色を基調とするものは多いが、黄緑、暗黄土、暗緑褐、濃緑、暗灰緑、灰褐色など様々な発色がみられる。釉は大半が不透明、不鮮明で、光沢のないものや少ないものが多い。また、全面施釉後に高台疊付けの釉を削り取る。高台は数方向に乱雑な削りを行うため疊付けに凹凸ができる。釉は薄く施釉されるものと厚く施釉されるものがある。I、II類に比べて釉の掛け方は均一でなく雑な感じを受ける。法量により1、2類に分ける。

C期(XII~XIII期、11世紀後半~12世紀前半)の標識磁器である。

1、口径13~15cm、器高5~6cm、高台径5cm前後の小形のものである。

A、体部下位は鈍く屈曲し、口縁部は短く三角形に外反する。輪状高台を有し、高台部外面は粗く面取りされ、稜線をなしたり、弓形をなす。高台部見込みは中央にへそ状の削り残した突起がある。高台部の内側の削り方は浅いものから深いものまであり、将来、細分が可能かもしれない。内面見込みと高台皿付けに白色耐火土の大きな目跡がある。2類に比べて小形品のためか4足のものが多い。

(a)、沈線なし。

b、内面に沈線を持つ。

2、口径16～19cm、器高7cm、高台径7cm前後のもので、1類よりひと回り大きい。

A、体部が直線的で口縁部が外反するか小さく三角形をなすものである。

B、体部が内湾気味で丸味を有し、口縁部が直口のものである。高台は輪状高台でやや高く太めのものが多い。高台部外面の面取りや中央のへそ状突起は1類と同様である。

b、体部内面に沈線状の段を有する。

3、上部の器形は不明であるが、高く外反した高台を有するものである。高台部外面は面取りを行っている。皿付けは内割を面取りして内傾させる。他のIII類に比べて胎土は淡茶灰色を呈し、やや細かい。釉は暗黄土色で光沢があり、やや発色は良いが不透明で厚めに施釉される。なお、このタイプは碗II-2類ないし蓋II-2類の可能性もあり、分類として除外すべきかもしれない。

碗IV類 (Fig.20)

口縁部は直口で、体部は底部から緩やかに内湾する。輪状高台であるが、多少鈍化している。内面見込みに小さく凹む段をつくる。無文のほか体部外面に二段の篋描蓮弁や内面に毛彫文などを有する例があり、細分する必要がある。先のI～III類より後出するタイプとみられ、類を分けた。

以上のほか、内面に型押しによる凸文（浮文）を有する例もあり、分類と文様について、今後整理を要する。

小碗III類

碗III-1類のさらに小形のものである。

皿I類 (Fig.20)

胎土、釉調とも碗I類と同様である。碗との対応関係で、1、2類を考えるが、現在I類の例（蛇ノ目高台）はなく、除外すべきかもしれない。

2、輪状高台。図示したように体部内面に白堆線、口縁部に輪花を有する例がある。

皿III類 (旧坏III類) (Fig.20, Pta.29)

全体的な特徴は碗III類と同様である。胎土は1mm位の白色粒を含み粗い。濃緑褐色でやや薄く施釉され、全面施釉後、高台皿付けの釉を削り取る。光沢、貫入がある。体部は内湾し、口縁部は僅かに外反する。高台はやや高い輪状高台で、外面は面取りする。内外に白色耐火土の目跡がある。

蓋 II 類 (Fig.20)

椀II類とセットになる蓋である。

- 1、内面に目跡はない。
- 2、内外面に目跡がある。

蓋 III 類 (Fig.20)

椀III-3類のセットと考えられるが、II類の無文に含まれるかもしれない。

〔2〕陶器の分類

冒頭に述べたように、陶器についてはA・B・Cの群別分類を行ない、各器種を総括して産地推定の手がかりとしている。この点については表3・4欄年図の注記に示した。

盤

盤 I 類 (Fig.21)

1、胎土は淡黄灰色、明灰色、赤褐色などを呈する。黒色粒、白色粒を多く含み、粗くザラザラしている。釉調は黄釉で、内面全体と口縁部外面に施釉され、口縁端部や口縁外面から底部は露胎とする。露胎の部分は赤褐色に発色することが多い。口縁部の釉は施釉後、拭き取ったもので、釉が薄く残存することも多い。化粧掛けを行う。器形は鐏状の口縁部を持ち、大きな平底でやや上げ底をなすものも多い。口縁部内外面に重ね焼きの目跡がある。

- a、無文。
- b、内面に鉄絵（褐釉で施文）を有する。

1'a、口縁部上面が湾曲し、先端を曲げる。1類よりも口縁部幅が狭い。器高は1類より高く深形である。胎土・釉調と施釉の特徴は1類と同様で無文が中心である。

2、胎土は1類と同じで、黄釉が主体である。内面のみあるいは外面上部から内面に施釉され、口唇部には施釉しない例があり、上記と同様に施釉後、釉を拭き取ったものである。外面の露胎部分は赤褐色、褐灰色、灰褐色、灰色、褐色などを呈する。体部は丸味を有する。口縁部は肥厚させ、断面方形に近い例が多い。外面上位から内面に化粧土を有する。口縁部に目跡を有する例が多く、胴部にも目跡を有するものもある。

- a、無文。
- b、内面に鉄絵（褐釉で施文）を有する。

2'、器形は1-2類と近似するが、口縁部断面は方形よりは鈍い玉縁となる例が多い。胎土・釉調などは下記のII-1類と類似し、粘質味で軟質焼成も多い。a、bの分類は上記と同様である。

上記1類の釉には緑釉および二彩の例がある。緑釉では内面鉄絵以外に線影文の例がある。

盤 II 類 (Fig.21)

1、盤I類と同様な例もあるが、混入物がやや少なく粘質味で、やや軟質焼成となるものが多い。紫灰色、灰白色、淡茶白色、暗灰色などを呈する。釉は黄釉で、緑味灰黄色、黄灰色、黄褐色、灰

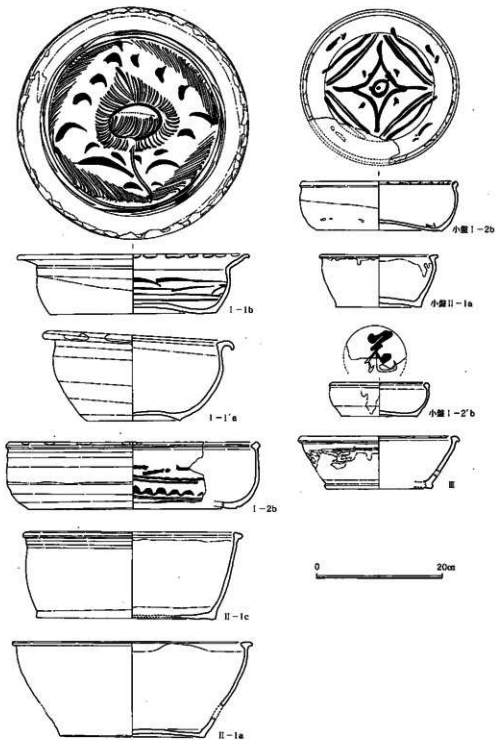


Fig.21 陶器 盤・小盤 (1/6)

緑色をなす場合もある。施釉はI類と同じで外面露胎部分は青紫色、赤褐色などに発色する。外面に黄緑色などの釉が薄くかかることもある。化粧土を有する。器形はI類に比べ器高が高く浅鉢形をなす。口縁部はT字、L字形をなす。口縁部に目跡を有する。内面は無文のものが多く、将来、有文（鉄絵）のものが予想されるためb類を空白とした。

- a、内面無文。底径割合はやや小さい。
- b、内面に鉄絵を有する。
- c、底径割合は大きい。

以上の盤I・II類の胎土、釉調は四耳壺III・IV類と類似する。

盤III類 (Fig.21, Pla.29)

胎土は淡灰色、黄灰色を呈し、比較的精良で均一だが粉味を帯び、少数の白色微粒子を混入する。釉は磁器質で黄褐色、茶褐色を基調とする。稀に濃茶色（鉄釉）の例がある。内面全体と体部外面上位一部に施釉される。口縁部の釉は施釉後、拭き取る。化粧土を有する。口縁部はL字形や玉縁状をなし、口縁端内面は若干突出する。体部外面下半は回転篋削りされ、体部最下位または底部外周に面取りを行う。底部は平底でやや上げ底をなす。口縁部に目跡を有する。

- a、無文。
- b、内面に鉄絵を有する。

また、濃茶色釉の例は底部内面中央に印文を持つ例がある。

小盤

小盤I類 (Fig.21)

2、盤I-2類に対応する小形品である。

- a、無文。
- b、内面に鉄絵を有する。

2'、盤I-2'類に対応する小形品である。

小盤II類 (Fig.21)

1、a、内面無文。底径割合はやや小さい。盤II-1a類に対応する小形品である。

鉢

鉢I類 (Fig.22, Pla.29)

胎土は暗紫灰色をなし、小豆色、灰色、青灰色、黒灰色、赤褐色、褐色、明褐色、灰赤色などを呈する場合もある。大粒の白色砂を多く含む粗い胎土で壺I~IV類の胎土と類似するものがある。体部は丸味を有し、底部は平底をなす。口縁部内面には1条から数条の突起を有する。体部外面下半は粗く回転篋削りされ凹凸が多く、外面最下位は篋による器面調整があり、底部は未調整で板起こしを行なっていると思われる。内面はあばた状の凹みが多く器面は研磨されていることから捏鉢に使用されたと考えられる。底部内外や口縁部に砂、粘土混合の大きな目跡がある。

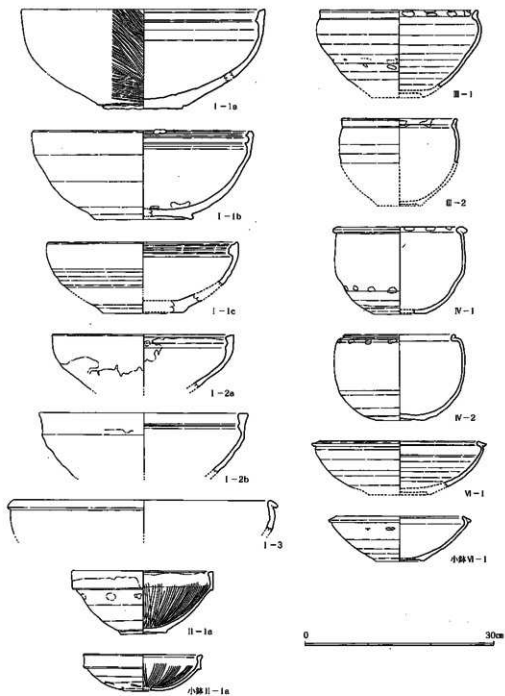


Fig.22 陶器鉢 (1/6)

- 1、無軸。表面は淡茶色、暗茶褐色、暗褐色、黄灰色を呈する。
 - a、口縁部内面に一条の突起を有し、外面に平行叩き目を有する。
 - b、口縁部内面の突起は一条で、口縁端部が内面にせり出し、二条の突起にみえる。
 - c、口縁部内面に数条の突起を有する。
- 2、施軸するものを2類とした。明緑灰色、淡褐色、灰白色などの薄い軸が口縁部内外や内面あるいは外面の一部にかかる。
 - a、口縁部内面に一条の突起を有する。
 - b、口縁部が外反する。
- 3、胎土は暗灰色、暗茶灰色をなし、1mm前後の白色粒子を多く含み粗い。口縁部は肥厚した鈍い玉縁状で、体部は内湾する。底部は平底と考えられるが欠損し不明。無軸陶器と考えられるが、濁黄灰色の軸状のものが口縁部を除き内外にかかる例があり、胎土とのなじみが悪く、これが剥落している場合が多い。軸状のものはガラス滓と見る意見もある。水注X類と同質の胎土である。

鉢II類 (Fig.22)

- 1、a、胎土は褐色、赤褐色、灰黄色を呈する。口縁部内外のみに茶褐色の軸を施し、他の部分は無軸である。器面は暗褐色、黒褐色、紫褐色を呈する。口縁部は長く肥厚させる。底部は平底をなす。内面に6~13本前後の掘目を縦に入れ、摺鉢に使用されたと考えられる。口縁部外面下や端部内面には目跡がある。小鉢II-1類の例も図示した。

なお旧版では1b~c、II-2類をあげ、摺り目を有する亜種としたが、これらについては1-a類と同群に属するか疑問もあり、今回削除しておく。

鉢III類 (Fig.22)

胎土は茶褐色、灰色が主体で、橙色、明灰褐色、淡灰色、淡赤灰色などを呈する場合もある。白色砂を多く含むものや紫色粒の入るものもある。黄白色、灰緑色、灰褐色、暗褐色、暗茶褐色などの軸が薄く施軸される。体部上位は内湾し「く」の字形に外反する口縁部がつく。胴部はやや深めの鉢形をなし、萐萐底風の底部がつく。体部外面下半は回転寛削りを行う。内傾した口縁部内面と体部外面中下位に目跡を有する。

- 1、最大径が胴部上位にある。
- 2、最大径が胴部中位にある。口縁部外面下に沈線が一本入る。

鉢IV類 (Fig.22, Pla.29)

胎土は暗茶褐色が主体で、赤褐色、紫灰色、橙灰色などを呈する場合もある。細かい白色砂を少量含む。光沢のある暗茶褐色の軸が内面全体から体部外面下位にかけて施される。体部外面下位と底部外面は露胎で暗赤褐色を呈する。軸のなじみが悪く白濁化するものがある。口縁部は折り曲げて玉縁状に肥厚させ、体部は丸味を有し、底部は平底ないしやや上げ底をなす。体部下半は寛削りされる。胎土、釉調は水注V・VI類に類似する。

- 1、体部上半は直立する。口縁部内面と体部外面下位に目跡がある。
- 2、口縁部が内側に入り肩が張った形態を有するもので、目跡は肩の外面のみにみられ体部下位に

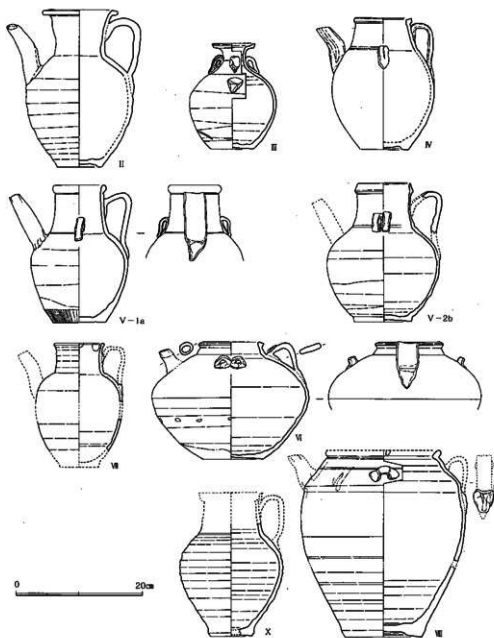


Fig.23 陶器水注 (1/6)

はない。

他にI類の小形品がある。

鉢VI類 (Fig.22)

胎土は明橙色、明褐色を呈し精良である。白色砂や暗紫色粒を含むものがある。黄色、明橙灰色、茶褐色の釉を薄く施す。器形は浅い鉢状をなし体部は開く。口縁部は肥厚させ「ハ」の字形に外側へ開く。底部は萁筒底風のもの。体部外面下半は回転寛削りを施す。口縁部外面に目跡がある。

1、口径30cm前後の大形品。口径20cm前後の小形品については「条坊跡II」でVI-2類としたが、今回小鉢VI-1類と変更する。

水注

水注II類 (Fig.23)

釉は黄色味を帯びる茶褐色釉で、胎土となじまず剥落しやすい例がある。口縁部は水平に屈折し、上面が窪む例もある。頸部は上方が開く。把手は2、3本の縦沈線が入る。底部は輪状高台につくる。体部外面の中下位に寛削りを行う。

水注III類 (Fig.23)

胎土は暗茶褐色、赤褐色などが主体で、釉調は光沢のある暗茶褐色、暗褐色などを呈する。小形品で、口縁部は皿形に開き、頸部は細い。胴部に注口はなく、口縁部の一端（把手の反対側）を摘み出して注口とする。底部は平底。下記の水注V、VI類と同質である。

水注IV類 (Fig.23)

胎土は茶色を呈する。釉調は黄色味の緑黄色釉で、底部外面は露胎である。釉は胎土と馴染みが悪く剥落しやすい。頸部は下方が開き胴部との境に小さな段をつくる。口縁部は角形に肥厚させる。注口と把手は対称に位置し、その90度回転させた位置に双耳が付く。高台畳付けは蛇ノ目状（または幅広の輪高台）に削り出される。胴部外面下半は寛削りされる。

水注V類 (Fig.23, Pla.30)

胎土は暗茶褐色が主体で、淡黒鼠色、暗灰褐色、暗灰紫色、黒褐色、赤褐色などを呈する場合もある。細かい白色砂を含み緻密である。釉調は光沢のある暗茶褐色釉、明褐色釉で胴部外面下位、底部外面を除き施される。露胎部分の器面は胎土と同様に暗茶褐色、赤褐色などを呈する。口縁部上面の釉は拭き取る。釉は素地となじまず白濁しているものがある。頸部はやや長く下方はわずかに開く。口縁部は断面三角形に肥厚させるものが多い。胴部外面下半は回転寛削りされる。注口と把手は対称に付き、その位置から90度回転させた位置に輪状に曲げた縦長の耳を1対有する。胎土、釉は鉢IV類と類似。

1、口縁が玉縁状に近く、底部は平底でやや上げ底をなす。

- a、耳は片面に1個つくもの。
- b、耳は片面に2個つくもの。

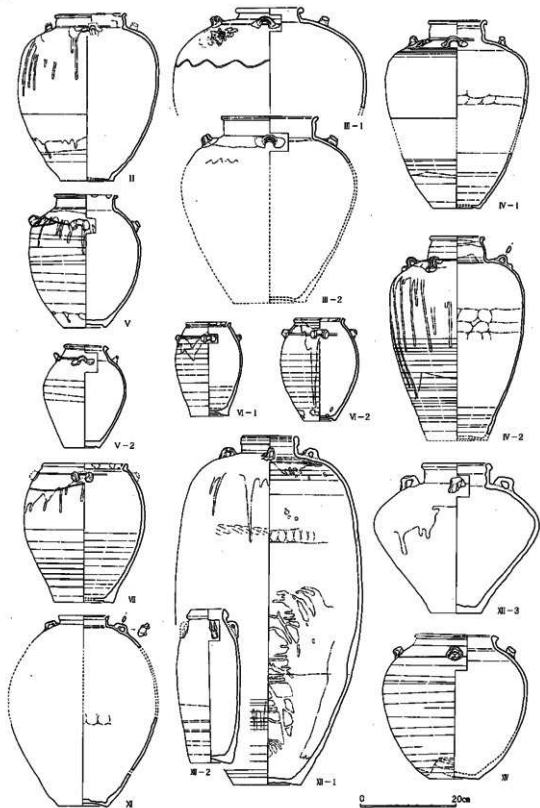


Fig.24 陶器 耳壺 (1/8)

2、口縁が三角形をなし内面は若干凹み、底部は円盤状に削り出され平底または上げ底をなす。

a、1類と同様。

b、1類と同様。

水注VI類 (Fig.23, Pla.30)

胎土は赤灰色、暗茶灰色。釉は暗茶褐色で光沢があり、体部外面下位以下は施釉されない。口縁部上面の釉は拭き取る。耳は輪状に曲げ、横形に貼付ける。底部は平底。体部中位下には目跡があり（推定15個前後）、鉢IV-1類と重ね焼きを行なった可能性がある。

水注VII類 (Fig.23, Pla.30)

胎土は灰色で白色粒を含む。釉は暗茶褐色で光沢はなく内外に施釉する。口縁部内面に5~6個のやや大きな目跡がある。

水注VIII類 (Fig.23, Pla.30)

胎土は灰褐色、暗茶色などを呈し、白色粒、黒色斑点を含む。釉は暗茶褐色、灰緑色などで底部外面を除き薄く施釉される。口縁部は「く」字形に外反し頸部と胴部の境は鈍い段となって明瞭ではない。口縁部内面に白色目跡がある。四耳壺VI、VII類の形態と類似する。

水注X類 (Fig.23)

胎土は鉢I-3類と同様で粗く、無釉陶器である。濁黄灰色の釉状のものが付着しガラス滓と見られる点で、ガラス増場として使用されたとの意見もある。口縁部は盤状で端部の一部を摘み出して注口としている。底部は平底で体部下位が屈曲する。

耳壺（双耳壺、四耳壺、六耳壺）

耳壺II類 (Fig.24, Pla.31)

胎土は暗褐色、淡赤灰色で粘質味を帯び、白色粒を含む。釉は薄い茶褐色釉の上に暗褐色釉を流す。頸部内面から外面下位にかけ施釉され、口縁部内面の釉は拭き取る。化粧土を伴う。頸部と胴部の境は鈍く段をつくるが明瞭に区別がつく。口縁部は玉縁状に肥厚させる。横形の四耳を肩上位に貼付ける。

耳壺III類 (Fig.24)

胎土は淡黄灰色を呈する。黒色粒、白色砂を多く含みざらついている。器形の最大径は胴部上位にあり、やや肩が張った形態をとる。頸部は胴部から直に上方へ屈折し、断面方形ないし玉縁状に肥厚させた口縁がつく。肩部に2条の凹線を入れた横形の四耳を有する。胎土、釉調は盤類に類似する。2種に大別される。

1、緑褐色の単色釉で、稀に暗茶褐色釉の例がある。胴部に波状寛文、横耳間に寛ないし印文を有する。2類よりも口径の小さな例が多い。

2、外面から頸部内面に黄釉（茶色味ないし緑味を呈する場合もある）をかけ、さらに肩部外面に暗茶褐色釉を流す。頸部は口径が広い。伝福岡県久山町出土の黄釉鉄彩四耳大壺に代表される。

耳壺IV類 (Fig.24, Pla.31・32)

Ⅲ類の後出型のものである。胎土は淡灰色、黄灰色、灰白色を呈し、Ⅲ類よりも粘質味を帯び軟質でやや粗製のつくりである。口縁部内外面から体部下半に施釉され、口縁部の釉は拭き取る。化粧土がある。形態はⅢ類に類似するが、頸部は口径が小さく中央部で外側に膨む。胴部内面には円盤状当て具痕がある。Ⅲ類と同じく2種に大別される。

1、緑褐色の単色釉で、肩部に横形の四耳を貼付け、各耳の間に印文がある。「蓮花王御壺」と呼ばれる伝世唐物茶壺(註2)に類品がある。

2、釉は黄緑色で胴部より暗茶褐色釉を流す。耳は縦形六耳で、外面に2条の凹線を有する。印文はない。

耳壺V類 (Fig.24)

胎土は茶灰色、橙灰色、明灰色、灰褐色などを呈する。赤紫色粒の入るものがある。釉は黄白色、茶灰色、褐灰色、褐色などに発色し単色釉の例が多いが、肩部外面に灰緑色、暗灰褐色、茶灰色などの釉を流すものがある。肩部外面に横沈線、波状沈線を入れるものがある。胴部上位に最大径を有し、頸部と胴部の境は明瞭である。頸部は下方が開き、外反ないし水平に屈折する口縁部がつく。肩部は横形の四耳を有する。底部は外面中央を挟み、輪状ないし蛇ノ目状の高台にする。胴部外面上位から底部にかけ回転斲削りを施す。口縁内面や胴部外面下位に目跡を有する。胴部器形で2種に大別する。

1、胴部が膨らみ球胴に近い。

2、Ⅰ類より器高が高く長胴となる。

耳壺VI類 (Fig.24, Pla.31)

胎土は灰色、赤灰色、茶灰色、暗褐色、明橙灰色、暗灰色などを呈し、黒色粒や紫色粒を含む。釉は灰褐色、灰緑色、淡茶灰色、緑味黄灰色、稀に黒褐色を呈する。発色が様々で一定でない。胴部外面上位に黒褐色、茶褐色、暗緑褐色釉を流すものも多い。全面に施釉するものと底部外面のみを露胎とするものがある。胴部外面上位に横沈線、波状沈線を入れるものもある。頸部と胴部の境は不明瞭で樽形の形態に近い。口縁部は「く」字形に外反する。胴部上位は横形の四耳を有する。器高20cm前後、口径10~15cm前後の小形品の類に属する。胴部外面上、中位から底部は斲削りされ、口縁内面や胴部外面下位に目跡がある。高台形状で2種に大別する。

1、幅広の畳付で内側がやや浮き、体部下位は若干外反する。口縁部内傾面のみ目跡のつく例が多い。

2、若筒底風の輪状高台で体部下位は外反しない。口縁部と体部外面下位に目跡がある。推定6~7個。

耳壺VII類 (Fig.24, Pla.31)

胎土は淡赤灰色、灰色、緑味灰色、黄灰色、明灰色、茶色、暗褐色などを呈する。暗紫色粒を含むVI類に似た胎土のものがあるが、良質で白色砂の入るものも多い。釉は光沢のある灰緑色釉のものが多いが暗褐色、暗茶褐色、暗灰褐色に発色する場合もある。内外面施釉され、胴部外面上位に褐釉、暗茶褐色を流す。胴部外面上位に横沈線、波状沈線を有する。VI-1類と同様な形態

であるが、器高30cm前後の大型品でVI類より精製されている。胴部外面中位以下は回転斫りされ、口縁部内面に9～10個前後の目跡がある。

耳壺XI類 (Fig.24, Pla.32)

胎土は灰褐色で白色砂や黒色斑点が入る。無釉で外面は黄灰褐色をなす。胴部外面に平行叩き、内面に円盤状当て具痕を残すものがある。器壁は薄いため大ききの割には軽い。底部は平底で、長胴形。頸部は短く直立し、口縁部は肥厚させる。肩部に縦形の耳を付ける。耳は双耳と四耳の例がある。

耳壺XII類 (Fig.24, Pla.32)

胎土は茶灰色系で灰色、暗灰色、淡茶灰色などを呈し、黒色斑点や白色砂がやや多く粗い。ただし別項目に記す壺の胎土よりは密である。釉は明茶褐色、暗茶褐色釉で光沢は少ないものが多く、底部内外面、胴部内面を除き薄く施釉される。内面は露胎であるが釉は落下する。大形品で胴部上位が張る。頸部は全体からみれば短く小さい。胴部外面は平行叩き、内面は円盤状当て具痕が残る。胴部外面下半は粗い回転斫りを施し凹凸がつく。底部外面に粗い白色砂が多くつく。

- 1、直立した頸部に折り曲げて肥厚させた口縁がつくもので、縦長の四耳を有する。
- 2、下方に広がる頸部で、口縁はあまり肥厚せず外面に突帯を持つ。肩部に双耳を有する例と報告される(条坊II-Fig17、大宰府史跡調査分)。ただし欠損部分もあり、I類と同様な縦長の四耳の可能性もある。I類との差は少なく、I類に含めていいかもしれない。
- 3、I類の胴部を短くしたもので、その他の特徴はI類と同様である。器内もI類同様に厚く重たい。

なお上のI類に類似した長胴四耳壺で、古く廻る例が博多で報告されている(表4-19)。口縁部はあまり肥厚しないもので、この群に入るならば追加分類が必要となるが、今後の検討としておく。

耳壺XIII類 (Fig.24)

胎土、釉調は鉢IV類、水注V・VI類などと類似する。胴部は長胴で肩に縦形の双耳、四耳を持つ。底部は平底で上げ底となることが多い。口縁部の形態に特色があり、断面が長い三角状で外面下方が膨らみ、内行した幅広い縁帯となる。縁帯外面は凹面をなすことが多い。

- 1、耳が付かないもの。「条坊III」では壺III類としたものであるが、今回分類を変更した。
- 2、耳が付くもの。

耳壺XIV類 (Fig.24)

胎土、釉調は鉢IV類、水注V・VI類などと類似する。胴部は張りが強く球胴に近い。肩部には環状に曲げた横形の四耳を持つ。頸部は短く内行気味に立ちあがり、口縁は断面三角形に近い。底部は平底。

壺(無耳壺)

壺I類 (Fig.25)

I類は各種形態が含まれているが、現在整理中であり、下記には記号化した一部を掲載した。

胎土は褐色味の灰色を呈し精良であるが黒色斑点を含む。釉は黄緑色、淡黄緑色、灰褐色釉で

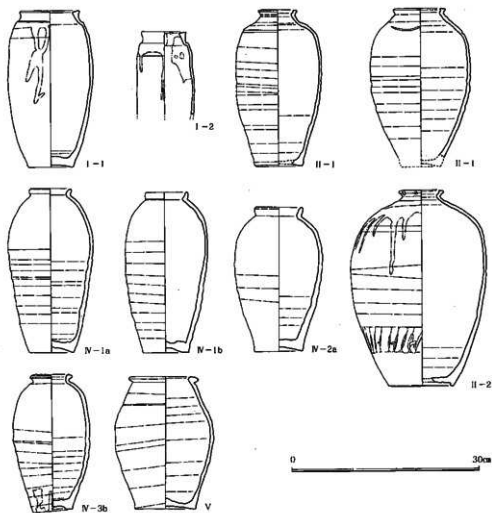


Fig.25 陶器壺 (1/6)

ある。器形は長胴形で、頸部と胴部の境は段がつき明瞭である。

1、最大径を胴部上位に有し、口縁部は外反ないし玉縁状に肥厚させる。口縁部と短い頸部が分離できるもの。底部は平底である。

2、口縁部は逆三角形状に肥厚させる。口縁部と頸部が分離できず不明瞭なもの。底部は平底である。この類の施軸範囲は狭く、体部上位の内外に限られる。

他に底部が輪状高台をなす一群があり、今後記号化したい。

壺Ⅱ類 (Fig.25、Pl.33)

胎土は淡茶灰色・淡黄灰色で白色粒を少量含み、精良である。釉は茶褐色・緑褐色・灰緑色などで内外面施軸され光沢がある。口縁部は断面三角形で横へ引き出す。胴部はやや膨らみをもつ長胴で、頸部は寸詰まり状となり短く目立たない。

1、単色釉で、底部は平底でやや上げ底をなす。胴部上位に波状沈線、横沈線を入れる。口縁部上

面、底部外周縁などに白色目跡がある。

2、肩部に暗茶褐色釉を流す。1類よりも一段大形で、底部は基筒底状をなす。肩部あるいは口縁部外面に白色砂目跡がある。

壺IV類 (Fig.25, Pla.33)

胎土は灰色を基調とし、茶褐色、赤褐色、淡茶灰色、灰色、灰褐色、紫灰色など様々な色調をなし、通例では黒色斑点を含み、白色粒が少量入る例もある。釉は光沢のない暗茶褐色が主体であるが、茶褐色、暗茶褐、黒褐色釉、稀に灰褐色に発色するものもある。内外面に薄く施釉されるが、体部外面下位以下は施釉しない例もある。器形は長胴形で胴部上位から中位が膨らむ。口縁部は「く」字形に短く外反する。底部は篋削りされる。胴部外面中位以下は粗く回転篋削りされた凹凸がある。底部外面に大きく3ヶ所の目跡が付くのが通例であり、口縁部に目跡のつく例は少ない。

1、胴部が長く口縁部が内傾し短く外反する。器高30cm前後のもの。

- a、平底もしくは上げ底風のもの。
- b、底部内面を抉り高台状につくるもの。多くは鈍い抉りで明瞭な高台をなさない。a類の変形かとも考えられる。

2、a、胴部が短く小形（器高22.0cm前後）のもの。

3、口縁部が断面三角形をなす。

- a、平底もしくは上げ底風のもの。
- b、高台状をなすもの。

壺V類 (Fig.25)

この種の器形は比較的雑なものからやや上質のものまでばらつきがあるが、ここには器形、手法とも端正な部類に属するものをあげた。胎土は灰色をなし混入物はなく精良である。釉は黒茶褐色で鈍い艶があり、均一で滑らかである。内外全面施釉され、その後口縁部上面の釉を拭き取り、底部外周の釉は削り取る。胴部は樽形であるが、上部に低い段をつけ頸部との境をつくる。口縁部は鋭く横に引き出す。底部は平底でやや上げ底をなし、大きく環状に砂目がつく（または3方の目とも考えられる）。体部中位やや上から回転篋削り痕を残し、器面にその凹凸を残すが比較的丁寧な手法である。

壺(仮)XV類

小形品に属する瓶形。胎土は淡黄灰色系で、白色粒を含み緻密。薄手で焼成は良い。釉は茶色、濃茶色などを呈し、施釉は局部的で、口縁部内外と肩部上位に止まる。長胴で短く小さな頸部がつく。底部は平底で底径は比較的大きい。胴部内面はロクロ目が強く凹凸をなす。肩部上位に目跡がつく。博多（森本分類）のA群III類褐色小口瓶に相当するものである。

壺

壺I～V類の底部は平底で外面に砂が多く付着する。口径に対して底径は小さい。

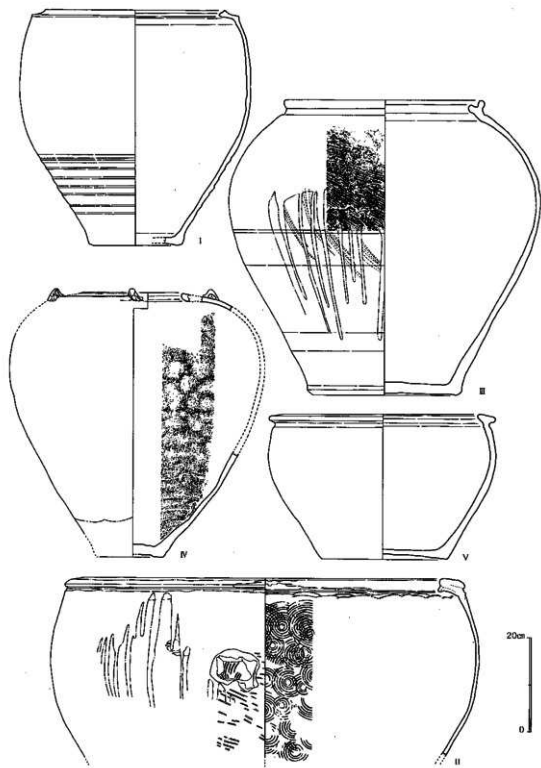


Fig.26 陶器 甕 (1/8)

甕Ⅰ類 (Fig.26)

胎土は赤褐色を呈し白色砂を多く含む。釉調は灰黄色釉で白濁して発色の悪いものがある。口縁部、底部を除き内外面に薄く施釉される。口縁部の釉は拭き取っている。口縁部は内側へ屈折し外面に稜線をつくる。内面に同心円の当て具痕を有する。

甕Ⅱ類 (Fig.26, Pla.33)

胎土は赤褐色を呈しⅠ類と類似し、白色砂、紫色粒を多く含む。釉は緑褐色、暗緑色釉で口縁部を除き施釉される。内外に数度流し掛けられるため釉はやや厚い。口縁部の釉は拭き取っている。口縁部はL字形をなし、上部は厚く端部は内面に突き出す。口縁部外面と体部の境は太い凹線状をなす。胴部外面は目の粗い平行叩き、内面は同心円の当て具痕である。

甕Ⅲ類 (Fig.26)

胎土は暗茶褐色、褐色、紫灰色、暗赤色を呈し、白色砂や紫色粒を含む。白黄色、暗灰緑色釉を内外に施す。口縁部は2又に分かれY字形をなす。胴部はⅠ、Ⅱ類に比べ強く張る。内面は同心円状の当て具痕を有し、その上を横ナデ調整で消しているものがあり、外面は平行叩き目の上を横ナデ調整するものもある。

甕Ⅳ類 (Fig.26)

胎土は紫灰色を呈し白色砂が多い。釉調は暗緑褐色、灰緑色釉で口縁部以外に施釉する。胴部内面は施釉しないが、黄褐色釉を内面に薄く施すものがある。胴部は丸味を有し口縁部は内湾する無頸壺形のものである。口縁部は上端へ次第に肥厚させ、内外面ないし外面のみに深い横沈線を入れて胴部との境をつける。肩部に縦形の四耳を有する。「条坊Ⅱ」では縦形の四耳をⅠ類、横形の四耳を2類として分類したが、耳の付け方は乱雑な例もあり、横形とした例は斜めに曲がって付けられた可能性もあるので1・2類の分類記号は今回削除した。法量に大小がある。胴部外面は平行叩き、内面は円盤状当て具痕がある。破片の場合、他の甕とは内面の当て具の違いで分類可能と思われる。

甕Ⅴ類 (Fig.26)

Ⅰ～Ⅳ類より器高の低い中形品で、分類番号を今回追加した。Ⅱ類の亜種とも考えられるが、口縁部断面はT字形でやや異なる。内面は同心円状の当て具痕を有する。釉は褐色、濁灰黄色などを呈する。この類には軟質で無釉らしい例もある。

註 (4章)

- 1、百瀬正雄「平安京跡出土の中國陶磁器—10～11世紀の白磁、青磁を中心にして」『貿易陶磁研究No.6』1986
- 2、「黒花王御壺」伝世産物茶壺に類品。福岡県柳川市立花部の所蔵品に類品がある。

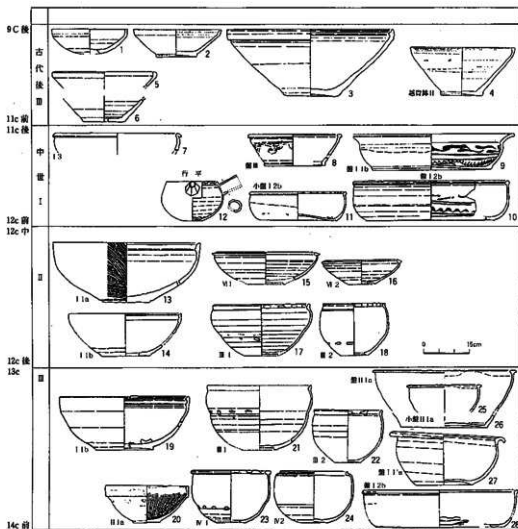


表3、貿易陶磁鉢・盤類年表

(表3) 1 福岡市博多港跡 SK02, 2・4 博多港跡 SK56, 3 博多港跡 SK255, 5・6 博多港跡 SK01, 7・8 大宰府桑坊跡 19次堀上土, 9 福岡市博多港跡 2次S41土層, 10 大宰府南桑坊跡 2次3層, 11 大宰府南桑坊跡 2次4層, 12 博多港跡 2次S26土層, 13 大宰府史跡39-3次, 14 大宰府桑坊跡11次 SK050, 15 大宰府桑坊跡27次 SK205, 16 博多山原町 C.D区 259土層, 17 大宰府史跡70次 SE1770, 18 大宰府南桑坊跡 SD051, 19・21-24・26 大宰府桑坊跡19次 SK004, 20 大宰府南桑坊跡 SK617, 25 大宰府南桑坊跡 4, 26 大宰府南桑坊跡 SK410, 27 博多筑前国入111号土層 * 4は越州系系青磁鉢Ⅱ類 A1群(8) A2群(23・24) B2群(15-18) B3群(21・22) C1群(9-12・25・26・7) C2群(28) * 器種のつぎの数字のみは鉢

(表4) 1 大宰府桑坊跡27次 SD202, 2 大宰府桑坊跡29次 SD130, 3 大宰府桑坊跡27次 SK157, 4 大宰府桑坊跡27次堀上土 凹み, 5 大宰府桑坊跡27次堀上土, 6 愛媛県松山市石手町経塚, 7 福岡市博多聖福寺境内, 8 京都府藤山町松田経塚, 9 大宰府桑坊跡27次堀上土, 10 久留米市横道 SK424, 11 大宰府桑坊跡14次灰濁土, 12 大宰府史跡39-1次 SE870, 13 大宰府史跡119次 SD350, 14 大宰府桑坊跡27次 SX163, 15 大宰府南桑坊跡 2次, 16・17 博多, 18 博多引揚1, 19 博多14次B区中層, 20 浮羽郡田主丸町觀音寺5号経塚, 21-25・30・34-38・40・41・45 大宰府桑坊跡19次 SK004, 26・27 博多筑前国出入口1号土層, 28・42・43・46・48 博多, 29・32 佐賀県靈仙寺, 31-33 大宰府桑坊跡19次 SD001, 44 大宰府南桑坊跡 SE509, 47 埼玉県東松戸市岡・光福寺境内 * 6・29・32・47以外は福岡産

西暦(1) 白磁(2-6・21・22・47)磁石陶器 高麗無釉陶器(12-15) 数字は分類番号
 陶器 Ⅱ群(7・8) C1群(10・11) A2群(24-27) 水=水注
 B3群(16-18) C2群(29・40) 耳=耳耳
 B3群(29-34) 数字のみは器種耳

* 表3・414山本信夫・山本保雄『中世食器の地域性—10.九州・南島諸島』『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集1997を若干訂正している。

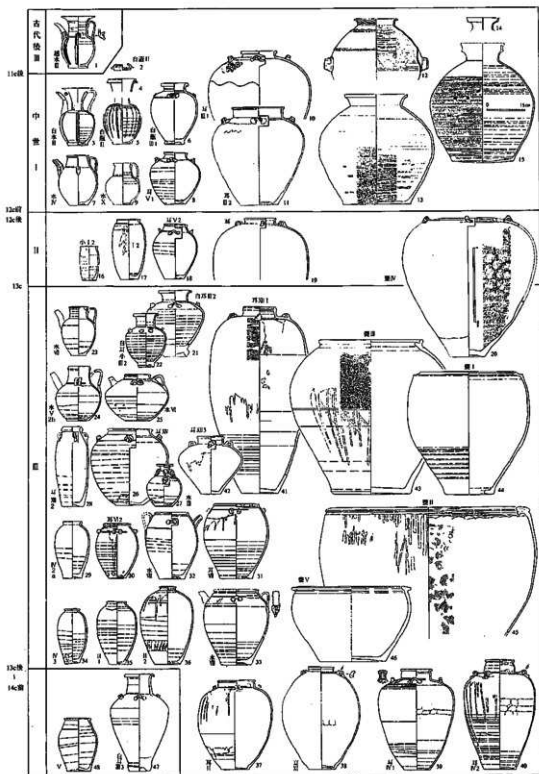


表4、貿易陶磁 貯藏具編年表

参考文献

- ・横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館 研究論集4』1978
- ・森田勉「14～16世紀の白磁の分類と鑑定」『貿易陶磁研究』No.2 1982
- ・「大宰府条坊跡11」大宰府市の文化財第7集 1983
- ・「大宰府条坊跡11」大宰府市の文化財第8集 1984
- ・山本信夫「日本における初期高麗青磁について-大宰府出土品を中心として-」『貿易陶磁研究NO.5』1985
- ・山本信夫「大宰府の発掘と中国陶磁」『北九州の中国陶磁』北九州市立考古博物館 1988
- ・山本信夫「北宋期貿易陶磁器の鑑別-大宰府出土品を中心として-」『貿易陶磁研究 NO.8』貿易陶磁研究会 1988
- ・山本信夫「大宰府の中国陶磁 -白磁分類の問題点-」『古文化談叢第20集(中)』1989
- ・山本信夫「大宰府市における情報整理-わが研究室における考古学資料の収集方法-」『第2回考古学におけるパーソナルコンピューター利用の現状』香塚山考古学研究所1989
- ・山本信夫「11・12世紀の貿易陶磁器 -1980年代の毎年研究を中心として-」『貿易陶磁研究 NO.10』貿易陶磁研究会1990
- ・山本信夫「大宰府における13世紀中国陶磁の一群」『貿易陶磁研究 NO.10』貿易陶磁研究会1990
- ・山本信夫「九州地方-波瀾を越えたイスラム陶器-」『東洋陶磁学会会報 第14号』東洋陶磁学会1991
- ・山本信夫「東南アジアの9-11世紀貿易陶磁」『貿易陶磁研究 No.11』1991
- ・山本信夫「大宰府の陶磁器」『貿易陶磁研究会 九州大会資料』1992
- ・山本信夫「大宰府と貿易陶磁」(第2編第10章第2節)『大宰府市史』大宰府市1992
- ・山本信夫「中世土器の様相、中世の土器-陶磁器-」(第3編第6章第1節、第2節1.3)『大宰府市史』大宰府市1992
- ・山本信夫「九州地方-平安時代前半の墳墓と貿易陶磁-」『東洋陶磁学会会報第17号』東洋陶磁学会1992
- ・山本信夫「大宰府における浙江省青磁の変遷-8世紀末～14世紀-」『New Light on Chinese Yue and Longquan Wares』香港大學亞洲研究中心 Chumei Ho編1994
- ・山本信夫「九州地方-薩島の初期貿易陶磁器と新発見の白磁」『東洋陶磁学会会報第26号』東洋陶磁学会1995
- ・山本信夫「ベトナム中部の陶磁器生産と貿易-ゴサイン窟群の発掘調査-」『東洋陶磁第23・24号』東洋陶磁学会1995
- ・山本信夫「北宋期越州系青磁の検討」『大宰府陶磁器研究-森田勉氏遺稿集-追悼論文集-』1995
- ・山本信夫・山村信榮「中世食器の地域性-九州-」『中世食文化の基礎的研究 国立歴史民俗博物館研究報告 第71集』1997
- ・山本信夫「(特論) 新安海底遺物」『考古学による日本歴史10対外交渉』藤山園出版 1997
- ・山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器-陶磁器』真陽社 1995
- ・山本信夫「森田氏の考古学と作品」『大宰府陶磁器研究』森田勉氏遺稿集-追悼論文集- 1995
- ・山本信夫「九州地方の消費遺跡から見た宋・元時代の龍泉窯青磁」『シンポジウム「宋・元時代の龍泉窯青磁を考える」』1999
- ・山本信夫「中世前期の貿易陶磁器 -その分析視点-」『原道館七部九一地区・口寺田遺跡』国東町教委 1999
- ・横田賢次郎・森本朝子・山本信夫「新安沈船と大宰府・博多の貿易陶磁器-森田勉氏の研究成果に寄せて-」『貿易陶磁研究No.9』1989
- ・金武正紀「ピロスタタイプ白磁碗について」『貿易陶磁研究』No.8 貿易陶磁研究会 1988
- ・森田勉「毛筆文様のある二、三の青磁について」『古文化談叢6』1979
- ・森田勉「大宰府の出土品 土器、陶磁器」『仏教美術146』1983
- ・森田勉「北部九州出土の高麗陶磁器-福年試案-」『貿易陶磁研究No.5』1985
- ・森田勉「九州の紀年銘資料に伴う出土陶磁器」『貿易陶磁研究No.6』1986
- ・折尾学・森本朝子「福岡城址」『福岡市高速鉄道関係組織文化財調査報告III』1983
- ・森本朝子「博多出土貿易陶磁器分類表」『福岡市高速鉄道関係組織文化財調査報告IV』1984
- ・池崎謙二・森本朝子「博多出土北宋後半期の貿易陶磁」『貿易陶磁研究No.8』1988
- ・森本朝子「12世紀の中国陶磁に関する新発見」『博多研究会誌 第4号』1996
- ・森本朝子「博多出土の貿易陶磁 その分類試案」『博多研究会誌 第5号』1997
- ・出光美術館編「近年発見の遺址出土中国陶磁器」1982

5、磁器の属性

○属性対照表の活用について

本表は陶磁器分類の際に手引きとして活用するための補足資料である。

ここには陶磁器の属性を分類別に総括し、破片の同定を可能とするための要点を示しており、実際に太宰府市では整理作業や報告書作成にこれを活用している。

この表によって、陶磁器の分析に有効な視点が得られると確信するが、統計資料数がまだ少ない類もあり、的確な属性分析にまで完璧に到達しているというわけではない。特に表中の記号空欄部分は一定属性として決め難い点を残しており、今後の検討を要する。また記号化した部分においても多少の修正が生じると思うが、この点については今後、随時補正していきたい。

なお分析における制限については以下の点に注意して欲しい。

- 1、ここでは14世紀中頃までの陶磁器分類にとどめ、後半以降出土する類については含めていない。
- 2、属性は比較的典型的な特徴という点に絞られている。ばらつきのある部分も含めると項目作成は難点が生じるためである。この点については同一分類内における個性よりも一般性の抽出を目指している。
- 3、各項目の適否は上記分類の範囲内という制限があり、これ以外の未分類のものまで援用できるとは限らない。しかし、各分類の系列内であると判断できる場合は、部分的に援用は可能である。
- 4、同定しようとする陶磁の属性項目のうち、何項目が該当するかという点は大事である。例えば、10項目中、8項目が該当するならば、かなりの確率で分類同定が正しいと予想される。

(凡例)

各項目の属性番号1、2…は各陶磁器分類の〔表〕と対応する。

×は表では表しにくい内容を付加した。

()は確定した分類ではなく、現在使用している仮番号である。

〔表〕中の記号については次の意味を示す。

○…… 一部分該当する。

●…… 大部分該当する。

- …… 異質。

▲…… 他の項目と重複するが、注意を要する点。一例をあげると、皿は内面底部と体部の境が不明瞭な器種がある。体部中下位に付く圈沈線は、見込み外周と見るか、体部内面の装飾的圈沈線とみるか判断は難しい。この例では「見込み段2(の例が多い)」に●印を付け、さらに「文様・体部内面・横沈線」に▲印を付けて、両項目からアプローチできるように配慮した。

空欄…… 現在不明瞭な点あり。

この表を参照しながら、読者はパズルを解くように一個の陶磁器の分類を言い当てることができる。……となれば幸いである。

① 胎土

- 胎土と釉の2面から特徴をみると (I), (XI), (II, XII, XIII), (III-VIII), (IX), (X) の群に大別される。
1. 純白、乳白、乳黄灰色で緻密、精良。柔らかに撥かみのある色調。……I-1~3・5
 2. 僅かに青白色味を帯びる白色。I類より硬質でやや粗くII, IV類より粗良。……I-4, XI, (II-0), X, B, (XIV-1)の一部
×Xは上に近いが他の特色から分離可能。
×XIの一部は淡灰色味、黒色粒を含む……XI'、III-Vに近い。
 3. 淡灰色、淡黄灰色でやや甘い。微細な黒塵、あるいは白塵が入る。磁器質というより陶器質の胎土。……II, XII, XIII
 4. II類と近似するが黒塵は少ない。焼成やや甘く砂味を帯びる。……XII, XIII, (II-5)
×II-5の一部は胎土の良いものあり。
×XIIはXIIIよりも良質で乳白、黄白色の白色。
 5. 淡灰色、灰白色で硬質、胎土に気泡があり粗い。黒塵を含むものもないもの。……III-VIII, IX。範囲が広い。IXは釉で分離可能。
×IXは白色で良いものがある。
×IVの玉縁が小さくシャープなものも良いものもある。

② 釉

1. 乳白、淡黄白色、平坦な厚みで表面滑らか……I-1~3・5
×釉のやや厚いものもある。貫入が殆どない。
2. 僅かに空色味 (水色味) を帯びる白色で平均的な厚み。表面は滑らか、発色は柔らかい。青白磁的。……I-4, XI, (II-0), B
×淡緑色味や黄白色味を帯びるものがある。
×表面やや凹凸のものあり。
×灰色味、灰緑色味の暗い発色を帯びるものがある。……XI'
3. 灰色味、灰緑色味、黄灰色の暗い透明釉が多く、やや厚く施され、表面は気泡、凹凸がある。……III-IX, C
4. IXは濁った空色味で釉は平均化し厚く、III-VIIIと分離可能。
×IXの良質なものは淡緑色味の白色である。
×白色、淡黄白色の良いもの少数あり。
5. 乳白色、黄色味、灰黄色、灰緑色味で薄く施す。釉は細かく貫入の入るものが多い。柔らかな発色……II, XII, XIII
×XIIは乳白色味多い。
6. 白色、僅かな水色味、淡黄白色の白色、釉は厚く均一、良質。青白磁的。……X

③ 施釉

(胎面)

1. 全面施釉後裏付を削る。……I-1・2・4・5、小碗I-3・5
2. 口縁部の釉を削る。(口売け) ……IX-1・2, X
×IX-1, Xは全面施釉される。IX-2は体部外面下位以下施釉しない。
3. 体部外面下位以下から底部外面または高台部外面のみを施釉しない。……I-1・5・4、II-VIII, IX-2, XI, XII, XIII, XIV, B, C
×I-1は上記のように2通りある。
×I-2, XI, Bは高台部まで施釉されるものが多い。
4. 内面見込みの釉を環状に掻き取る。……VIII, (VIII-0) (化粧)
5. 化粧土がある。……II, XII, XIII
×I, XIには例外的に認められる。

④ 器形

(口縁部)

1. 小さな玉縁……I-1・4, (II-0), II-1, V-3, XI-1・2, XI'-2, A
×V-3は小さく玉縁状に曲げる。
2. 大きな玉縁……III, IV
×III, IVは一部小さなものもある。
3. 扁平な玉縁……II-5, IV-le・3c
4. 直口縁……I-2・5, II-3・4, V-1, VIII-2, X-1・2, XI-4・5, (VIII-0), C
5. 外反、屈曲……V-2, VI, VII, VIII-4, IX, XI-3, XII, XIII, (XIV), C-2
6. 横へ屈折……V-4, VI-2, VIII-1・3, XIV

(体部)

1. ストレート……I-1・2・4・5, III, IV, VII, VIII
 2. やや丸味 (=丸味弱い) ……II, V, VI, VII, IX, XI, XI', XII, XIII, XIV
×II, XIIIは上半丸味。V, IXは体部下位に丸味。XIV, XIIIは体部中位で内湾。
 3. 傾斜気味……VI, VII, VIII, X-1
×これらは傾斜でVと分離可能。ただしV-4には浅形のものがある。
- (底部)
1. 釜ノ目高台。底部は薄い。……I-1・2・4
×壺行がやや丸い。……I-4
 2. 低い輪状高台。内面を斜めに削る。底部は薄く水平。……XI
 3. 高台外面を直に、内面を斜めに削る。底部やや厚い。……II
 4. IIを高くした形の高台。……XII, XIII-1・2, XIV
 5. 削り出しが深く底部厚い。……IV-1
 6. 上より若干内部を深く削つたもの。……III, IV-2
 7. 進台形の高い高台……V
×XII, XIII-1, (XIV) も高いが形態が異なる。
 8. Vより低く細い高台……VI, VII, VIII
 9. 低い進台形、外面き。……IX
 10. 角高台……I-5
 14. 小さな角高台……X
 15. 細く高い高台……小碗I-3
 16. 内湾の進台形……B, C

(見込み)

1. 太い凹線状の段……VII, IX-2, XI-1・2・4・5
×VIIの見込み径は小さい。
2. 段の見込み側が一凹む。……XI, (III-2), II-4, II-5, IV-1b, (VIII-0)
×V-1の一部も該当。
×見込みの径が広い。……XI
3. 段×体部が厚くなる。……IV, V, XII
×IV, Vには段のないものもある。
4. 見込み掻き取りの段……VIII-2, 3, (VIII-0, VIII-4)

⑤ 文様

(体部内面)

0. 無文
1. 線の内縁線……(III-2b), II-3b, II-4b, VII-c, VIII-4, (XIV)
- 1' 線の隆線……I-2b
×体部外面の隆押圧線による内面隆起線の場合は除外する。
2. 節目……V-le・d, V-2b・c, V-4b・c, VI-1・2b, VII, (VIII-0)の一部
3. 窓描または細かい鶴羽の花文……I-5の一部, VII, XIII-b
4. 瑞雲図押……X-b, B
5. 横波線……II-5, IV-le, XI-4・5, XIII
×ないものもある。
×II-5, IV, XIは下位のみあり。

(底部内面)

0. 無文
1. 見込みに花文の陰刻印文……VII, IX-2b, C-2
(体部外面)
0. 無文
3. 縦線花弁文……V-2b・3b
2. 縦線花弁文……V. (1b)・2b・2c・3b・4c, XII-1b
×XII-1bは体部外面下位に棲をもつ。Vと分離可能。
1. 体部押圧線文……XI-3・5, (I-5)
4. 瑞雲圖弁……XI-4
5. 片形蓮弁
(口縁)
1. 輪花……(II-3c), V-ld・2c・4d, VII, VIII-4, XI-3・5, XIV-b

⑥ 焼造法、焼合の形状

1. 高台座より大きな焼合……I-VII, XII, XIII
2. 高台座より小さな円形焼合……XI
×IV, Vの一部にもあり。
3. 高台座焼合……VIII
4. 口縁伏せ焼合、蓋ね……IX, X
×倍多IV-3, IV-4は見込みに重ね目がある。しかし焼造数は少ないため、小形品を中に重ねたものであろう。Vにも一部小形品の目録のつくものがある。

①胎土、②釉の特徴は碗の場合と同様である。胎土と釉の2面から特徴をみると①、②、③、④、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩、⑪、⑫、⑬、⑭、⑮、⑯、⑰、⑱の群に大別され、それぞれ碗の群と対応する。

① 胎土

- 1・純白、乳白、乳黄灰色で緻密、精良。柔らかく暖かみのある色調。……I-1、鉢・壺・托I
- 2・僅かに青白色味を帯びる白色。類より硬質でやや粗くII-IV、VIII類より精良。……XI、X、B、杯B
×Xは上に近いが他の特色から分離可能。
×XIの一部は淡灰色味、黒色粒を含む……XI'・II・IVに近い。
- 3・淡灰色、淡黄灰色でやや甘い。微細な黒斑、あるいは白斑が入る。磁器質というより陶器質の胎土。……V、VI、VII、鉢・壺・水注II
- 4・VI類と近似するが温度は少ない。焼成やや甘く砂味を帯びる。……V、VII、鉢・壺・水注II
- 5・淡灰色、灰白色で硬質、胎土に気泡があり粗い。黒斑を含むものが多いもの。……II-IV、VIII、IX、鉢・壺・水注III。範囲が広い。IXは釉で分離可能。
×IXには白色で良いものがある。

② 釉

- 1・乳白、淡黄白色、平面的な厚みで表面なめらか……I-1
×釉のやや厚いものもある。貫入が殆どない。
- 2・僅かに空色味(水色味)を帯びる白色で平均的な厚み。表面は滑らか、発色は柔らかい。青白磁的。……XI、B
×淡緑白色味や黄白色味を帯びるものがある。
×表面やや凹凸のあるものあり。
×灰色味、灰緑色味の暗い発色を帯びるものがある。……XI'
- 3・灰色味、灰緑色味、黄灰色の暗い透明釉が多く、やや厚く施釉され、表面は気泡、凹凸がある。……II-IV、VIII、IX、鉢・壺・水注III
- 4・IXは滑った空色味で釉は平均化し厚め、II-IV、VIIIと分離可能。……IX
×IXの良質なものは淡緑色味の白色である。
×白色、淡黄白色の良質のもの少数あり。
- 5・乳白色、黄色味、灰黄色、灰緑色味で薄く施釉。釉は細かく貫入の多いものが多い。柔らかい発色……V、VI、VII、鉢・壺・水注II
×V、VIIは乳白色味多い。
- 6・白色、僅かな水色味、淡黄白色味の白色、釉は薄く均一、良質。青白磁的。……X

③ 施釉

(範圍)

- 1・全面施釉後裏面を削る。……I-1
- 2・口縁部の釉を削る。(口洗/打)……IX-1・2・3、X
×IX-1、Xは全面施釉される。ただしIX-1は底部外面の余釉を板状のもので伸ばした(または余分な釉を落とす)場合が多く、底部の釉は薄くなる。
×IX-2は体部外面下位以下施釉しない。
- 3・体部外面下位以下から底部外面または高台部外面のみを施釉しない。……II、III、V-1(一部)、VI、VII-1b・2、VIII(一部)、(VIII-1')、IX-2・3、XI、B
×I、XIは高台部まで施釉されるものが多い。
- 4・内面見込みの釉を確かに掻き取る。……III-1
- 5・全面施釉後、底部外面の釉を削り取る。……IV、V、VII、VIII
(化粧)
- 1・化粧土がある。……V、VI、VII、XF-3、鉢・壺・水注II
×XIには例外的に認められる。
×Vは化粧なしの例がある。

④ 器形

(口縁部)

- 1・小さな玉縁……XI-6
- 2・大きな玉縁……II-1b・2
- 3・扁平な玉縁……鉢II-2
- 4・直口縁……I、II-1a、III(一部)、V-1、VI、VII、VIII、IX-1a・b・c、IX-2、X、XI-3・4、B、杯B、C、鉢I
- 5・外反、愚曲……II-1a、III、IV-1、IX-1d・3、XI-5
- 6・横へ屈折……IV-2、V-2、XI-1・2、鉢III
(体部)
- 1・ストレート……II、III、IV、V-1(一部)、VI-b、IX-1・2、X、XI-7(一部)、鉢I、III
- 2・やや丸味……V-1(一部)、V-2、VII-2、IX-3、XI-1・2・3・4・5・6
- 3・傾斜気味……III
- 4・屈曲内折……I-1、VI-a、VIII-1・2、XI-7、VII-1、杯B・C
- 5・外反……杯E(一部)
(底部)
- 2・低い輪状高台。内側を斜めに削る。底部は薄く水平。……XI-1・2・3・6・7
- 3・碗II(高台外面を直に、内側を斜めに削る)と類似する高台……鉢II
- 5・削り出しが浅く底部厚い。……II-1
- 6・低く細い高台。……III
- 8・肉厚でやや高い逆台形……鉢III
- 9・低い逆台形、外開き。……IX-3
- 10・角高台……I-1、鉢・壺・托I
- 11・平底ななし上げ底……II-2、IV、V、VI、VIII、IX-1・2、X、XI-4
- 12・萼盤底……IV-1(一部)・XI-5
- 13・底部外面に削り込みを僅かに入れ、小さな高台状とする……VII
- 16・肉厚の逆台形……B、杯B・C
- 17・先細(逆三角)の低高台……E、杯E
(見込み)
- 1・太い凹縁状の段。
- 2・段①見込み側が一段凹む。……XI-37
- 3・段②体部が薄くなる。……II-1a、IV、V、VI-b、VII-2、IX-1・2、XI-3・4・5・7
- 4・見込み僅き取りの段……III-1、鉢III

⑤ 文様

(体部内面)

- 0・無文
- 1・縦白堆線……IV-1b・2b
- 1'・縦隆線……I-1b、鉢I(一部)
- 2・菊目……VII-1c、VIII-1c
- 3'・葉描または細かい御刀の花文……VI-2a・b、VII-1b・2b、VIII-1b、VIII-2c
- 4・陽刻型押……X-b、B(一部)、杯B(一部)
(底部内面)
- 0・無文
- 1'・見込みに花文の捺刷印文……VIII-2b
- 1'・見込みに魚文などの印文……IX-2b
(体部外面)
- 1・体部押正縦線文……V-2(一部)、XI-3・4・5・7
(口縁)
- 1・輪花……I-1b、IV-1b・2b、V-2(一部)、XI-3・4・5・7
- 2・花形……XIの一部

⑥ 焼成法、焼成の形状

- 1・高台径より大きな焼台……I
- 2・高台径より小さな円形焼台……VIII、XI(7)
- 3・高台重ね焼き。……III-1
- 4・口縁伏せ焼き、重ね。……IX、X

① 胎土

- 1 一般に均一で精良。淡黄灰色。……碗・小碗・坏・皿 I、III
- 2 やや粗い胎土……碗・大碗 I-2ウ、I-5
- 3 粘質味を帯び細かいが、黒色斑点（場合により茶、褐色）を含む粗質胎土。一般に胎土は灰・灰茶色。……碗・小碗・坏・皿 II（II-1は除外）
- 4 くすんだ灰色、やや茶色味の例が多い。……碗・小碗・坏・皿 III

② 釉

- 1 黄緑色、茶黄色で発色良い（上質例では淡青緑色）。……碗・小碗・坏・皿 I、III
- 2 Iに比べて釉調はやや強な例が多い。……碗・大碗 I-2ウ、I-5
- 3 釉調は雑でむらがある。……碗・小碗・坏・皿 II
- 4 濃緑色、茶色味の例も多い。……碗・小碗・坏・皿 III

③ 施 釉

(輪飾)

- 1 全面施釉後、器付の釉を削り取る。……碗・小碗・坏・皿 I（ただし I-1b、I-2ウ、I-2エの一部、I-5は除外）
- 2 全面施釉……碗・小碗・坏・皿 III
- 3 体部外面下位以下には施釉しない。……碗 I-1b、I-2ウ、I-2エの一部、碗・大碗 I-5、碗・小碗 II（未分類の一部は除外）
- 4 坏など平底は底部外周の釉を削る。……坏 I（化粧）
- 1 内面から体部外面上半に化粧を行う。……碗・小碗・坏・皿 II
× IIの一部の例は化粧がない。

④ 器 形

(口縁部)

- 1 直口縁で肩部まで一定の厚さ。……碗 I-1・2ウ・I-5の一部 × I-1bの一部は肩部が薄くなる例あり。
- 2 内湾口縁で肩部まで一定の厚さ。……碗 I-3・4
上記以外は肩部を薄くする例が多い。
- 3 内湾口縁……碗・小碗 II-2a、碗 I-3・4
- 4 玉縁状……碗 II-2f

(体部)

- 1 直線的……碗 I-1・大碗 I-2ウ・5
- 2 中位または下位は内側へ屈曲。……大碗 I-2A、小碗 I-2A、皿 I-1、坏 I-1
- 3 丸味（内湾度が強いもの）。……碗 I-3、II-2d、碗・小碗 III-1、皿 I-2、II、III-1

(底部)

- 1 蛇ノ目高台……碗 I-1・3、II-1、II-2a
- 2 輪状高台……碗 I-2・4、II-2a（一部）、IIの一部、III-2、小碗 I・III-2、大碗 I-2、坏 I-2B、皿 I-1・2
- 3 高い輪状高台。……碗 III-1、I-2a、小碗 III-1
- 4 撥状高台……皿 III-1、浅形碗 III-3、合子 III
- 5 円盤底……碗 II-2、皿 II
- 6 平底でやや上げ底……碗・大碗 I-5、坏 I、II
- 7 蕃筒底……坏 III、大坏 III、合子 III（一部）

⑤ 文 様

(体部内面)

0 無文

- 1 皿よりも縁の太い彫形文で単純。……I類
- 2 毛彫り文および毛彫り文+片彫文の組み合わせ。緻密な例が多い。……II類
× 龍鬚子文など。……III類

(体部外面)

0 無文

- 1 縦線文（新花）……碗 I-2b、III-1b、II、大碗 I-2b、小碗 I-2b、坏 I-2など
- 2 運弁文など片彫文または片彫文+毛彫り文の組み合わせ。……III類

(口縁)

- 1 輪花……碗・小碗 I-2b、II-2b・2cなどIIの一部、碗・小碗 III-1b・2b、大碗 I-2b、小碗 I-2b、皿 I-1b、皿 IIの一部 鉢 IIの一部
× I類では体部外面の縦線文（新花）と輪花は両方施文されるのが通例であるが、一方を欠落する例もある。

2 桜花形……坏 I-1

3 二重輪花……坏 I-2

⑥ 焼造法、焼台の形状

- 1 高台器付および底部外面の白色耐火土の目跡がある。……I類。碗 I-1a、I-1・3、大碗 I-2A、小碗 I-2A、坏 I-1・3、皿 I-1
- 2 重ね焼き。内面見込みと高台器付に目跡。……I類。碗 I-1b、I-2、I-5、大碗 I-2、小碗 I-2・5、坏 I-2、皿 I-2
× ただし重ね焼きの際、最上位のものは内面に目跡はない。
- 3 重ね焼き。内面見込みと高台器付に目跡。I類に比べて目土は雑。……II類
- 4 底部外面の高台内側に4~5反の細長い白色耐火土の目跡がある。内面にはない。高台径より小さい焼き台の使用。……III類

一般にすべての器種にわたり、I-IV類は胎土、釉色で群の大別は可能である。ただしIV類はI-III類よりも胎土は粗悪化傾向にあるが上質の胎土の例も若干含まれ、必ずしも粗悪とは言い切れない。この点は胎土の場合にも当てはまる。IV類の口縁を行っていないので、上記の点には両性表に反映できない。0類についても同様である。このように両性表は0類、IV類の胎土は不十分で、I-III類の範囲内では有用度が高い。0類、IV類については下記に内容を補足した。IV類の多様性は一つの時代的な特徴を表すわけではなく、中分類における器形分類と胎土、釉色に一定の相関性は導き出される見通しがあり、今後の作業としておきたい。

① 胎土

胎土と釉の2面から特徴をみると〔0, I, II〕, 〔III〕, 〔IV〕の群に大別される。

- 1・灰色、暗灰色を基調とし、混入物はなく緻密。……碗・小碗・浅碗・東口碗I, II (旧I-5)、皿I
- 2・灰白色もしくは白白色で精良。……碗・小碗・東口碗III, III', 坏III
×例外的に焼成不良の赤褐色胎土あり。
- 3・淡灰色で白色繊維を多く含む。やや粗い。……碗・小碗・東口碗・坏IV
×ただしIVは上質の胎土の例もあり。

② 釉

- 1・青味を帯びた緑色。……碗・小碗・浅碗I, II, 碗0, 皿I
×黄茶、緑茶、蒸緑、水色味など発色は多様で濃淡がある。0類は洗ひ色調をなす例があり、I類より上発色が多い。半透明で釉は厚い。IIはより釉が厚く青味の強いものがある。
- 2・緑色もしくは青緑色。釉は厚めで均一。……碗・小碗・東口碗・坏III
×龍泉系の中で発色が安定し、最も美しい。翡翠色半透明。
×口縁部の釉を削る(口売け)例が小碗IIIに少数あり。
- 3・黄白色の強い緑黄色が主体でI類より劣る。粘性の強い釉で不透明。……碗・小碗・東口碗・坏IV
×淡緑、黄褐色、褐色、灰色味、淡緑、薄化したものなど多様。III系の上色釉もある。

③ 輪軸

- 1・高台畳付け、底部外面輪軸しない。……碗・小碗・浅碗・東口碗I, II, IVの多数、碗0
×IVの一部は高台以内に軸が通入する例がある。
- 2・全面輪軸後、高台端部周辺の軸を削る。この部分は赤色に変色する場合がある。……碗・小碗・東口碗・坏III, III', IVの一部
- 3・全面輪軸後、底部内面ないし外面の軸を環状(または円形)に残す。……碗・小碗・東口碗IVの一部
×IV類は器形の違いに応じて施軸方法に多様性がある。
- 4・全面輪軸後、底部外面の軸を削る。……皿I
- 5・体部外面下位以下施軸しない。……皿I-3b

④ 器形

- 1・直口縁……碗・小碗I, II, III, 浅形碗I, II, 坏III-5, IV, 皿I
×やや外反する場合も多い。
- 2・外反……外反味のやや強い例として坏IV, 碗0の一部、碗I-6a, III-IVの一部にある。
- 3・口縁下屈曲、内湾……東口碗I, II, IV
×東口碗IIIは未確認であるが、当然予想される。
- 4・短く外側へ屈折。……坏III-1
- 5・やや長く外へ屈折。……坏III-2
- 6・長く外へ屈折し、先端を若干積み上げる。……坏III-3・4
×坏III-2・3・4の蓋は小さい。
- 7・直口縁。先端は丸くする。……皿I-1~3 (律部)
- 1・体部下位の腰部が強く張り、内湾気味に開く。……碗・小碗・浅形碗I, II, IVの一部
×IIには腰の張りの少ない例あり。
- 2・体部の腰は張らず高台際から延びる。……碗・小碗III

- 3・体部下位で屈折し直に開く。……坏III-1
- 4・体部は高台際から内湾しながら延びる。……坏III-2~5
- 5・体部中位で内側へ屈折し直に開く。屈折以下の斜行面は内湾系系皿に比べて広い。……皿I-1~3 (底部)
- 1・やや細い角高台。高台内部の削りは平坦に丁寧な削り……碗0
- 2・角高台、高台内部の削りは外部より浅く、底部が厚い。平坦に丁寧な削り……碗・小碗・浅形碗(高台付皿)・東口碗I, II
×IVの外側高台内の削りは深く、削りは粗く、平坦にならない例が多い。
- 3・細く尖り気味の高台、内部は深く削る。径が小さい。……碗・小碗・東口碗・坏III (坏は底径が大きい)
- 4・角高台だが外面端部に広く斜め面削りを行う。……碗・小碗・東口碗・坏IV
×IVの高台は多様であり、A-オの形態は本文参照。
- 5・上げ底気味の高台。……皿I-1~3 (見込み)

1・内面見込み外周には股を有し、この股は高台径よりも広い。……碗I, II, 小碗I (I-I' a, I-Iは除外), II, 浅形碗II, III
×一部の器種では股の径は高台径よりも小さい場合がある(碗I-3など)。
×碗I, IIとIVの差。碗IVには股のない例が多い。

⑤ 文様

(体部内面)

0・無文

- 1・片形・花文、蓮花文、荷花文(菊)、牡丹文、草花文、菊文、照葉文、飛雲文(略化した花文?)、芽状文(略化した花文?)……碗0, I-2~6, III-IB・2B-C, 浅碗I-2・3・6, 皿I
- 2・片形・動物文(鹿、魚など)、具状文……碗I-3b, 皿I-2d
- 3・刺刀(片形)・区画線(花卉を割り付け?)……碗I-4a・b, 小碗I-2, 浅形碗I-4a
- 4・罫目・水波文、草花文……碗I-3・4d, III-IB・2B-C, IV, 浅碗I-3, 皿I-1c・2b・c・3b
- 5・罫目・区画線(花卉を割り付け?)……碗I-4d
- 6・縦白増線(花卉を割り付け?)……碗I-4c, 小碗I-3, 浅形碗I-4c
- 7・丸刀形・草花文など……IV
- 8・菊花状の凹型弁……坏III-3b
- 9・器押文……IV
- 0・無文
- 10・片形文……碗I-2a・3b, 浅碗I-4a
- 11・片形・罫目文……碗I-3
- 12・印文・文字線刻削(凹凸)……IV, 碗I-1c・II-d, 坏III-1b
- 13・印文・草花文など(凹)……IV, 碗II-c, 坏III-1b
- 14・印文・双魚・動物など(凹)……坏III-4c
- 15・貼花・花文……小碗III-1Ab・2C
- 16・貼花・双魚……坏III-1c・3c・4b (口縁部)
- 17・貼花……碗I-1b・4b・c, III-1Ab, IV, 小碗I-1b・3, III-1Ab, 2C
- 18・花形(大きく花卉切り取り)……小碗I-2 (体部外面)
- 0・無文
- 19・片形・蓮弁……碗I-6a・II-a・d 浅碗I-6a, II-a
- 20・片形・蓮葉弁……碗I-6b・c, 碗・小碗II-b・c, III-2C・2B-C, 坏III-4・5b, 東口碗I-6b, I-6b
- 21・罫目……碗I-6a・b, 東口碗I-6b, 碗0 (一部)
- 22・略化雷指蓮弁……碗IV
- 23・横罫目文書(上位)……碗IV
- 24・縦線文……碗IV (区画), 0(密な縦線)

⑥ 埋蓋法、焼合の形状

- 1・高台径より大きな蓋台
- 2・高台径より小さな円形焼合
- 3・重ねぬきの日跡、3・4・5足。……碗I・II-b (一部)

表9 同安瀛系青磁碗・皿 属性対照表 (20002現在)

器種	分類	胎土・釉		施釉		器形												文様		胎土・釉							
		①	②	③	④	口縁部			器底			見込み			器底内面			器底外面									
		1	1	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	1	2	3	0	1	2	3	0	1	2	3		
碗	I-1a	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	I-1b	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	I-1c	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	II	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	III-1a	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	III-1b	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	III-1c	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	III-2	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	IV-1a	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	IV-1b	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
小碗	I	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	I-1a	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	I-1b	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	I-2a	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	I-2b	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
皿	I	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	I-1a	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	I-1b	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	I-2a	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	I-2b	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	

同安瀛系青磁碗・皿の特徴と該当器種

体部破片では龍泉窯系青磁と区別が困難なことがあり、特に燒成不良の資料は注意を要する。胎土、輪調は龍泉窯系青磁と分離可能な点を以下に記述したが、文様などの情報があればさらに区別は容易となる。以下は龍泉窯系青磁類との比較を中心とした。

皿については旧版の皿は皿と分離して高台付皿に分けた方が良い(龍泉窯系の場合と同様に)。今回は旧版のままとした。

① 胎土

1. 典型的な胎土は明るい灰色または黄灰色を基調とし、細かく硬質、粘着味が強い(龍泉窯系は灰色でやや粉味)。……碗・小碗・皿

② 釉

1. 典型的な例は透明感が強い(龍泉窯系は半透明)。また輪調は薄い方である。釉色は黄白色に片寄る傾向がある(龍泉窯系は緑色・緑青色味に片寄る傾向)。……碗・小碗・皿

③ 施釉

(範囲)

1. 体部外周下位以下から底部外面は施釉しない。胎部範囲は龍泉窯系青磁よりも多い。……碗 I~IV、小碗、皿 III
2. 内面見込みの釉を環状に張り取る。……碗 III-2
3. 体部下半から底部外面は施釉しない(龍泉窯系は下記4の例が中心)。……皿 I-1
4. 全面施釉後、底部外面の釉を削り取る。……皿 I-2

④ 器形

(口縁部)

1. 直口(体部上位内湾)……碗 I
2. 外反……碗 II、III、小碗 I
3. 外側へ屈折、薄手……碗 IV
4. 厚手……碗 I-c、II、III
5. 先端は尖り気味(龍泉窯系の先端は丸味)。……皿 I-1、2、III

(体部)

1. 底部際から内湾気味に開き、腰は張らない(龍泉窯系は腰が張る。ただし0腰は張らない)。……碗 I~IV
2. 中位で内側へ屈曲し、上部は僅かに外反しながら開く(龍泉窯系は直に開く)。また屈曲部以下の斜行部は龍泉

窯系皿に比べて狭い。……皿 I-1、2

×皿 IIIの体部は・皿と異なり斜めに大きく開き、外面の屈曲も少ない。

(底部)

1. 台形の厚い高台。底部外面中心部は凸状(へそ状)に削り残す(龍泉窯系は平坦に削る)。……碗 I~IV、小碗 I
2. 底部器内が厚い。よよりも高台径が広い。……碗 II、III、IV
- ×削り方は龍泉窯系よりも一般に粗い。
3. 平底(上げ底気味)……皿 I-1、2 (見込み)
1. 見込みに段が行く。見込み径は高台径よりも狭い(龍泉窯系は広い)。……碗 I~III
- ×II、IIIは多少広い例もあり。
2. 浅い段……皿 I-1、2

⑤ 文様

(底部内面)

0. 無文……碗、皿 I-1a、2a、皿 III-a、小碗 I
1. 内面に総線と帯点描によるジグザグの文様……皿 I-1b、2b、皿 III-b (体部内面)
0. 無文……碗 II、III-1a、2、IV、皿 I-1a、2a、皿 III-a
1. 体部上位に横流線……碗 I、II、III-1a、III-2
2. 帯と点による花文……碗 I、III-1c
3. 帯による花文……碗 III-1b
- ×同安瀛系の分類数は龍泉窯系に比べて少ないので、小分類の内面文様の類型は上記以外に追加される可能性がある。
- (体部外面)
0. 無文……碗 I-1a、II、IV-1a、皿 I-1、2、III-a、b
1. 細い縦帯目……碗 I-1b
2. やや粗い縦帯目……I-c、皿 III-c
3. 幅広い粗い縦帯目(旧版は帯による片形りとされている)……碗 I-1c、III、IV-1b
- ×縦帯目でなく片形り縦線は龍泉・同安瀛系0類にあり。

⑥ 焼造法、焼台の形状

1. 高台径より大きな焼台
2. 径は高台径より小さな円形焼台。
3. 重ね焼き……碗 III-2、(IV)

表10 初期高麗青磁 属性対照表 (2000.2現在)

分類	部分	胎土				胎色				口縁部				胎面				胎底				胎縁部				胎底			
		1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
Ⅰ	Ⅰ-1	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	Ⅰ-2A	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	Ⅰ-2B	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	Ⅰ-2C	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	Ⅰ-3	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	Ⅰ-4	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	Ⅰ-5	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	Ⅰ-6	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	Ⅰ-7	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	Ⅰ-8	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

初期高麗青磁 碗・皿の特徴と該当品種

生産地の資料から検討する分類ではなく、大宰府出土品に限定するため、分類に次序部分が予想される。従って将来、分類追加が可能な形で分類を試みる。初期高麗青磁は大きくⅠ、Ⅱ、Ⅲ類に大別される。Ⅰ類(蛇ノ目高台)、Ⅱ類(輪状高台)、Ⅲ類(体部に丸味を持ち高い高台、Ⅰ類は内面に重ね焼きの目跡がなく、Ⅱ類はあり)、Ⅳ類(割製で重ね焼きの目跡がある。Ⅰ類は小形、Ⅱ類は大形)に細分され、特にⅠ類は複製品に属する。

Ⅱ(高台付)は「桑坊Ⅱ」では坏としていた。1993年にⅡと改めた。理由として越州窯系青磁では同種のものについてⅡに分類しており、これと御徳名の整合をさせるためである。なお、Ⅱの出土例は少なく、細分化するには到っていない。表中()内の記号は仮番号である。

① 胎土

- 1 淡灰色、灰色を呈する。緻密なもの、やや砂味のもの、やや粗いものがある。白色粒を多く含むものもあるが、粒子は0.5mm以下で、均一に入っている。……Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類・Ⅳ類
- 2 Ⅰ、Ⅱ類に比べ胎土、釉、手法が粗雑。灰色を基調とするが、淡灰、暗灰、灰白、淡茶灰、茶灰、灰黄、淡灰黄、橙灰、淡橙灰色など呈する。混入物はやや少なく生地の粗いものと、0.5~2mmの白色粒子を無造作に含む粗いものがあり、後者の方が多い。……Ⅰ類・小Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類

② 釉

- 1 半透明。釉色は黄緑色、青味を帯びた暗緑色の発色。……Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類・Ⅳ類
- 2 灰緑色を基調とするものが多いが、黄緑、暗黄土、暗緑、淡緑、暗灰緑、灰褐色など様々な発色がみられる。釉は大半が不透明、不鮮明で、光沢のないものや少ないものが多い。……Ⅰ類・小Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類の一部

③ 施釉

- 1 全面施釉でやや厚めの釉を塗す。高台付は一部露胎の例があり、一部釉をよき取ったが、施釉しなかったものと思われる。……Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類・Ⅳ類・Ⅴ類
×貫入がある。
- 2 全面施釉後に高台付の釉を削り取る。数方向に鋭角な削りを行うため高台付に凹凸ができる。……Ⅰ類・小Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類
×Ⅲ類には体部下位下に施釉しない例がある。

④ 器形

- 1 直口(体部下位内湾)。……Ⅰ類・Ⅲ類・Ⅳ類・Ⅴ類(有文)
- 2 口縁部は長めで、緩やかに外反。……Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類(無文)

3 短く外反……Ⅰ類Ⅱ、Ⅲ-ⅠA・2A、ⅢⅢ

4 下方へ屈折……ⅡⅡⅢ・ⅢⅢⅢ(無文型か?)

ⅡはⅠ類Ⅱ、Ⅲ-3とセットとなるものである。Ⅱ類のⅡ類は比較的高く、外反しており、Ⅱ類の高台と一致する特徴がある。なおⅡⅢⅢ・ⅢⅢⅢともにⅡの無文タイプに属する可能性もあり、今後、ⅡⅢⅢ-3の全形が分かる種類の出土を待って再検討したい。

(体部)

1 体部は外上方へ直線的に開くか、僅かに内湾する。……Ⅰ類-Ⅰ

2 外上方に開きながら僅かに内湾する。……Ⅰ類-2

3 体部は内湾して丸味。……ⅡⅡⅢ・ⅢⅢⅢ・ⅣⅣ

4 体部は直線的で下位は鈍く屈曲……Ⅰ類Ⅲ-ⅠA・2A(底面)

1 蛇ノ目高台。高台内側のくり込みは浅い。……Ⅰ類-Ⅰ

2 輪状高台。……Ⅰ類-2、ⅢⅢⅢ、ⅣⅣ、ⅤⅤ

3 高く外反する輪状高台(蓋の場合は環状構み)……ⅡⅡⅢ、ⅢⅢⅢ、ⅣⅣ

4 高台部見込みは中央にへそ状の残り残した突起がある。……Ⅰ類・小Ⅰ類・ⅡⅡⅢ(見込み)

1 見込みに段が付く。見込み径は高台径よりも狭い……ⅡⅡⅢ、ⅣⅣ

2 見込み径は高台径よりも広い、沈線状の段……ⅡⅡⅢ-2Bb(一部)、ⅢⅢⅢ

×ⅢⅢⅢ-2は浅い段。

⑤ 文様

(体部内面)

0 無文……Ⅰ類Ⅱ、ⅢⅢⅢ、ⅣⅣ、ⅤⅤ(一部)小Ⅰ類、ⅡⅡⅢ、ⅢⅢⅢ

1 体部上位に横波線……ⅡⅡⅢ-2Bb

2 輪縁などの毛彫り文……ⅢⅢⅢ(一部)

3 体部に内面印花文の例がある。

4 体部に内面印花文の例がある。

5 縦白地線……ⅢⅢⅢ-2(有文)

(体部外面)

0 無文……Ⅰ類・小Ⅰ類・ⅡⅡⅢ・ⅢⅢⅢ

1 半彫刻状の葉弁文を有する……ⅡⅡⅢ-1・2b、ⅢⅢⅢ

2 横波線の葉弁文を2段付する。……ⅢⅢⅢ(一部)

Ⅲ(高台付)には、内外面無文(Ⅰ-2)、体部内面に縦の白地線、口縁部に輪花文(Ⅰの一部)、内面に印花文(葉弁文の重または環)などの例がある。Ⅱ類なども含めて、文様と器種分類の関係は整理途中であり、今後体系化したい。

(口縁)

1 輪花……ⅢⅢⅢ-2(有文)

⑥ 焼成法、焼台の形状

1 高台付のみ白色耐火土の目跡がある。……Ⅰ類Ⅰ・2、ⅡⅡⅢ、ⅣⅣ

2 重ね焼き。内面見込みと高台付に目跡4~5足。……Ⅰ類Ⅱ-2、ⅢⅢⅢ、ⅣⅣの一部、ⅤⅤⅤの一部

表11 國版・写真國版引用遺物出土遺構一覽表

分類	国版	P.番号	分類	原表		写真国版					
				P.番号	分類	P.番号	分類				
白磁	真	1	1-1	大70 SK1065	24	1	1-1 口縁部	表34 S-30	本報告		
		1	1-2a	大46 SE1340	20	1	1-2a	大46 SE1340	20		
		1	1-4	大38 SD865	19	1	1-4	大38 SD865	4		
		1	1-5	表7 ST003	4	1	1-5	表7 ST003	61		
		1	1L-1	表12 灰褐色砂	61	1	1L-1	表12 灰褐色砂	61		
		1	1L-1	大79-3 SK976	19	1	1L-1	表14 土灰21	11		
		1	1L-3b	表19 SK005	2	2	1L-3b	表19 SK005	2		
		1	1L-4a	表19 SK005	2	2	1L-4a	表19 SK005	2		
		1	1L-4b	表7 鉄線跡(≠0.8mm) 表7-2号層	36						
		1	1L-5	表91 SK005	9	2	1L-5	表91 SK005	9		
		1	1III	大66 SD1330	20	2	1III	大66 SD1330	20		
		1	1V-1a	表71 ST990	本報告	3	1V-1a	表71 ST990	本報告		
		1	1V-1b	表34 S-240	本報告	3	1V-1b	表34 S-240	本報告		
		1	1V-2a	表81 褐色土	6	3	1V-2a	表81 褐色土	6		
		1	1V-2ac	表19 灰色土	2	3	1V-2ac	表19 灰色土	2		
		1	1V-1a	大39 灰色砂質土	19	3	1V-1a	表34 S-143	本報告		
		1	1V-2a	大9 SE225	14	3	1V-2a	表81 褐色土	6		
		1	1V-2b	大70 灰褐色土下層	24	3	1V-2b	表149 藍土層	11 (表附録)		
		1	1V-3a	表14 灰褐色土	1	4	1V-3a	表14 灰褐色土	1		
		1	1V-3b	大39 褐色砂質土	19	4	1V-3b	大39 褐色砂質土	19		
		1	1V-2a	表50 SE405	11	4	1V-2a	表50 SE405	11		
		1	1V-ab	表64 S-5	本報告	4	1V-ab	表64 S-5	本報告		
		1	1V-4	表94 4号	33						
		1	1V-4d	大34 SK971	18	4	1V-4d	大34 SK971	18		
		2	VI-1a	表99 9号穴 1&2号遺構	44						
		2	VI-1b	表16 SK024灰結	8	5	VI-1b	表16 SK024灰結	8		
		2	VI-2b	表16 SK023	8	5	VI-2b	表16 SK023	8		
		2	VII-2	表94遺構1号土層	46	5	VII-2	表94遺構1号土層	46		
		2	VIII-0	表24 灰褐色土	2	5	VIII-0 内部	表24 灰褐色土	2		
		2	VIII-0	表24 灰褐色土	2	5	VIII-0 外部	表22 SK155	2		
		2	VIII-1	大34 SK971	18	5	VIII-1	表22 灰色土	2		
		2	VIII-2	大36 SK971	18	5	VIII-2	表14 灰褐色土	1		
		2	VIII-3	大34 SK854	19						
		2	VIII-4	表93 S-15	本報告	6	VIII-4	表93 S-15	本報告		
		2	IX-1	表19 SK004	2	6	IX-1	表19 SK004	2		
		2	IX-2a	表51 褐色砂	本報告	6	IX-2a	表51 褐色砂	本報告		
		2	X-1	表94遺構1号土層	52						
		2	X-2	表94遺構2号土層	53						
		2	XI-1	表94遺構3号土層	42	6	XI-1	表94遺構3号土層	42		
		2	XI-2	表94遺構4号土層	42	6	XI-2	表94遺構4号土層	42		
2	XI-3	表60 SE200	本報告	7	XI-3	表60 SE200	本報告				
2	XI-4	表93 褐色土	本報告	7	XI-4	表81 SK140	6				
2	XI-5	表74-2 S-13挿内	本報告	7	XI-5	表74-2 S-13挿内	本報告				
2	XI-1a	表71 S-300土層	本報告	7	XI-1a	表71 S-300土層	本報告				
2	XI-1b	表27-1 褐色色粘土	2	7	XI-1b 口縁部	表27-1 褐色色粘土	2				
2	XI-1b	表71 灰褐色土	2	7	XI-1b 内部	表71 灰褐色土	本報告				
2	XII-1b	大34 SD205	24	8	XII-1b	表34 S-76	本報告				
2	XIII-2b	表71S-1100 ラグナム灰褐色砂	本報告	8	XIII-2b	表71 S-1100	本報告				
小瓦	真	3	1-3	大45 赤土・赤磁土	20	8	1-3	大45 赤土・赤磁土	20		
		3	1c	表93 SK015	9	8c	表93 SK015	9			
		3	2bc	表14 灰褐色土	1	8	2bc	表14 灰褐色土	1		
		3	2b	大38 SD060	19						
		3	K-1	表71 灰褐色土	本報告	8	K-1	表71 灰褐色土	本報告		
		3	XIV-a	大119 SD3440土層	26	8	XIV-a	表93 褐色土	9		
		瓦	真	4	1-1a	大70 褐色土	24	9	1-1a	大70 褐色土	24
				4	1-1b	表94遺構3号土層 SK2817	47				
				4	1I-1a	表63 赤土	6	9	1I-1a	表27-2 S-143	2
				4	1I-1b	表27-1 褐色色粘土	2	9	1I-1b	表27-1 褐色色粘土	2
				4	1I-2	表34	30				
				4	1II-1	大29-3 SK960	19	9	1II-1	表50 SE405	9
4	1IV-2			表93 SE160土層	9						
4	1V-1b			大34 褐色土	19						
4	1V-2a			表71 灰褐色土	本報告	9	1V-2a	表71 灰褐色土	本報告		
4	1V-2b			表71 灰褐色土	本報告	9	1V-2b	表71 灰褐色土	本報告		
4	1V-1a			表176 S-5白色砂	本報告	10	1V-1a	表176 S-5白色砂	本報告		
4	1V-2a			表93 SE200褐色土	9	10	1V-2a	表93 SE200褐色土	9		
4	1V-1a	表14 褐色土	1	10	1V-1a	表14 褐色土	1				
4	1V-2a	大70 赤褐色土下層	24	10	1V-1b	表14 褐色土	1				
4	1V-2b	表14 褐色土	1	10	1V-2b	表14 褐色土	1				
4	1V-1a	大34 SD860	19								
4	1V-1b	表176 S-5白色砂	本報告	10	1V-1b	表176 S-5白色砂	本報告				
4	1V-1c	表27-1 褐色色粘土	2								
4	1V-2a	表50 SE250褐色土	11	11	1V-2a	表50 SE250	11				
4	1V-2b	表64 SE325土層	9	11	1V-2b	表64 SE325土層	9				
4	1VIII-1b	表71 灰褐色土	本報告	11(a)-2	1VIII-1b	表71 灰褐色土	本報告				
4	1VIII-1c	表71 灰褐色土	本報告	11(a)-2	1VIII-1c	表71 (15-11)	本報告				
4	1VIII-1e	表14 灰褐色土	1	11	1VIII-1e	表14 灰褐色土	1				

白箱	原裝	Fig. 番号	分類	原裝		写真原裝					
				出寸寸法	支数	Fig.番号	分類	出寸寸法	支数		
白箱	原裝	4	VIII-1	糸47 茶色土	糸箱巻	11	VIII-1	糸47 茶色土	糸箱巻		
		4	VIII-2b	糸3 SY160	糸箱巻	11	VIII-2b	糸3 SY160	糸箱巻		
		4	IX-1a	糸71 紺色土	糸箱巻	12	VIII-1	糸51 淡茶色粘	糸箱巻		
		4	IX-1b	糸71 紺色土	糸箱巻	12	IX-1b	糸71 紺色土	糸箱巻		
		4	IX-1c	糸51 S-100	糸箱巻	12	IX-1c	糸51 S-100	糸箱巻		
		4	IX-1d	糸32 S2016	19	12	IX-1d	糸32 S2016	19		
		4	IX-2	糸尾4 S2040	10	12	IX-2	糸尾4 S2040	10		
		4	IX-3	糸70 紺土	24	12	IX-3	糸70 紺土	24		
		5	X-6	糸51 S-100	糸箱巻	12	X-6	糸51 S-100	糸箱巻		
		5	XI-1	海龍路3次 SK01	42	12	XI-1	海龍路3次 SK01	42		
		5	XI-2	海龍路3次 SK01	42	13	XI-2	海龍路3次 SK01	42		
		5	XI-3	海龍路3次 SK01	42						
		5	XI-3	海龍路3次 SK01	42						
		5	XI-3-Y	糸18 茶褐色土	7	13	XI-3-Y	糸47 茶褐色土	7		
		5	XI-4	糸93 SY210	9	13	XI-4	糸93 SY210	9		
	5	XI-5	糸34 SK120	糸箱巻	13	XI-5	糸34 SK120	糸箱巻			
	5	XI-6	海龍路3次 SK01	42	13	XI-6	海龍路3次 SK01	42			
	5	XI-7	海龍路3次 SK01	42	13	XI-7	海龍路3次 SK01	42			
	原裝	原裝	6	II-1	糸27-2 茶褐色土(粘)	2					
			6	II-1	糸27-2 SK135	2					
			6	II-2	糸27-2 SK135	2					
			6	II	糸27-1 紺色茶褐色土	2					
	写真原裝	写真原裝	7	II	糸50 SK490半箱	11					
			7	III-1	紙膠紙出入132 3次 1号土紙	36					
			7	III-2	糸19 SK004	2					
7			III-2(小)	糸19 SK004	2						
7			III-3	糸47 S-110	糸箱巻						
原裝	原裝	8	I-1a	糸81 SK025	6	14	I-1a	糸81 SK025	6		
		8	I-1b(1)	糸90 SK244	9	14	I-1b(1)	糸90 SK244	9		
		8	I-1b(2)	糸34 S-43	糸箱巻	14	I-1b(2)	糸34 S-43	糸箱巻		
		8	I-2a-7	糸34 灰褐色土	17	14	I-2a	糸34 S-215	糸箱巻		
		8	I-2b-7	糸74 SD205A	24	14	I-2b	糸34 S-215	糸箱巻		
		8	I-2b-1	糸34 SD205A	24						
		8	I-2b-2	糸15 SK075	1						
		8	I-2b-3	海龍路3次 SK01	42						
		8	I-3	糸88 S-590茶褐色土	糸箱巻	14	I-3	糸88 S-590茶褐色土	糸箱巻		
		8	I-4	糸70 茶褐色土下層	24						
		8	I-5	糸26 茶褐色土	2	15	I-5	糸18 茶褐色土下層	1 (糸尾粘)		
		8	II-1b	糸47 SK076	7	15	II-1b	糸87 SK076	7		
		8	II-2a	糸47 SK076	7	15	II-2a	糸7-2 SY265	5		
		8	II-2b	糸74 SD205A	24	15	II-2b	糸24 灰褐色土	2		
		8	II-2c	糸38 SD465	19	15	II-2c	糸34 S-260	糸箱巻		
		8	II-2d	糸31 紺褐色土	16	15	II-2d	糸34 S-260	糸箱巻		
		8	II-2e	糸27-2 SK174	2	15	II-2e	糸27-2 SK174	2		
		8	II-2f	糸34 灰褐色土	25	16	II-2f	糸93 茶褐色土	9		
		8	II-1a	糸69 S-435	糸箱巻	16	II-1a	糸69 S-435	糸箱巻		
		8	II-1b	海龍路3次 SK01	42	16	II-1b	海龍路3次 SK01	42		
		8	II-1c	紙膠紙新留紙 (東京粘)	62						
		8	II-1d	海龍路3次 SK01	42	16	II-1d	海龍路3次 SK01	42		
		8	I-2b-7-A	糸19 S-7	糸箱巻						
		8	II-1b	海龍路3次 SK01	42	16	II-1b	海龍路3次 SK01	42		
		8	II-1b(新留紙)	紙膠紙新留紙	31						
		大紙	大紙	9	I-2a-9	紙膠紙新留紙 1号	43				
				9	I-2b-7-A	紙膠紙新留紙 1号	43				
				9	I-2-9	海龍路4次 SK31 32	59				
				9	I-3	海龍路3次 SK02	42				
				9	II (粘)	糸34 SD205A	24				
				10	I-1	7号灰褐色土 SE201 (三田川町)	50	17	I-1	糸36 SD205A下層	24
				10	I-2A	海龍路3次 SK36	41	17	I-2A	糸34 S-178	糸箱巻
10	I-2B	海龍路3次 SK36	41								
10	I-3	糸118 茶褐色土	7	17	I-3	糸118 茶褐色土	7				
10	II-6	海龍路3次 SK01	42	17	II-6	海龍路3次 SK01	42				
小紙	小紙	10	III-a	糸60 SE360	糸箱巻						
		10	III-b	紙膠紙新留紙 (東京粘)	62						
大紙	大紙	11	I-1b	糸38 灰褐色土	24	17	I-1b	糸36 灰褐色土	24		
		11	I-2	糸34 SD205A	24	17	I-2	海龍路7 (灰褐色土新留紙)	54、21		
		11	I-2	糸38 SD465	19						
		11a,b	II	海龍路3次 SK36	42	18	II	糸尾3 SK05	19		
		11c	II	海龍路3次 SK36	42	18	II	海龍路3次 SK36	糸箱巻?		
		11	III-1a	海龍路3次 SK06	56						
		11	III-3a	海龍路3次 SK06	42	18	III-3a	海龍路3次 SK06	42		
原裝	原裝	11	III-3b	海龍路3次 SK05	42						
		11	III-3b (大)	糸44 SK035	6	18	III-3b (大)	糸44 SK035	6		
		12a,b,c,d	0	糸19 紺褐色土	61						
原裝	原裝	12a,b,c,d	0	糸24 SE113	2	18a,b,c,d	0	糸24 SE113	2		
		12a,b,c,d	0	馬尾1 S-1	糸箱巻	18a,b,c,d	0	馬尾1 S-1	糸箱巻		
		12a,b,c,d	0	馬尾1 S-1	糸箱巻	18a,b,c,d	0	馬尾1 S-1	糸箱巻		
		12a,b,c,d	0	馬尾1 S-1	糸箱巻	18a,b,c,d	0	馬尾1 S-1	糸箱巻		
		12a,b,c,d	0	馬尾1 S-1	糸箱巻	18a,b,c,d	0	馬尾1 S-1	糸箱巻		
		12a,b,c,d	0	馬尾1 S-1	糸箱巻	18a,b,c,d	0	馬尾1 S-1	糸箱巻		
原裝	原裝	12a,b,c,d	0	馬尾1 S-1	糸箱巻	18a,b,c,d	0	馬尾1 S-1	糸箱巻		
		12a,b,c,d	0	馬尾1 S-1	糸箱巻	18a,b,c,d	0	馬尾1 S-1	糸箱巻		
		12a,b,c,d	0	馬尾1 S-1	糸箱巻	18a,b,c,d	0	馬尾1 S-1	糸箱巻		
		12a,b,c,d	0	馬尾1 S-1	糸箱巻	18a,b,c,d	0	馬尾1 S-1	糸箱巻		
原裝	原裝	13	I-1a	糸19 SK004	2	19	I-1a	糸19 SK004	2		
		13	I-1c	糸19 SK004	2	19	I-1c	糸19 SK004	2		
		13	I-2a	糸3 SY160	糸箱巻	19	I-2a	糸3 SY160	糸箱巻		
		13	I-2a	糸19 SD01下層	2						

種名	種別	図版	雄		雌							
			Fig.番号	分類	Fig.番号	分類						
龍泉洞系 有線	純	岩士遺構	13	L3b	♂64 ST145	9	19	L2b	♂64 S-145	9		
			13	L3a	♂71 ST400	19	19	L3a	♂71 ST400	19		
			13	L4b	♂63 ST060	9	19	L4b	♂63 ST060	9		
			13	L4a	天39-3主瓦15	19	20	L4a	天39-3主瓦15	19		
			13	L4c	観音寺寺礎	19	20	L4c	観音寺寺礎	19		
			13	B-a	♂71 S-270	10	20	B-a	♂50 SK290	10		
			13	B-b	河津4 SK040	10	20	B-b	河津4 SK040	11		
			13	B-c	♂17 黒褐色土	19	20	B-c	♂14 黒褐色土	11		
			メソフ	純	14	【金堂遺構】	天39-2 SK971	19	20	【金堂遺構】	♂50 S-15	11 (黒陶製)
					14	【奥山片玉】	天44 (その他の遺構)	20	20			
					14	【河津遺構】	天45 SD1200	20	20			
					14	【人形】	南1 SK010	20	20			
					14	【土】	天44 (その他の遺構)	20	20			
					14	【金堂遺構】	天74 SK1915	24	24			
					14	【動物土】	南1 SK100履り方	20	20			
14	【植物学古文書】	鎌倉伝説子守歌5期遺構跡			22	22						
15	III-10直口鉢	♂51 S-100 黒陶黒褐色土			19	20	III-10直口鉢	♂51 S-100 黒陶黒褐色土	19			
15	III-10外口鉢	♂51 S-100 黒陶黒褐色土II			19	20	III-10外口鉢	♂51 S-100 黒陶黒褐色土II	19			
東口橋 (曲口)	純	III-2C直口鉢	♂51 S-150	19	20	III-2C直口鉢	♂51 S-150	19				
			♂51 黒陶黒褐色土II	19	20	III-2C外口鉢	♂51 黒陶黒褐色土II	19				
			IV	天9 紺青灰色土	23	23	IV	天9 SK1200	20			
			IV	天4 ST000	23	23	IV	天4 SK1200	20			
			IV-γ	天45 SK1200	20	20	IV-γ	天45 SK1200	20			
			IV-δ	天97 黒褐色土 黒色土	23	23						
			IV-ε	天97 SK1575	23	23						
			IV-ζ	天45 SK1200	20	20	IV-ζ	天45 SK1200	20			
			IV-η	天97 SK1586	23	23						
			小瓶	純	III-1Ab	天50 薄赤銅・黒陶黒褐色土F-04直口鉢	35	35	III-b	♂71 黒灰土	19	
						天50 薄赤銅・黒陶黒褐色土	19	19		♂71 黒灰土	19	
						天50 薄赤銅・黒陶黒褐色土	19	19				
						天50 薄赤銅・黒陶黒褐色土	19	19				
						天50 薄赤銅・黒陶黒褐色土	19	19				
						天50 薄赤銅・黒陶黒褐色土	19	19				
天50 薄赤銅・黒陶黒褐色土	19	19										
天50 薄赤銅・黒陶黒褐色土	19	19										
天50 薄赤銅・黒陶黒褐色土	19	19										
天50 薄赤銅・黒陶黒褐色土	19	19										
浅形瓶	純	III-3	天44 SK1150	20	20	III-3	天44 SK1150	20				
			天16 SK015	23	23		天16 SK015	23				
			天45 SK1200	20	20		天45 SK1200	20				
			天97 SK1586	23	23		天97 SK1586	23				
			天97 SK1586	23	23		天97 SK1586	23				
			天97 SK1586	23	23		天97 SK1586	23				
			天97 SK1586	23	23		天97 SK1586	23				
			天97 SK1586	23	23		天97 SK1586	23				
			天97 SK1586	23	23		天97 SK1586	23				
			天97 SK1586	23	23		天97 SK1586	23				
			天97 SK1586	23	23		天97 SK1586	23				
			天97 SK1586	23	23		天97 SK1586	23				
			天97 SK1586	23	23		天97 SK1586	23				
			天97 SK1586	23	23		天97 SK1586	23				
			罎	純	III-1a		天51 赤色土	19	19	III-1a	天51 赤色土	19
天51 赤色土	19	19				天51 赤色土	19					
天51 赤色土	19	19				天51 赤色土	19					
天51 赤色土	19	19				天51 赤色土	19					
天51 赤色土	19	19				天51 赤色土	19					
天51 赤色土	19	19				天51 赤色土	19					
天51 赤色土	19	19				天51 赤色土	19					
天51 赤色土	19	19				天51 赤色土	19					
天51 赤色土	19	19				天51 赤色土	19					
天51 赤色土	19	19				天51 赤色土	19					
天51 赤色土	19	19				天51 赤色土	19					
天51 赤色土	19	19				天51 赤色土	19					
天51 赤色土	19	19				天51 赤色土	19					
天51 赤色土	19	19				天51 赤色土	19					
陶瓦類 有線	純	IV				天51 S-15	19	19	IV		天51 S-15	19
			天51 S-15	19	19	天51 S-15	19					
			天51 S-15	19	19	天51 S-15	19					
			天51 S-15	19	19	天51 S-15	19					
			天51 S-15	19	19	天51 S-15	19					
			天51 S-15	19	19	天51 S-15	19					
			天51 S-15	19	19	天51 S-15	19					
			天51 S-15	19	19	天51 S-15	19					
			天51 S-15	19	19	天51 S-15	19					
			天51 S-15	19	19	天51 S-15	19					
			天51 S-15	19	19	天51 S-15	19					
			天51 S-15	19	19	天51 S-15	19					
			天51 S-15	19	19	天51 S-15	19					
			天51 S-15	19	19	天51 S-15	19					
			新野原 有線	純	IV	天51 S-15	19	19		IV	天51 S-15	19
天51 S-15	19	19				天51 S-15	19					
天51 S-15	19	19				天51 S-15	19					
天51 S-15	19	19				天51 S-15	19					
天51 S-15	19	19				天51 S-15	19					
天51 S-15	19	19				天51 S-15	19					
天51 S-15	19	19				天51 S-15	19					
天51 S-15	19	19				天51 S-15	19					
天51 S-15	19	19				天51 S-15	19					
天51 S-15	19	19				天51 S-15	19					
天51 S-15	19	19				天51 S-15	19					
天51 S-15	19	19				天51 S-15	19					
天51 S-15	19	19				天51 S-15	19					
天51 S-15	19	19				天51 S-15	19					

路線	種別	No. 番号	分類	区間		号外区間			
				区間	区間	No.番号	分類		
和歌山線	特急	20	H-2a	864 SK2200大阪急行	9	28	H-2a	864 SK2200大阪急行	9
		20	H-1A	863 SK080	9	28	H-1A	863 SK080	9
		20	H-1	854 861	2				
		20	H-2A	854 SK110	2				
		20	H-2B	854 SK138	22	29	H-2B	854 SK138	22
		20	IV	大津府大津府線	35				
		20	IV	大津府大津府線	35				
		20	IV	大津府大津府線	35				
		20	IV	大津府大津府線	35				
		20	IV	大津府大津府線	35				
		20	IV	大津府大津府線	35				
		20	IV	大津府大津府線	35				
和歌山線	普通	20	I2	博多4次	33, 45				
		20	I2	博多4次	33, 45				
		20	I2	博多4次	33, 45				
和歌山線	急行	20	H-2	博多6回 54号主線	38, 39				
		20	H-2	博多6回 54号主線	38, 39				
		20	H-2	博多6回 54号主線	38, 39				
和歌山線	普通	21	I-1b	宮ノ原線1号主線	32				
		21	I-1 a	徳島線出入口2: 3次 1号主線	36				
		21	I-2b	南2次 3回	30				
		21	H-1a	南4次 SK410	28				
		21	I-1e	736 SK2721	18	29	III	819 藤岡急行	2
		21	III	819 藤岡急行	2				
		21	I-2b	南2次 4回	30				
		21	I-2 b	南2次 3回	30				
		21	H-1a	南1次 4回	30				
		21	I-1a	736-3	19				
和歌山線	普通	22	I-1b	819 SK004	2	29	I-1b	819 SK004	2
		22	I-1c	南1次 4回	30				
		22	I-2a	南2次 3回	30				
		22	I-2b	南2次 SK441	28				
		22	I-3	819 藤岡急行	2				
		22	H-1a	南6次 SK617	29				
		22	H-1a (小幡)	819 5-180	未観音				
		22	III-1	740 SK1790	24				
		22	III-2	819 SK004	2				
		22	IV-1	819 SK004	2	29	IV-1	819 SK004	2
和歌山線	普通	22	IV-2	819 SK004	2	29	IV-2	819 SK004	2
		22	VI-1	819 SK205	2				
		22	VI-1 (小幡)	819 SK365	11				
		23	II	徳木山道線13号車	49				
		23	III	徳島線出入口2: 3次 1号主線	36				
		23	IV	徳島寺尾町 (徳島市)	56, 57				
		23	V-1	宝満山寺野(丸屋)線1次	38				
		23	V-2b	819 SK004	2	30	V-2b	819 SK004	2
		23	VI	819 SK004	2	30	VI	819 SK004	2
		23	VI	819 SK004	2	30	VI	819 SK004	2
和歌山線	普通	23	VIII	819 SK001 下層	2	30	VIII	819 SK001 下層	2
		23	X	宝満4次 徳島急行	3				
		24	II	819 SK004	2	31	II	819 SK004	2
		24	III-1	徳島道線 SK434 (丸屋市街)	48				
		24	III-2	814 丸屋急行	1				
		24	IV-1	819 SK004	2	31a, 31b	IV-1	819 SK004	2
		24	IV-2	819 SK004	2	31a, 31b	IV-1	819 SK004	2
		24	V	819 1トロンチ	7				
		24	V-2	博多湾 (徳島) 引揚り	60				
		24	V-1	819 SK004	2	31	V-1	819 SK004	2
和歌山線	普通	24	V-2	819 SK004	2				
		24	VII	819 SK001 下層	2	31	VII	819 SK001 下層	2
		24	XI	819 SK004	2				
		24	XII-1	819 SK004	2	32a, 32b	XII-1	819 SK004	2
		24	XII-2	博多	37				
		24	XII-2	博多	37				
		24	XIV	徳島線出入口2: 3次 1号主線	36				
		24	XIV	徳島線出入口2: 3次 1号主線	36				
		24	XIV	徳島線出入口2: 3次 1号主線	36				
		24	XIV	徳島線出入口2: 3次 1号主線	36				
和歌山線	普通	25	I-1	博多	37				
		25	I-2	宝満山寺野(丸屋)線1次	38				
		25	II-1	819 SK004	2	33a, 33b	II-1	819 SK004	2
		25	II-1	819 SK004	2	33a, 33b	II-1	819 SK004	2
		25	II-2	819 SK004	2	33	II-2	819 SK004	2
		25	IV-1a	819 SK004	2	33	IV-1a	819 SK004	2
		25	IV-1b	宝満山寺野(丸屋)線1次	38				
		25	IV-2a	寶仙寺野 (徳島市街)	51				
		25	IV-3b	819 SK004	2	33	IV-3b	819 SK004	2
		25	V	博多4次	33, 45				
和歌山線	普通	26	I	819 SK004	27				
		26	II	819 SK004	2	33a, 33b	II	819 SK004	2
		26	III	徳島線出入口2: 3次 1号主線	36				
		26	IV	観音寺5号結屋 (徳島丸町)	53				
		26	V	徳島線出入口2: 3次 1号主線	36				

凡例 赤・・・大東府急行線 黒・・・徳島川南急行線
 大・・・大東府急行線 宝満・・・宝満山道線

図版引用文献

1. 太宰府市教委『大宰府桑坊跡Ⅱ』太宰府市の文化財 第7集 1983
2. 太宰府市教委『大宰府桑坊跡Ⅲ』太宰府市の文化財 第8集 1984
3. 太宰府市教委『宝満山道跡群』太宰府市の文化財 第12集 1989
4. 太宰府市教委『大宰府・佐野地区道跡群Ⅳ』太宰府市の文化財 第21集 1993
5. 太宰府市教委『大宰府・佐野地区道跡群Ⅴ』太宰府市の文化財 第27集 1995
6. 太宰府市教委『大宰府桑坊跡Ⅶ』太宰府市の文化財 第28集 1995
7. 太宰府市教委『大宰府桑坊跡Ⅷ』太宰府市の文化財 第30集 1996
8. 太宰府市教委『宝満山道跡群Ⅱ』太宰府市の文化財 第34集 1997
9. 太宰府市教委『大宰府桑坊跡Ⅹ』太宰府市の文化財 第37集 1998
10. 太宰府市教委『馬場道跡』太宰府市の文化財 第41集 1999
11. 太宰府市教委『大宰府桑坊跡Ⅺ』太宰府市の文化財 第42集 1999
12. 太宰府市教委『大宰府桑坊跡Ⅻ』太宰府市の文化財 第43集 1999
13. 福岡県教委『大宰府史跡 昭和45年度発掘調査の概要』福岡県文化財報告書 第47集 1971
14. 福岡県教委『大宰府史跡 第9・10・11次発掘調査概要』 1971
15. 九州歴史資料館『大宰府史跡 昭和46年度発掘調査概報』 1972
16. 九州歴史資料館『大宰府史跡 第30・31・32次発掘調査概報』 1974
17. 九州歴史資料館『大宰府史跡 昭和49年度発掘調査概報』 1975
18. 九州歴史資料館『大宰府史跡 昭和50年度発掘調査概報』 1976
19. 九州歴史資料館『大宰府史跡 昭和51年度発掘調査概報』 1977
20. 九州歴史資料館『大宰府史跡 昭和52年度発掘調査概報』 1978
21. 九州歴史資料館『別図 白磁・青磁分類図』『大宰府史跡 昭和52年度発掘調査概報』 1978
22. 九州歴史資料館『大宰府史跡 昭和53年度発掘調査概報』 1979
23. 九州歴史資料館『大宰府史跡 昭和55年度発掘調査概報』 1981
24. 九州歴史資料館『大宰府史跡 昭和56年度発掘調査概報』 1982
25. 九州歴史資料館『大宰府史跡 昭和60年度発掘調査概報』 1986
26. 九州歴史資料館『大宰府史跡 平成元年年度発掘調査概報』 1990
27. 福岡県教委『福岡南バイパス関係歴史文化財調査報告 第2集』 1975
28. 福岡県教委『福岡南バイパス関係歴史文化財調査報告 第3集』 1976
29. 福岡県教委『福岡南バイパス関係歴史文化財調査報告 第6集』 1977
30. 福岡県教委『福岡南バイパス関係歴史文化財調査報告 第8集』 1978
31. 福岡県教委『今宿バイパス関係歴史文化財調査報告』 第4集 1976
32. 福岡県教委『京ノ原道跡』役所地所開発株式会社 1976
33. 福岡市教委『博多Ⅱ-原級編』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第86集 1982
34. 福岡市教委『都市計画道跡博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ博多』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第183集 1988
35. 福岡市教委『都市計画道跡博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ博多』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第184集 1988
36. 福岡市教委『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ博多』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第105集 1984
37. 福岡市教委『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ博多』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第105集 別冊 1984
38. 福岡市教委『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅴ博多』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第126集 1986
39. 福岡市教委『博多』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第126集 冷泉町155番地内道跡調査会 福岡市教委 1986
40. 福岡市教委『都市計画道跡博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ博多』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第205集 1989
41. 福岡市教委『鴻巣道跡Ⅰ』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第270集 1991
42. 福岡市教委『鴻巣道跡Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第315集 1992
43. 福岡市教委『熊永道跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第242集 1991
44. 福岡市教委『博多50』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第447集 1996
45. 福岡市教委『博多60』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第543集 東長寺遺跡地内道跡調査会 福岡市教委 1997
46. 筑紫野市教委『矢倉道跡』筑紫野市文化財調査報告書 第8集 1982
47. 久留米市教委『筑後国府跡・区分寺跡』久留米市文化財調査報告書 第44集 1985
48. 久留米市教委『横道道跡(Ⅰ)』久留米市文化財調査報告書 第49集 1987
49. 北九州市教委『横木山道跡』北九州市文化財調査報告書第24集 1977
50. 佐賀県教委『下中伏道跡』佐賀県文化財調査報告書第54集 1980
51. 東晋郷村教育委員会『雲仙寺跡』東晋郷村文化財調査報告書 第4集 1980
52. 齊木秀雄編『佐助ヶ谷道跡(鎌倉兼倉庫用地)』築地調査報告書』佐助ヶ谷道跡発掘調査団 1993
53. 小宮路賀宏『観音寺経塚の調査』『九州歴史資料館研究論集19』 1994
54. 横田賢次郎・森田勉『大宰府出土の輸入中国陶磁器について』『九州歴史資料館研究論集4』 1978
55. 森田勉『北部九州出土の高麗陶磁器』『貿易陶磁研究NO.5』日本貿易陶磁研究会 1985
56. 亀井明徳『日本出土の越州高麗陶磁器の諸問題』『九州歴史資料館研究論集1』 1975
57. 岡崎敏『聖徳寺発見の遺物について』『九州大文化史紀13』 1968
58. 小田富士雄編『宝満山の地室』太宰府顕彰会 1982
59. 田中克子『北部九州における越州高麗青磁製品について』『先史学・考古学論叢 熊本大学考古学研究室20周年記念論文集』龍田考古会 1994
60. 山本信夫・山村信崇『中世食器の地域性 九州・南四国篇』『国立歴史民俗博物館研究報告 第71集』歴史民俗博物館編 1997
61. 山本信夫『北宋期貿易陶磁器の編年-大宰府出土例を中心として-』『貿易陶磁研究NO.8』日本貿易陶磁研究会 1988
62. 山本信夫『北宋期越州窯系青磁の検討』『大宰府陶磁器研究』森田勉氏遺稿集-追憶集刊行会 1995

写真図版



白磁碗



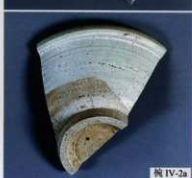
白磁碗



碗 IV-1b



碗 IV-2ac



碗 IV-2a



碗 V-1a



碗 V-1b



碗 V-2a



碗 V-2b

白磁碗



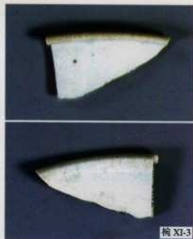
白磁碗



白磁碗



白磁碗



碗 XI-3



碗 XII-1b口緣部



碗 XI-5



碗 XI-4



碗 XII-1b底部



碗 XII-1a



碗 XIII-1b



碗 XIII-2b



小碗 X-1



小碗 I-3



小碗 1c



小碗 2bc



小碗 XIV-b

白磁碗・小碗



白磁皿



白磁皿



Ⅲ VII-2a



Ⅲ VII-2b



Ⅲ VIII-1b



Ⅲ VIII-1b



Ⅲ VIII-1c



Ⅲ VIII-1'



Ⅲ VIII-2b



白磁皿



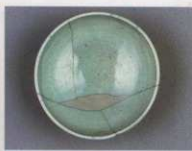
皿 XI-2



皿 XI-3?



皿 XI-5



皿 XI-6

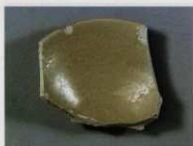


皿 XI-7



皿 XI-4

白磁皿



碗 1-1a



碗 1-1b(2)



碗 1-1b(1)



碗 1-2a

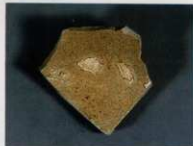


碗 1-2b



碗 1-3

越州窯系青磁碗



碗 I-5



碗 II-1b



碗 II-2b



碗 II-2c



碗 II-2d



碗 II-2e



碗 II-2f



碗 III-1a



碗 III-1b



碗 III-2b



小碗 III-1b



越州窯系青磁碗·小碗



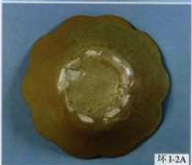
环 I-1



环 I-3



皿 I-1b



环 I-2A



环 III-b



皿 I-2

越州窯系青磁碗·皿



越州窯系青磁皿・淺形碗・龍泉同安窯系青磁



龍泉窯系青磁碗



碗 I-6a



碗 I-6b



スタンプ「金玉環堂」



碗 II-a



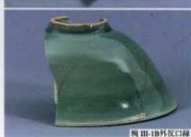
碗 II-c



碗 III-10直口縁



碗 II-b



碗 III-10外反口縁

龍泉窯系青磁碗



碗 III-2C 底口縁

碗 IV

碗 IV 工



碗 III-2C 外反口縁

碗 IV 7

東口碗 III b

龍泉窯系青磁碗・束口碗



龍泉窯系青磁小碗



龍泉窯系青磁小碗・浅形碗・坏



龍泉窯系青磁坏



龍泉窯系青磁皿



碗 I-1a



碗 I-1b



碗 III-1a



碗 I-1c

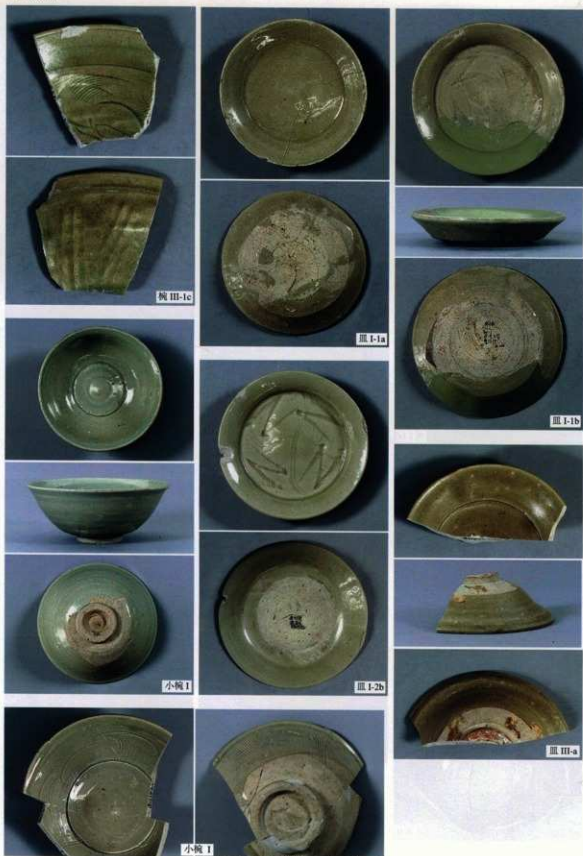


碗 III-1b



碗 II

同安窯系青磁碗



同安窯系青磁碗・小碗・皿



图 I-1



图 I-2A



图 I-2Bb



图 II-1b



图 II-2a



图 III-1A

初期高麗青磁碗



碗 III-2B



皿 III



盤 III



鉢 I-1b

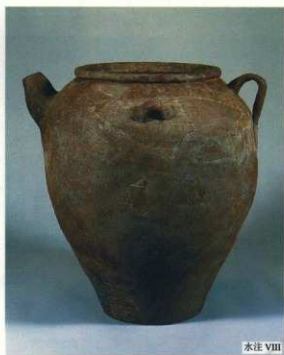
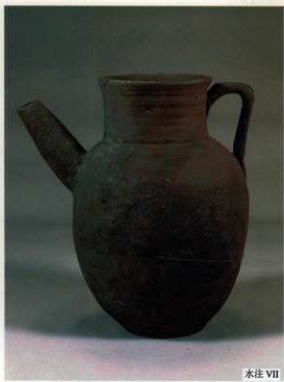


鉢 IV-1



鉢 IV-2

高麗青磁碗・皿・陶器盤・鉢





四耳壺 II



四耳壺 IV-1



四耳壺 IV-1



四耳壺 VI-1



四耳壺 VII

陶器耳壺



四耳壺 XII-1



反耳壺 XI-1



四耳壺 XII-1



六耳壺 IV-2

陶器耳壺



壺 II-1



壺 II-2



壺 IV-3b



壺 II-1



壺 IV-1a



甕 II



甕 II

太宰府市の文化財 第49集

大宰府条坊跡XV

—陶磁器分類編—

平成12年3月

編 集 太宰府市教育委員会

発 行 太宰府市観世音寺1-1-1

印 刷 株式会社 秀巧社
福岡営業所

福岡市中央区渡辺通り一丁目12-9アジビル7F